

ベルセルク／ガンビーノ
転生！？

霧桜ル一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの朝起きるとガンビーノに!!

憑依?いや違う。転生だ。

ガンビーノとしてベルセルクの世界に産まれ、何十年と育ってきた転生者。
日本人らしくない世界観を持ちながら生き、記憶と共に日本人特有の思考が芽生え
る。

そして己の運命を思い出す。『死ぬキャラ』だと……
生きたい。ここまで何十年と生きてきたんだ、当然死にたくない。なれど”
俺”は俺の誇りに背いてまでも生きたくはない。

このクソつたれな世の中でも1人くらい運命を受け入れない、常識外れな人間が居たって悪かねえはずだ！

これはそんな自身の決断で生きていく男の物語。

※アンケート集計結果、このストーリーはグリフィスの夢が叶う（遠回り）物語になります（・▽・*）
あしからず

目次

番外編

銀蜘蛛メンバー（51話現在）

1

亡命渡航のひととき

8

第1期 【足搔き苦しんだ日々】

望んでたのと違う：

13

バタフライ・エフェクト

23

なんでそうなんのお!?

29

もう好きに生きるぜ!

33

ガンビーノの変化

37

ガツツの成長

41

運命の拮抗線

52

乗り越えた先に

現実は甘くねえ

親の心子知らず

男の子は戦いが好き、はつきりわかん

だね

61

俺のガキ（息子）に何をする！

66

66

ガツツ（貞操）の危機

71

ゆ

る

さ

ん

!!

運命が殺しにくるんだが…

76

Gが目覚めた

81

親は子を崖から突き落とすモンだろ？

86

47

現実は甘くねえ

親の心子知らず

男の子は戦いが好き、はつきりわかん

56

52

47

賽は投げられた

男2人の出会い

カルテマとアドン

ここが最後の大戦（おおいくさ）

170

運命（きだめ）受け止めた先に

175

その手が掴む未来は

さらばミツドランド

第2期　【茨の道へ】

急がば回れ

クシャーン上陸

知らぬが仏

152 144 139 134 128 123 117 112 107 102 96 92

子離れるべきだな…！

これが俺の愛だ

浪漫は時に常識を狩る

繫がる運命

因果律（神のシナリオ）は変えられない

175

白黒の邂逅

ドルドレイ前哨戦

裏切りの決断

交渉会議

ドルドレイ奪取

光の鷹・暗闇の蜘蛛

206 201 197 192 183

悪役の矜持

人でなしの正義

若きガニシユカ・心の平穏

地獄の再来を

道化の顔は笑つてゐるか

今更ガバがあつたとかマジ?

温室育ちの蛹（サナギ）の保護者

祖国か・未来か

227

約束されたチエツクメイト

掌（てのひら）の中の絡繹（からくり）

レッドカード作戦

神の天敵

クシャーン統一戦

嫁騒動

レッドカード作戦

ヴァルナ・ベルファ令嬢

クシャーン統一戦

汚名を対価に

レッドカード作戦

レッドカード作戦

262 254 250 245 240 235 231

222 218 212

289 282 278 272 267

1 銀蜘蛛メンバー（51話現在）

番外編

銀蜘蛛メンバー（51話現在）

ロシーヌ（女）

ガンビーノの養女で文武両道の才女に育つたがどちらかと言うと武闘派の気質が強い。

ガツツには勝てないがそこらの熟練兵相手でも負けない強さを身につけて、ガンビーノが嘆くはめに。

クシャーンの軍務総書（最高司令官）の年頃の娘というのもあって婚約の話が出てきてはいるが全くガンビーノが握り潰している。

【民政官補佐見習い】

バーラン（男）

無類の酒好きにしてガンビーノ傭兵团時代から歩兵部隊の指揮を任せられている古参メンバー。

ちよつとバカで言動はどこかチンピラを思わせる。

「好き勝手に生きる」男で、基本的に指図されるのが嫌いだつたがガンビーノと居ると新しいもの、面白い物がたくさん見られるからという理由で着いてきてるらしい。

【歩兵第1連隊・第1大隊長】

モスヴィイラント・バーナー（爺）

ガンビーノ傭兵团の老将で比較的裕福な平民出身。

一応孫も居るようだが傭兵になつて以来会つていらない。

団の相談役のような立場だつたが非常に好戦的で、老いで死ぬ事を嫌がつていた。

ドルドレイ撤退戦で戦死

ドノバン（ホモ）

肉食系のホモマツチヨ。本人は酔つたガンビーノからガツツを買つた気になつてたが話を聞いてなかつたガンビーノの怒りを買って暗殺された。

表向きは、深追いし過ぎて反撃され戦死。となつている

ウルバン・キリターナ（男）

一言で言うと名医、ただし出自は不明でなんで傭兵团に属しているのかも誰も知らない。

朝に弱い清々しいイケメンで貴族との付き合いもある為、ガンビーノの情報源になる

事も。

【衛生軍医長】

カルテマ（女）

元子爵家の令嬢で家の没落と共に家名を捨てて入団。

当時は護身程度の剣術しか出来なかつたが素質があつたのかぐんぐん腕を上げて団の中でも上位の強さを誇る。

ロシーヌの教育係で仲がいいが、バーランは苦手なのかあまり仲が良くない。

【歩兵第1連隊・第2大隊長】

ヴァランシャ（男）

かつてミッドランド兵を100人以上ぶつ殺しまくつた大男。

名も売れてきた頃にガンビーノ傭兵团と戦つて敗戦、降伏したところをガンビーノにしつこく口説かれて入団した。

地上では強いが船に乗ると途端に酔う。

【歩兵第1連隊・第3大隊長】

ゲリコ（男）

元々は伯爵家に使えていたがガンビーノが気に入つて、半ば脅迫する形で譲り受けた騎士。

ゲリコの場合、騎士とは階級だけで馬には乗れない。
実際ムリに乗馬しようとして馬を潰し、アドンに怒られて以来大人しく歩兵を率いて
いる。

【歩兵第2連隊・第1大隊長】

ゾンダーク（男）

ゲリコとはまた別の伯爵家の出身。籠城戦に雇われていたガンビーノの強さにハ
マつて誘いに乗った。

この時にガンビーノは脅迫せずに大金を積んでゾンダークを伯爵から買い取った。
その際の「伯爵とは仲良くしてみたい」と言う言葉の真意を知る者はいない。

【歩兵第2連隊・第2大隊長】

ナバラ（オカマ）

元ダイバ配下のクシャーン人。嫁騒動の後に「使える奴よこせ」とガンビーノに詰め
寄られたダイバが断りきれなかつた結果、今に至る。本人も上のやり取りを大体知つて
るが特に不満には思つてないらしい。

むしろそれだけダイバから認められていて、ガンビーノにも出世させて貰えるくらい
には信用されてると喜んでたりする。

得意武器は手甲（白兵戦用）。

【歩兵第2連隊・第3大隊長】

アドン（男）

元チユーダーの騎士団長を務めてた隠れた才能を持つている
アホな一面が強いもののガンビーノの仲間たちとすつかり馴染んでしまっている。
ガンビーノと出会う前にガツツを襲つてしまい弟のサムソンを討たれてしまつた。
ガンビーノの有する騎兵は分類を問わず指揮を任せられている

【重装騎兵大隊長】

エルドリオ・ゲルガー

動けるデブ。そしてアドンに勝る超重装の騎士。

金より甘味のガンビーノもドン引く甘いもの好きで、攻め落とした城の食料庫を漁り
に行く姿はすっかり名物になつてゐる。

アドンの鎧はボウガンを防げないがゲルガーは距離によるが弾けてしまう為、弓兵に
恐れられている。

兜の三本角がチャームポイント。

【100騎長】

キュリアス・カマデウス（男）

傭兵团時代からいる中堅将校で軽装騎兵の小隊長。

基本的にはアドンの指揮下にいるもののたまにガンビーノから直接指示を受けることも。

元騎士階級で好戦的な一面を持つていてカマキリに似た空気をまとっている。

【100騎長】

ギーエン（男）

元・黒羊鉄槍重装騎兵团の団長。原作と違つてドルドレイ陥落（ガンビーノによる攻略）時、ゲノンから借りていた為ガンビーノの指揮下におり、鷹の団と戦うこと無く生き延びた。

その後、ドルドレイ撤退戦で団員を削られながらも共に脱出。最終的に再編成されたタイミングでアドンと指揮権を賭けて決闘。

互角に戦つたが、アドンのやたらと長い技名やセリフに気を取られて負けた。（めつちや凹んだ）

【100騎長（兼） 次席指揮官】

ジヤリフ（男）

クシャーレン人の伝令役で1番最初にガンビーノと会った縁でダイバの所から引き抜かれた。

ミツドランド語にも長けていて通訳や翻訳をする事も。

ガンビーノとは上官と部下の関係で、ガンビーノの残虐性の裏にある真意に気付けていない。

【伝令官】

髭骸骨（男）

あだ名は”髭”で海賊船の船長をしていた。

亡命航行中だつたガンビーノ達の改造戦艦と戦つて負けたが、傘下に入る事を条件に戦艦を譲渡された。

それにあたつて足を洗い奴隸商に転職してミッドランドとクシャーンを行き来しながら集めた情報をガンビーノに渡している。連絡手段は伝書鳩が主流。

【海軍司令】

亡命渡航のひととき

「ねえ～～暇あ～暇なの～～」

「んな事言つたつてな…釣りすつか?」

「やだ」

ああ、そう言うだろう未来は見えてた。

実際何も娯楽のない船で2日も我慢出来てた辺りは褒めるべき…なんだろうな。
だからつて海の遊びなんかろくに知らん俺にどうしろってんだ?

広いから鬼ごっこなりは出来るだろうけどロシーヌの事だ、追い詰められたら帆先なり甲板とかに登つて落ちかねないしな。

さすがに40過ぎて50近い体じや子供の遊びに付き合うのも辛い。

ん～～～…

「チエスするか?」

「難しいからやだ」

「トランプはどうだ?」

「いつも負けるから楽しくないの、やだ」

「どないせいつちゅーねん。」

そもそも他は俺自身が遊んだ記憶が無いしな…。
まさか賭博じみた事を教えるわけにもいかねえし。

「ええい！カルテマアーー！」

「えつ、私？」

「お前に任せる。俺じゃロシーヌが気に入る遊びを思いつかねえ」

「ハイハイ、ロシーヌ～？」

「何して遊ぶの？」

「なんか食い付きが俺より強くねえか？」

「まあそりやそうか。女の子の遊びは女のカルテマの方が理解してるもんだろうし、初

めからアイツに任せりや良かったのか。
「小舟ボート出して死にかけてるバーランでもつつきに行く？」

「行くーーー！」

「ちょっ！」

「ウツソだろお前！」

「待て待て待て、何言つてんだテメーは！ガキ連れてする遊びじゃねーだろ！何考えて

んだ」

「はあ、でもロシーヌは乗り気だし…」

「でもじやねーよ。もういいお前には頼まん」

「ちえつ、バーランいじめるいい機会だつたのに」

「なんか言つたか」

「ううん、なーんにも」

「つたく、いつたいバーランになんの恨みがあるんだよ。これじや迂闊にロシーヌの世話なんか頼めねーじやねえか。

ウルバンは…向こうに移つたんだっけ。
となると…。

「おいアドン!!」

「ええ！ 私か！」

「あんだけよ文句あんのか？釣り餌にすんぞ」

「いやいやとんでもない！喜んでお相手しよう」

「つて事だロシーヌ。アドンで遊んでこい」

「いいの？」

「ああ、思いつきりな」

「ガンビーノ：私の聞き違えか？何やら言い違えておらんか」

「何も言い間違えてねえよ。んじや娘を頼むわ」

「さあ遊ぼう！逃げるなアドン!!」

「ぬわああーーー・ガンビーノオー！」

これで良し、俺はその辺の奴らと夕飯の魚でも釣つて暇つぶしそうかな。

アドンがまだなんか言つてるがもう知らん。

釣り糸を垂らしてジーッと揺れる海面を見ると、なんとも気の抜ける感覚を覚えた。

何かリラックス効果でもあつたんだろうか。

頭がほんのり火照るような、体がほぐれる様な感覚。

「そういや久々にゆつくりするな…」

のんびり待つていると魚より先に団員達がつられて近付いてきた。

「おっガンビーノも釣りか？」

「銛持つて飛び込むイメージが強いぜ、釣りつて印象じゃねーな w

「例のアレ使つて取るとか言わんでくださいよー？」

「バツカ、あれは魚にやデカすぎる w」

「つたく、テメーらは静かに糸も垂らせねえのか？ちつたア落ち着いて座つてろや」

「「「へへへつ w ヘーい」」

「…1番デカいの釣った奴にはとつておきの酒をくれてやる。 気張つていけや」

「「まじかよ！」」

「さすがボス！」

「「「うつほおおーーー！」」

どう扱つても騒がしい奴らめ。

まあこんな日があつても悪かねえ…よな

第1期 【足掻き苦しんだ日々】

望んでたのと違う…

「…う、うおアアアアアアアア!!」

起きたら顔が変わつてた事、みんなは経験ないか?

俺はまさに今、そんな経験をしてばちばこ驚いている。
お、落ち着け俺。

いくら何でもそんな訳あるか。

転生とか憑依なんてモンは漫画かアニメ限定の特権展開じやねーか。それをオメー、
一般庶民たる俺が経験するなんて考えられねえだろ常考。

いやでも知つてるつーか、見覚えあんだよなこの厳つい顔。俺の記憶違いじやなかつ
たらベルセルクのガンビーノだと思うんだけど。

酒の勢いでガツツ襲つて殺られちやうあの…。

確か漫画の方じやガンビーノつて見た目40後半くらいのオッサンだつたんだけど、
俺今40前半なんだよな…。

あれ？もしかしなくても俺詰んでね？
いやいやいや、よくある話だろこんなん。

リアルな夢見て起きたら1人恥ずかしくなつて「うおおお」って悶えることになる才チのアレだろ。分かつてんだよ。

こうやつて頭から水でもかぶりや簡単に目が覚め——ないだと？!
えつ、つまりこれつて…

Q, 朝起きたらガンビーノでした。どうしたらいいですか？
A, 寝ぼけてんじやないですか？

ああー終わつたわー
「どうした！ガンビーノ！」
やめろ今来んな。

現実逃避しようとしてんのになんでテメーらの顔見なきやいけねえんだよ。戻され
ちやうだろが！
「いや…どうもしねえ、ちよつと寝覚めが悪かっただけだ。俺ア二日酔いで頭いてえん
だ、騒ぐんじやねえ」

悪夢と二日酔いで不機嫌ムードを演出してそれっぽく顔をしかめてみせる。

「ここ」で目頭を押さえて軽く唸る小技も忘れない役者つぶり。

「ああ…すまねえ、まあ昨日あんだけ飲んでりやなあ…」

よし、さすが俺の部下だ。

下手に追求して来ないから誤魔化しやすくて助かる。

仮にも団長相手に呆れ顔した挙句ビックリさせた事は許してやろう。俺は優しいからな

しつかしどうしたものか。

自分がガンビーノだつたのは理解した、納得するとかは後だ。今がどの辺りの時系なのかを調べなきやいかん。

よくある話だと普通は物語の主人公に転生するもんだろうに何故かガンビーノに転生ときたもんだ。

死にキャラ転生とか誰得よ？

転生つたらガツツとかグリフィスとか、もつと気の利いたキャラがいただろうによー。

無神論者でもキレちゃうよ？ マジで。

いや待て、そうだガツツだ。

今がガツツを拾う前なのか、もう居るのかそれを確かめきやいけねえ。
俺の生死を左右する重大事案や！

えつと…たしか彼女がガツツを拾つて来るんだつたよな。少なくとも漫画じやそう
だつた。

すぐに確かめねーと！

結果から言うと、どうやらシスはまだガツツを拾つて無いらしい。

唐突に駆け込んできた俺に驚いた様子だつたが「子供はどうした」と聞いたところ、不
思議そうに見つめてくるだけだつた。

これはワンチヤンあるかもしれない。これから動き次第では生きられる希望が…

!!

天幕に引き返す道すがらすれ違う傭兵達を見て回る。

コイツらは俺の、ガンビーノの部下達。平時には盗賊と大差ない連中だから別に赤子
の1人や2人、俺が見て見ぬふりをした所で問題は無いはずだ。

ガツツを拾わない。
それしかねーだろ、俺が生き残る方法なんてよ。

バタフライ・エフェクト

俺が何者か、それを思い出してはや数ヶ月が過ぎちまた。あつという間に今日を迎えた気分で憂鬱だ。

体感時間が狂つちまつたらしい。

『ガッツを拾わないようにする』つたつて今の時勢じや親を亡くした子供も赤子もウンザリするくらいには居る。

赤子の見た目なんざ大して違わねーってのにどうやつて見分けりや良いんだよ！あんだけか、漫画じやシスがガッツを拾つてくるんだつたよな？て事はだ。

そのタイミングさえしのげれば何とかなつたりしねーかな。

いや、無理か。そもそもいつの話なのか思い出せねえ時点でのこの考えは無駄だ。

悩んだ末に俺は思い至つた。

もしシスがガンビーノに愛されてたら？子供を拾おうとは思わないかもしれない、

と。

今まで言うな！わかってる、クズ野郎じみた事言つてんなつて。

でも生きたいんだ！俺は生きたい。

そんな本音を隠しながら今日もシスのテントに顔を出している。

「痛くねえか？シス」

「あーーー！ううーー♪」

いつからだつたかシスの髪をとかしながら話しかけるのが当たり前になつていた。
「なあシス、子供が居なくとも俺アお前が居たらそれでいい。1人が寂しいんなら俺が
側にいてやるだからよ…」

『赤子を拾わないでくれーー』

ダメだ言えねえ。

この世に生まれて40数年。本氣で惚れた女に、死産で気を病んじまつた妻に、どの
面下げて言えってんだ。

「うーーー？」

シスの手が言い淀んだ俺の頭をポンポンと撫でてくれる。
嬉しさと自己嫌悪が胸の奥で混ざる。

やめだ、もうやめよう。

いつそシスの好きにさせるのも悪かねえ。

「ああ、大丈夫だ。何でもねえよ」

撫でてくれるシスの手を優しく握り返しながら笑顔を返す。

思えば作り笑顔ばかりしてゐる気がする。

おかしいな：前世でも今世でもこんなふざけた考えした事無かつたのに。

お前だつてこんなクソツタレな世界に好んで生まれた訳じやねえってのにな。

戦争に飢餓に重税、貧困に犯罪に贈収賄。どこに行つてもどれかが蔓延していやがる。

聞くだけだとろくでもねえ世界だろ？ 実際そうさ。

こつちじや100年戦争つつーんだが：分かりにくいか？

そうだな、中世ヨーロッパの戦国時代つて言つたら分かるか？
まあそんな時代だ。

「あう——」

シスの髪の手入れが終わると、正座したシスが自分の膝をポンポンと叩きながら誘つてくる。

最近してくれるようになつた膝枕だ。

昼寝にも丁度いい時間だから素直に乗つておこうと思う。

寝転がつた瞬間、武装した男が駆け込んで来なけりやもつと良かつたんだけどなあ：

「おーいガンビーノ!! 丘3つ向こうにチューダーの轍重隊が通過中だとよ。どうする、久々にやるか?」

……くそつ、シスの膝枕で昼寝決め込むつもりがタイミング悪いこつた。
仕方ねえな、「ダメだ」って言つたつて行くだろてめえら。ちよつと待つてろ俺も行く。

「チツ、今度はマトモな物なんだろうなあ。前みたいに食えねえブツだつたらぶん殴るからな?」

「分かつてるさ、ちゃんと調べたぜ。ブツは食料が主であとは雑貨物みたいだ」

「雑貨か…」

たまにはシスに何かプレゼントするのも悪くない。

氣の病で言葉を忘れちまつてゐるが、今もシスには愛情がある。時間があればシスの面倒を見てやつてるが伝わつてゐるのかよく分からねえ。

明確に伝えるにはいい手じやねえか?これ。

「ん?なんか言つたか?」

「何でもねえよ。さつさと行きてえ奴ら集めてこい」

「おう!!」

部下共のストレス発散をさせるついでだ。ブローチでも櫛でも何でもいい。

シスの喜び そうなもんがありやあ頂くまでよ。

だからよシス…ガツツを、拾わないでくれ

なんでそうなんのお!?

「ウオオオオ——ツ!!」

長い戦闘が終わった。

ミッドランドの辺境貴族に雇われてチュークーのクソ野郎共と殺り合つて2ヶ月。奴らが引き上げてくれたおかげで俺らもやつと解放された。

また多くの部下が、戦友が、どうでもいいけど貴族お抱えの騎士達が戦場に溶けていった。

俺は1人、城壁の上で落とさなかつた命を抱きしめるように膝を抱えている。

右を見れば死者の世界が、左を向けば生者の世界が。

地平線に沈む夕日に迫る夕闇が下の景色と合わさつて、今いるココがこの世とあの世の境目ではないかと錯覚してしまう。

勝ち戦に沸き立つ生き残りを見てると、やっぱりこれが現実なんだなと再認識させられる。

悪夢として片付けられたらどれだけいいか…。

それはそうとつい最近、大切な事を思い出せた。
そう、ガツツを拾う事になる場所だ。

はつきりと覚えてる訳じやないが、雨上がりで木に人が吊るされてる場所だった。
溜まりに溜まつた疲労で動きたくなかった俺は手近な部隊長に面倒事を押し付ける
ことにした。

このくらい楽したつてバチは当たるまいよ。

「おいバーラン、こんな血鎧臭え城からさつさとおさらばするぞ。生き残り集めて出発
の用意しどけ。準備出来たら呼びに来い」

「あいよ、ボス」

慣れてるとばかりに各部隊長を集めて指示を飛ばしていくバーランを尻目に、焼け
残つた馬小屋に向かう。

俺か？俺はいいんだよ。

酒と一緒に藁山にダイブしてサボんだから。

シスんとこ行つても良いんだが血なまぐさいのは好きくないらしい。「うーーー！」つ
て威嚇されちまうんだよなあ…。

お気に入りの酒を煽りながら兜を外す。

もしかしたらこのままガツツに出会わないなんて事も有り得るんじやないか?そんな事を考えちまう。

よく言うだろ?「運命なんて簡単に変えられる」「運命は簡単には変えられない」つてよ。

前者はバタフライ・エフェクトだ。僅かな違いが世界の流れを乱す事で変えられるとしている。後者は運命の自己修復だ。人間で言うとこの自然治癒力だな。運命は定められた結末に回帰しようとする傾向がある。

俺が生き延びるために運命の自己修復を上回る力で流れを乱すしかない。そして運命を変えたら最後、戻れない手探りの人生を歩むことになるのが決まってる。つたく、転生なんてするもんじやねえなあ……

なんか気分が重くなっちまつた。

のんびりチビチビ飲んでた酒が半分くらい減った頃、バーランが呼びにきた。
「ガンビーノ! 皆揃つたぜ、後はアンタの命令待ちだからな。飲みもその辺にして来てくれ」

「んあ? ああ、そうだな」

まあ、なるようになれ。だな

「バーラン、カルテマに女達の馬車の護衛に付かせとけ。無えとは思うがいつ襲撃され

ても平気なようにな」

分かつた、と馬で走り去つていくバーランの後を自分も馬に乗つて追いかけ団員達に合流する。

「よおしてめえらあ！ 帰るぞ!!」

叫んだ俺に全員が歎声で答える。

これでいい。これでいいんだ。俺は傭兵として生きてそして死ぬ、死ぬまでは必死で生き延びる。

後悔の無いように、な。



おかしい：

何かがおかしい…

この感覚…どつかで…

デジヤブ? 分からない。でもどつかで見たことがある気がする。

そうだ、見覚えがある。あの木。

そう: 丁度あんな感じに人が吊られてて…

「ん? どうしたガンビーノ、死体なんか見つめて…今どき珍しくもねえだろ。大方商隊
か近くの村が襲われて遊ばれた挙句に吊られたんだろ……おいガンビーノ? どうした
?」

あれは…いや、まさか。

「バーラン、子供…いや赤子は見えるか?」

「え、ガキか?…………いや、見えねえな。助かつたんじやねえか? まあ探しやあその
辺に隠れてるかもな。はははツ」

俺には笑い事じやないんだが。

いや、だけどまたま似てる雰囲気なのかもしねれない…

「笑うトコじやねえだろ: 探さなくていいぞ、無視して通れ」

「だな、金目のもんなんか残つてなさそ удしだしな」

不謹慎な奴め。

ああ、殺し殺されの傭兵家業やつてる俺が言えたこつちやねえか。
自嘲気味に笑つた瞬間だつた。

「ガンビーノ!!」

カルテマの声だ。

なんだ？ 後ろでなんかあつたのか？

「んだよ言つたじやねえかシスから目エ離す n 「すまないツ！ シスが勝手に……!!」

「あ” あ？」

「——落し子、拾つちまつた……」

なん……だと!?

もう好きに生きるぜ！

シスがガツツを拾つちまつた。

カルテマ曰く吊られてた妊婦の骸から赤子が流れ落ちて、産声をあげた、と。
そんでそつちに氣を取られた隙にシスが馬車から飛び出してきて止める間もなくそ
の子を抱きかかえて離さなくなつてしまつた、ねえ。

：つかしいな、ガツツ拾う流れつてそういう感じだつたつけ？

確かにあの場所には複数木があつて同じよう�이人が吊られてたけどよ。：

冗談キチイぜ。

ロシアンルーレットの当たりを引いちまつたつて事じやねえか！

まあ分かつてたさ、あの景色を見た時に「まさか：」つて察したんだからよ。
思えば本当にふざけた人生だつた。

ガンビーノとしてこの世に生まれ育つて40年と少し。

今更になつて前世持ちだつたと氣付いたところで運命の死を回避するには余りに遅
すぎる。

その日その日を生きるだけでも必死なのに俺の道は墓穴にまつしぐらと来たもんだ。
詰みだろ、こんなん。

「くそッ……ちくしょう……ッ…………」

天幕の中で声を殺して嗚咽する。

生きたい、死にたくない。いや、生き物なればいざれ死ぬ。だがいつ死ぬか分からぬ
から明日を思えるのであつて、死期が確定してる今はそれしか見えない。

どうしようもない：

いや、まだ手はある。

ガツツを殺してしまえばいい。まだ赤子だから簡単な事だ。

皆が寝静まつた頃にでも殺つちまえれば分かるまい。

死人から生まれ落ちたガキだ、長生きできるなんて誰も思っちゃいない。

だが今までして生きながらえて何になる? 今の俺は傭兵であり、傭兵团團長であ
り、ガンビーノなんだ。

それにシスからガツツを奪つたらシスはどうなる? 俺を恨むか? いや、きっと壊れ
ちまう気がする。

ならどうする? ガンビーノとしてじやなくて”俺”個人としてどうしたいか、決
まつてる。ガツツは殺さない。

ああそうだ、ガツツはまだ赤子だ。

人格形成も歩むだろう未来も、きっと変えられるはずだ。俺自身の未来はもう変わらないだろうがガツツなら…。

きっと俺はガツツに討たれる。いつか、どんな状況かは分からぬがその運命は変えられないんだと思う。

それは仕方ない。

未練タラタラだし死にたくなんて無いけど無様な死に方だけはしたくない。

これは俺の最後の、「どうせ死ぬなら」の意地だ。

決めたぞ。

ガツツに俺が出来る限りの教育を叩き込むんだ。

剣以外の道を示してやろうじゃないか。文字、歴史、数学、医学、道徳…はちょっとアレだが生きる道の選択肢くらいは増やしてやつても悪くなからうよ。

「ああ、クソッ！やる事増えたじやねえか！」

でも悪かねえ。

俺が死ぬまでにガツツをいつぱしに育て上げてみせる。

原作云々なんざ知るか！ガンビーノらしく生きるなんてもう終いだ。

俺はガツツの育ての親になる。

そうと決めたら善は急げだ！

ウチで唯一、子育ての経験を持つのは女兵士のカルテマただ一人。彼女の天幕に急ぐ。シスが母親で俺が親父か。
うん、良いじゃねえか。

逃げるばかりが道じやねえつてこつた！

ガンビーノの変化

ガンビーノ傭兵团。

戦時は敵兵を圧倒する程の歴戦の戦士達が集まる傭兵团。そして平時には近づくだけで襲いかかってくる危険な猛獸共。

それがミツドランド、チューダー両者の認識だつた。

いかにも危ない奴等の寄合い世帯。老いも若きもその目は並の兵士より鋭く、精神まで洗練されている。

そんな団員達の視線は1カ所、ガンビーノ、シス、そして赤子に注がれていた。
ガツツ

赤子を抱きかかえるシスに寄り添うように、その強面をなんとか緩めて笑顔を作ろうと奮闘するガンビーノ。

だが悲しいかな、ぎこちない笑みは不気味さを増幅させて赤子の泣き声が一段と強くなるだけ。それをシスが静かにあやす。絵画のような幸せな家族の姿がそこにはあつた。

しかし、傭兵团のほぼ全員がガンビーノの行動を理解出来ずに啞然とした顔を並べて

いる。

ガンビーノは一体何をしているんだ…？と。

～◇カルテマ◇～

シスのあんな笑顔は久しぶりに見た。

言葉を無くす前を最後に、ついぞ見れなかつた誰かを慈しむ様な優しい微笑み。

その腕には赤子を抱きかかえて、傍らにはガンビーノが。

いつだつたかシスから聞いた夢の話。「幸せな家族を作りたい」つて大きくなつたお腹を擦りながら言つてたつけ。

彼女の夢が今、叶つている。そう思うだけで目頭が熱くなつてくる。

なのに…：

よりによつて今、無粋を体现したような男バーランがアホ面下げて近づいて来てる。

空氣つてもんを読めないのか？アイツ。

「ああ、ここに居たのかカルテマ。ちよつと聞きてえんだがお前から見てどうだ？なん

つーか変じやねえか？最近のガンビーノは。どう思う？

「……は？」

呆れた。見て分からぬのかこのバカは
言葉を忘れてても尚、かつて思い描いた夢を忘れられなかつたシスの行動をガンビーノ
が受け入れたんじやないか。

まつたく：独り身の男共は皆して阿呆だ。

「それをわざわざ私に聞きに來るのかバーラン。よつほど暇なんだな、お前らは」

「いやいや、だつておかしいだろ？あのガンビーノだぞ？仮にあのガキがガンビーノの
実の子だつてんならまあ俺だつて分からなくねえけどよ、死人の落し子だぞ？氣味悪い
よ」

「……」

バーランの言葉に彼を睨んでた視線をシス達に戻す。
なるほど、このバカの言う事も一理ある。

確かに、私の知りうる限りガンビーノという人間は誰かに優しく接するようなタイプ
じやない。

この傭兵团に所属して長い古参兵辺りは気付いているが、せいぜいシスに対しても情が
厚い位だろう。

だけど誰にだつて心境の変化つて物くらいある。ガンビーノも人間だつたつて事じやないか。

「良いんじやないか？ 何もお前が面倒見ろつて押し付けられてる訳じやないんだ。あまり過剰に毛嫌いしてるとガンビーノに斬られるぞ」

「ええ、マジかよ：斬られんのはゴメンだぜ」

「なら気をつける事だな、知らん訳じやないだろ？ シスの件でガンビーノに何度も突っかかるつて行つた奴がどうなつたか」

バーランの渋い顔を横目に自分の天幕に戻る。

最近のガンビーノは宿营地でもやたらとうるさくなつた。もちろん悪いことじやない。

「汚え！ 手え洗え！」とか「そんなところで済ますなッ！ 便所の場所は決めただろが！」とか。他にも色々言うようになつた。多分子供に氣を使つてるから言つてんだと思う。いい父親になれるんじやないかな、ガンビーノは。あくまで私個人の考えだけどね。テントの中でガンビーノに渡す子育ての注意事項を布切れに書きあげる。
シスのこれから幸せを願いながら。

ガツツの成長

子供の成長つてのは存外早い。

驚いた事に1年も経たないうちにガツツが歩けるようになつた。もちろんたどたどしいが。

俺やシスの元に行こうとトテトテ一生懸命に歩く姿には頬が緩みっぱなしになつちまう。

前世じや子供どころか結婚以前の話だつたからこんなに早く育つとは思つてもいなかつた。

いや正直歩くのは2～3歳くらいからじやないかなんて適当に決め付けてた。1歳ならハイハイ出来たら上等だろうつて。

驚きはもう1つある。

シスがガツツの名前を覚えたことだ。

初めてシスがガツツの名前を呼んだ時には思わず「お前喋れるのか!?」と詰め寄つて

威嚇されちまつたもんだ。

：あれ？ って事はガツツと一緒にシスに文字とか言葉教えたなら喋れるようになるんじやねえか？

そう考えた俺はシスにも勉強させる決心をした。

「いいか、これが『いぬ』でこつちが『ねこ』だ」

「いーーう♪」

『いぬ』だ、『いぬ』だぞガツツ

シスの膝の上で『犬』の絵札をパシパシ叩いて遊ぶガツツに根気よく言葉を教えこむ。シスも一緒に居て興味を持つたらしく、ガツツと一緒になつて発音する。

悪くは無いんだが中々に骨が折れる…。

それと余談だがガツツが一番最初に覚えた言葉は『ママ』だった。何故だ、何故なんだガツツ…。

こんなにも一緒に居てお前に言葉を教えてるのは俺だぞ？ 『パパ』なんだぞ？ なんで『ママ』なんだ！？

チクショウメエ!!!

「あははは、苦労してそうだなガンビーノ。どうだ？ 息抜きがてらちよつと付き合つて

「くれねえか？」

いつから見てやがつた…？

相変わらず気配の薄い奴、ウルバンが天幕入り口の柱に寄りかかつて笑っていた。
 「あ、あ？ んだよウルバン、俺が禁酒してる事ぐれえ知つてんだろ。わざわざ誘いにく
 んじやねえよシバくぞ」

「うわ怖え、子供が覚えちまつたらどうすんだよガンビーノ」
 わざとらしくおどけて見せるウルバンのなんとウザイ事か。

チツ、この野郎後ろ弾してやろうか…。

「ウルバン、医学に関しちやてめえが適任なのは分かつて。だがガツツにはまだ早え、
 今のは聞かなかつたから出ていけ」

「…。へいへい分かりましたよ、ボス」

どうやら団の奴らも慣れてきたらしいが、代わりにガツツのそばに居る間は俺が強く
 出れない事に味をしめたアホ共がここぞとばかりにちよつかい出して来るようになつ
 た。

因みにガツツが「かえ！かえ～（金、金～）」と言いながら剣を担ぐ仕草をしてたのを見
 つけた時に、そのクセのある姿から犯人を特定して本気でシバキ倒した事もある。
 危なつかしくて目が離せねえ。

当然だがガツツに剣を教える気は全くない。

俺はガツツに勉学の道を歩んで欲しい、血鑄や泥濘にまみれた人生なんか送つて欲しくねえ。

長く子育てしてゐる内に本氣でそう考へるようになつてゐた。

だから余計な剣の知識は離しとくに限る。

「ほらガツツ、その果実水飲んだら始めんぞ」

「パー」

「……ツ！」

ダメだ！そんな風におかわりねだつたつて何も出ねえぞ！

「「パー」」

「……グツ！」

ひ、卑怯だ！ガツツの野郎、シスとダブルおねだりだなんてやるじやねえか……！

そんなんで俺が落ちるとでも？

「……最後の1杯だかんな」

「グフウ……」

運命の拮抗線

ガツツを拾つてから3年が経つた。

俺の前世の記憶は霞がかかつたように殆どがうろ覚え状態になりつつある。きっと
更に時間が経てば忘れちまうんだろう。

だが今年は前々から準備してきた物がある。

ペストに関する情報集め、そして予防策だ。

旅人や行商人を捕まえて命と持ち物を保証する代わりに知りうる情報を洗いざらい
喋らせてきた。

今は何処の地方が酷いか、病状はどんなか、治療の成功例はあるのか etc.::。

結果としては上々、致死率は高いが不治の病では無いのが分かった、治療薬に関して
は入手済みだ。

治療薬と言つても特効薬じやない。

あくまで病状が悪化してない早期患者に対しても、比較的効果アリ程度のものだ。
だがやはり運命の力つてのは強いらしい。

城攻めに雇われている俺たちは疫病が迫つてゐるからと契約を無視して退く訳にもいかない。

まさにペスト拡大域のギリギリで戦つてゐる。逃げたくても逃げられない状況にあつた。

戦況が停滞してゐる今、この地でペストが広がる可能性が高い。いくら俺が声高に危険を訴えたところで他の傭兵团は勿論、騎士共が聞くとは思えない。

ならどうするか？

簡単だ。俺は俺の団員だけを守ればいい。

「ウルバン、薬の備蓄は？」

ウルバン・キリターナ。新しく設立した団内の新兵科【衛生兵】の部隊長。

対ペスト部隊まで編成して日夜訓練を続けてさせている。

「およそ全員分確保済み。だけど人手が足りてない、増員して欲しいんだけど……」

「無理だな、医術の心得のある奴は全員てめえの隊に投じてる。何も知らねえド素人は寧ろ邪魔だろう？」

「そりや…まあな」

「いいか？俺アなにも団員全員の治療しろとは言つてねえ、奴らには十分気を付けさせ

てるからな。それでも発症しちまつた奴を隔離、治療すりや良いんだ。出来んだろう?」

出来るはずだ。なにせコイツは腕がいい。

なんで傭兵なんてやつてんのか不思議なくらいに。

頭を搔きながら困った笑みでウルバンは続ける。

「あーー、そう言われちゃやるつきやねーですわ。ま、期待にや答えてみせますけどね?」
「なんで——」

「ん?」

「——いや、何でもねえですわ。んじゃ俺はこれで」

何か言いたげなウルバンだったがアッサリと出て行つた。なんだつたんだ?
まあ何でもいい、明日からはまた総攻撃が始まんだ。さつさと寝ちまうか……。
ベッドに入つて考える。

今の俺ならシスにもしもの事があつてもガッツを憎みはしない、でももしガッツが俺
を憎んだら?

疫病を知つて何もしなかつた。だから母さんが、シスが死んだんだつてなるかもし
れない。

有り得る、十分に。

疲れた体に、脳に睡魔が襲つてくる。

やれる事はやつた、後は野となれ山となれだ。

「ああ…くそツ、シス…ガツ…ツ……」

／＼＼◇ウルバン◇／＼＼

「こつちの奴はダメだ!! もう死んでる!!」

「おいツ薬！ 追加のヤツもつてこいツ！」

「ああ…くそツ…死ぬな!!」

「衛生ーーツ！ 早くツ！ 早く来てくれ！」

「死体を連れてくんナツ！ 次イ！」

まさに地獄だ。

傷病兵で溢れる野戦テントの中で軍医と衛生兵が懸命に働いている。交代で休ませていてもその顔は疲労の色が濃い。

俺はペスト患者隔離用の天幕に向かつた。

ガンビーノが前々からうつとおしい程に警戒を促してたおかげで発症者は少なかつた。

だが0じゃなく、その中にはシスも含まれていた。

俺はガンビーノにシスの治療を命じられている。必ず助けろ、と。

「おい、交代だ。シスの様子は？」

ガンビーノの手配でシスはテントで治療していた。

「良くなはないです、ただ他よりはマシ⋮つてくらいで」

だろうな、見ただけでヤバそうだ。

ふとテントの入り口付近でシスを、俺達をじつと見つめてるガツツが目に移った。
なんでここにいんだ？

「おいガツツ！これはペストってんだ！伝染るやべえ病なんだ近寄るな！おいお前、
ガツツ連れて行け」

交代する軍医に連れて出るよう指示を出す。

「……ガツツ⋮」

小さくそう聞こえた。ガツツと。

それはガツツに聞こえたとは思えない小さな声だつたのにガツツは反応した。

連れて行こうとした軍医からすると抜け出すと震えながらもシスの手をしつかり握りしめて座り込んでしまった。

「お、おい行くぞガツツ」

「いや待て、いい。好きにさせてやろう」

手で制して軍医を止める。

ガツツは自分の意思で母親のそばに来た。ペストの怖さを理解してないとしても無理に引き離すのはガツツにもシスにも良くないかもしねれない。

それに…

「ガツツ、よく見とけ。お前の親父は外で、お袋は目の前で戦つてんだ。例えどんな結果でも目え逸らすんじやねえぞ」

「……。」

ガツツは黙つて、目に涙をためて頷いた。

よし、なら俺は俺のすべき事をやるまでだ。

乗り越えた先に

早歩きでシスのテントに向かいながらウルバンから状況を聞きだす。

「で？シスの容態は？」

シスの危ない時に傍に居てやれなかつた。

焦りと怒氣を抑え込む。運命がどつちに転ぶか分からぬのがもどかしい…！

待つてろ：シス、今行くからな。

「大丈夫だ峠は越えた。越えたが体力が戻つてないから起きんのは無理だな。それと

」

あー…とまた言い淀むウルバン。

「なんだ!?なんかあつたのか？」

「あ、ああ…まあ言うより見てくれた方が早いわ」

こつちはそんな余裕無いんだ！と怒鳴りたい気持ちを押し殺しながら歩幅を広げる。
気づけば走り出していた。

「シスツ!!」

シスは寝ていた。いや、さつきまで寝ていたようで俺の声で起こしちまつたらしい。首だけ動かしてこっちを向いた。

「…ツ、よく…よく頑張ったな…。シス」

泣きそうになる。

後ろにはウルバン以外にも部下がいるのに。

「ガンビーノ」

「ああ、俺だ。帰つて来たん、だ…ぞ？」

今なんて？

「シス？」

弱々しい笑みで俺を見るシスの瞳を見つめ返す。

聞き違えた？いや、まさかそんな。少なくともガツツの声じやない。ガツツは軍医の所で感染してないかチェックされてるはずだからな。じやあ今のつて……。

「…ガンビーノ」

「…ツ！」

間違いねえシスの声だ、滅茶苦茶驚いたじやねえか！

ちくしょう言葉が出てこねえ。

シスが生きてた、言葉も…戻った、のか？
予想外の事に思わず硬直しちまつた。

「おあえり、ガンビーノ」

馬鹿野郎ツ…！そりやあ俺のセリフだ！

シスを引き寄せてギュツと抱きしめる。ダメだ、涙が溢れて止まらねえ。

「シズウ…ウツ、あ”あ、ただツいま…ツ」

それからどのくらい泣いてたかは知らねえ。

落ち着いた時には俺とシスの2人だけになつていた。きつと気を効かせてくれたん
だと思う。

「落ち着いたならちよつといいか？ガンビーノ」

テントの外からウルバンが呼んできた。

「今は休めシス。また後で来るからな」

頷いたシスをそつと寝かせてテントから出る。

暫く歩いた所でウルバンが口を開いた。

「シスの言葉の事なんだがな」

「ああ、なんか知つてんのか？」

「シスが言葉を忘れた原因、覚えてるよな？」

勿論だ、自分の子を流産しちまつたショックで気を病んじまつたんだ。

「正直言うと言葉を取り戻す前兆はあつた。ガツツの名前を呼んだことだな、アレは思うにシスなりの愛情表現なんだよ」

「…だとして、急に言葉を取り戻した理由は？まさかペストにかかつたおかげだ、とかほ

ざくわきやねえよな？」

「怒るなよ？ガンビーノ。言つちや悪いが俺はペストのおかげでもあると思つてんだ」

「……」

分からぬ。

何をどうしたらペストのおかげになるつてんだ。

「これは俺の予想だけどな、シスは幸せだつたんだと思うぞ？子を亡くしてもアンタが傍に居てくれて、ガツツを拾つた後も変わらずに2人を愛した。だから彼女はそれを手

放したくなかった。その想いが、感情がシスの心をコツチに呼び戻したんじや無いかね」

「死の間際に生を願つたから…って言いたいのか？」

「ああ、だけど心の病は俺の専門外なんでね。あくまで俺の予想でしかないんだぞ？ ガンビーノ…………え？ おいガンビーノ！」

「ガツツ…こっち見んじやねえ…」

運命が変わった。

シスが戻つてこれた。ガツツも無事ときたもんだ。

悔いは無え。

「…。また泣いてんのか？」

「うるぜえッ！ 歩哨にでも立つでろッ！」

きつと今の俺は人に見せれねえ顔になつてんだろうな。

「あいよ…俺はなんも聞こえなかつたぜ、悪いなボス。無駄に付き合わせちまつて」

ウルバンの足音が遠ざかっていく。

声を押し殺すのも限界で声を上げて泣いた。泣き崩れるなんて初めてだつた。嬉しかつた、ただただ嬉しかつた。運命が変わつた事がじやない、家族が無事だつた事が無性に嬉しかつたんだ。

現実は甘くねえ

相変わらず戦争は終わらねえ。

それどころか終わる気配すらありやしねえ。

ミッドランドもチユーダーも、互いの国民を戦場にこれでもかと投じてる。そろそろ無駄だつて気付かないもんかね。

豆まきの豆じゃねえんだぞ、俺達は。

今は敵城の正面に陣取つて張り巡らせた塹壕に身を隠している。

俺達の直属の指揮官は攻撃開始早々に敵城壁に突撃命令を出すという恐るべき暴挙をしてのけた。

結果か？分かんだろう？あつちゅう間にハリネズミに変身なされたさ。活躍なんて無かつたがね。

「「ウオラアアアーーッ!!」」

突如地響きと鬨の声が起きた。

騎兵突撃。

生きて戻ろうなんて考えてない、「一兵でも多く道づれに！」と突つ込んでくる敵さんの決死隊だ。

素直に付き合うだけ命の無駄、はつきりわかんだね。黄泉比良坂には己の軍馬と行つてもらおう。

「団体さんのおいでだア!!構えろお!!」

号令と同時に膝立ちで塹壕ギリギリから弓隊が構える。100人程のクロスボウ兵、50人程の長弓兵が弓を引き絞る。

数は少なくとも老練な精銳達、敵が哀れだ。

「距離150! 水平射! 放てえ!」

合図で長弓兵が矢を放ち、その殆どが軍馬を仕留めていく。

悲鳴と嘶きが混ざりあつて突撃隊形が乱れはじめる。

「距離100! 水平射! 放てえ!」

乱れた前列を抜けて突出してきた騎士達も同じく軍馬を射られて地面に転がり落ちていく。

この時点で騎士達に出来るのは死ぬ事のみ。

最後まで突撃しながら死ぬか、逃げる背中を射たれて死ぬかの2択しか残つてない。進むも死、退くも死だ。

「距離50！全射手水平射ア！放てえ！」

ザアツつと音を立てながら放たれた矢は騎士の鎧を人々と貫く。

一方的な虐殺と言つてもいい。

「ガンビーノッ!! 右翼が崩された！ 右から来るぞ、数約50距離200ッ!!」

部下の声に応じて指揮を飛ばす

「槍隊右行けえ！ 密集陣！ クロスボウ兵、援護してやれ！ ガツツ!!」

「……ッ!?」

ああくそッ!! やっぱり無理じゃねえか！

カルテマ達に「戦場を教えるには良い機会だ」と再三に迫られて根負けした結果、ガツツを連れてきちまつていてる。

「離れんじやねえぞ！俺の影から出んな!!」

ガツツを引き倒すように後ろに隠して落ちてた盾を持たせる。まだ6歳の子供には大きすぎる盾だが、ガツツの体を隠すには丁度良かつた。

「来るぞッ!! 構ええーーー！」

ゴツ！ ガツシャーーーー！

軍馬諸共突っ込んできた騎士が、槍兵と激突して崩れこんでくる。

怒声や悲鳴、断末魔の中ただ目の前の敵を斬り捨て続ける。これが戦場なんだ。躊躇

いは死を招く。

その目に焼き付けとけガツツ、死ぬつてのがどういうものなの！

日が落ちて戦闘が終わつた。

衛生兵が忙しく行き来する中、震えて泣きそうなガツツを抱き抱えながらシスの待つ天幕に向かう。

「怖かつたか？ガツツ」

返事はない。ただ僅かに抱き着く力が強くなつただけ。

「忘れんじやねえぞ：あれが俺の戦場だ。ガキが来ていい場所じやねえ、次は死ぬと思え」

今日の事でガツツは戦場の怖さが分かつたはずだ。

「剣を教えて！」なんて来ることは無くなるハズだ。そもそもガツツが戦場に興味を持たないよう育ててたつもりだったのに付いて来たがるなんて…、どつから興味を得たんだか不思議でしかない。

まあ今はこれ以上言う事はない、これで大人しくなつてくれれば助かるんだけどなあ

⋮。

親の心子知らず

僕は父さんが好きだ。母さんも好きだ。

父さんは色んな事を教えてくれる。文字と簡単な計算にミッドランドやチューダー、クシャーンの歴史とか。知る程にその異文化に触れてみたいっていう好奇心が募つて、「外の世界を見たい！」ってお願ひしては、父さんを困らせたりしてゐる。

母さんはそんな僕を見ながらいつも微笑んでる。父さんと取り合うように食べる母さんのご飯なんて物凄く美味しい。

他人から聞いた話だけど僕は拾われた子らしい。でも大切にしてくれてるのは分かつてゐるから別に構わないと思つてゐる。

父さんは傭兵を率いる団長っていう仕事をしてゐるらしくて、僕はその部下の人達に色々な外の世界を聞く機会が多くつた。

特に古参兵達の話には惹かれるものが多くて、戦場への興味は僕の中で日に日に強くなつていつたのを覚えてる。

だから僕は考えた、どうやつたら戦場に連れてつて貰えるかって。

古参兵

そして実行したんだ。カルテマ達が父さんと打ち合わせ（？）をしてる時に「父さんについて行きたい！」って泣き付いた。
もちろん頑なに拒まれたけど、そんな僕を見てかカルテマやモス爺が一緒にお願ひしてくれた。

結局は父さんが折れて憧れの戦場を見に行ける事になつた。

甘く見てた。

憧れも好奇心も何の役にも立たなくてただただ怖かつた。

歯はガチガチ鳴つて震えが止まらなくて、ずっと父さんの後ろに隠れてた。なだれ込んで来た敵を怯まず剣で斬り捨てていく父さんは、強くて大きくて頼もしく見えた。

帰り道、父さんに抱き抱えられながら僕は誓つた。

僕も強くなつて父さんと一緒に母さんを守ろう。つて

でも父さんには言えなかつた。

父さんは僕が剣の道を選ぶのを嫌がつてるらしくて、皆にも教えないように言い聞かせてるんだつて。なんでダメなんだろう？

ウルバンやカルテマ、モス爺とか殆どの古参兵は剣に関して何も教えてくれない。
もう一度一緒にお願いして欲しいつて頼んだのに断られちゃつて取り付く島もない。
でもバーランはこつそりだけど教えてくれるから好き。

みんな「ガンビーノがあ…」って言つて相手にしてくれないけどバーランだけは「まあ少しならしいんじゃね？」って！

子供用の剣が無くて皆と同じ剣で練習してるけどまだまだみたい。

剣に振り回されてる内は話にならないんだって…。

多分暫くは素振りだけしかさせてくれないと思つてる。この剣、僕の体には大き過ぎるからね。

ちょっとやつてみたくなつて剣を横に振つたらそのまま引っ張られて転んでしまつた。

しかもそれをいつから居たのかバーランとウルバンに見られてしまつた。バーランは僕を見て笑つてるしウルバンはびっくりしてる。

「ふッふははははッ！まだお前には早かつたかもなガツッ。もう少し体がでつかなくなつてからにしたらどうだ？それからでも遅くねえんじゃね？」

なんかムカつく、バーランのくせに。

知つてんだよ？よくやらかして父さんにシバかれてるつて。カルテマが言つてたからね。

「オイオイ：面白いもん見せてくれるつて言うから来たのにマジかよバーラン。お前ガンビーノに殺されんぞ？」

ウルバン顔色悪いよ？

大丈夫、ウルバンは悪くないからね！父さんも分かつてくれるよ。

「良いんだウルバン、僕が頼んだんだよ『早く強くなりたいから教えて』って」「いや、そうじやなくつてだな…」

「いーじやねえかよ教えるくらい！ガツツだつてそろそろ物心つく頃だろ？生きる為には剣は必須じやねえか！なあ？」

うん！バカなんだろうけどやつぱりバーランは好きだ。

「いや、6歳ならもうとつくな物心は付いてるわ。なのにガンビーノが教えてねえって事はよお前…ヤバいんじゃないの？」

「……やべえかな？」

「やばいだろうな」

どうしたんだろう？今度はバーランの顔色が悪くなつてきてる。ウルバンは呆れ顔だ。

皆が言うように僕に剣を教えた事がまずかつたつて事なのかな？

「大丈夫なの？バーラン」

「いやあ…大丈夫じやねえかも…？」

「またやらかしたなバカ野郎、いつそ大人しく斬られるつてのも手だぞ？なに、生きてた

ら治療してやるよ。生きてたらな」

「治す気ねえだろてめえ」

「決め付けんなよな、まあでもバレたらその首が落ちんのは確実だと思うぞ。どうすんのよお前マジ死ぬぞ」

「……」

「…つたく、このままバレたらおしまいだからな。そうなる前に謝つたらどうだ? ガンビーノだつて事情を聞けば命までは取らないんじや無いかな」

「僕も行く」

ウルバンに言われて状況を理解したバーランと一緒に父さんの天幕に向かつて歩き始める。

なんか気まずい。

でも父さんがそんなに怒るとも思えない、きっと少しのお説教で許してくれる気がする。

⋮そんなこと無かつた。

この日、僕とバーランはブチ切れた父さんによつて大目玉をくらつた後、まだ霜が降りる寒い季節なのに川に叩き込まれた。

男の子は戦いが好き、はつきりわかんだね

俺はここ数日、朝霧も晴れない早朝からガツツの剣の練習に付き合っている。正直言うとほつときたかつたんだが、中途半端な剣で戦場に踏み込んだらどうなるか分かんない？ そうなるくらいならと思つたんだ。

「軽いし浅いぞ、もつと踏み込めガツツ！」

「ツ！」

ガツツの突き出す剣を流しながら軽く切り払う。

薄皮が裂けて僅かに血が出るが、気にする素振りもなく打ち込んでくる。

「うらああーツ」

「がむしやらに斬り込むな！ 隙だらけだぞ！」

「うツ！」

ヒラリと躲して足払いを食らわせる。

バランスを崩しながらも受け身を取るガツツ、やはり体術も教えたのは正しかつたみたいだ。

だからと言つて加減はしない。ガツツが立ち上がる前にその首に剣を突きつけて宣言する。

「首1つだガツツ。てめえはまだ子供だが子供なりに利点はある、てめえからは俺の全身を視野に入れられるが俺からは見えなくなる所がある。良いかガツツ、体の差を活かせ。分かつたらもう一度だ！立て！」

「……」

無言のまま立ち上がるガツツ。だが不貞腐れてる訳では無い。

ジツと俺を見据えて いるその目は何処に隙が生まれるかを見極めようとしている。いいぞ、それで良いんだガツツ。

「ツおおお!!」

集中を邪魔するつもりで大声と共に斬りかかった。大上段からの打ち落とし。力技でガツツの剣を落とす！

取つた！と思つたのもつかの間、ガツツが視界に居なかつた。

「…なツ!」

驚きと殺気に気付いたのは同時だつた。

咄嗟に首を逸らした瞬間、首すれすれの場所を下からの剣が貫いた。

危なかつた。コンマ1秒でも遅れてたら自分の首が落ちてたところだ。

背筋に冷たいモノを感じる。

確かに手加減はしてた、だからと言つてナメては無いし油断もしてなかつた。偶然か狙つたのか、どつちにせよガツツは助言を活かして見せた。

俺は死にかけたけどな!?

「やるじやねえか:ガツツ、今のはなかなか良かつたぜ。普通は下からの攻撃なんて予想してねえ物だからな」

肩で息をしてるガツツの頭を撫でてやるとパアツと嬉しそうな顔をする。

俺に褒められるのがそんなに嬉しい事なのか:?

思うにガツツの成長が早いのって、やっぱ運命つて物の影響が強いんだろうな。

「今日はこれで終わりだ。戻る前に川で汗流しつけ

「うん!」

元気に走つていくガツツを見届けて1人、ウルバンの天幕を目指す。

ガツツには常用の傷薬を持たせてるが質がいいとは言えない代物である。菌が入つたら大変だ。

「おう、ウルバン起きてるか?」

まあ寝てたら寝てたで叩き起すから良いけどよ。

「:今起きたところだけどなんだ? 悪いが朝は苦手なんでね。面倒事なら止めてくれな

いか

「傷薬を取りに来た。止血効果があつて治りの早いイイやつをな」

呆れ顔のウルバンを無視して薬品棚を漁る。

「たしかこの辺に入れてたよな、えーっとお?」

ポイポイポイのポポイとな♪

「待て待て待つてくれガンビーノ、分かつたから。今出してくるからぶちまけないでくれ:」

「ああ、悪いな」

何か言いたげなウルバンに軽い笑顔を返す。

5年、6年と子育てしてるうちに自然に出来るようになつていた。

「これだよ」と出された薬を持ってガツツが行つたであろう川に向かう。

ガツツは河原に落ちてた倒木に座つていた。

潰れた手のマメを見つめて考え方をしてたらしいガツツを呼んで薬を放り渡すと、またも嬉しそうな笑顔で受け取る。

「ガンビーノ!」

「ん?」

「ありがとう!!」

65 男の子は戦いが好き、はつきりわかんだね

「…おう」

何だかなあ、
薬一つで喜びすぎじやないか?

俺のガキ（息子）に何をする！

ミッドランド軍によるチューダーへの反攻作戦。

かつて奪われた城を1つ1つ奪い返していくとか言う気の遠くなりそうな狂気の作戦。

また大勢の命を溶かした目前の城ももう落ちる。

つつても上の奴らは俺達備兵を使い捨て程度にしか考えてない。

今更だが先駆けなんて怖くて出来ないらしい正規軍の変わりに凸れとの御命令を受けてる。

ハハッ、せいぜい好き勝手にやらせてもらうさ。

「いいか野郎共オ！城門が碎けたら全員で突入するぞ！お宝は早い者勝ち、手柄首も女も取つたもん勝ちだ!!せいぜい稼げや！：抜劍ツばっけんツ!!

「…ツ」

ふと視界に入ったガツツは初陣つてだけあつて緊張した顔つきになつていた。つたく、しゃーねえな。

「ガツツ」

「…なに？ ガンビーノ」

「死んだら意味ねえからな、適度にやりやあ良いんだよ。変に気張るな」
ガツツが頷いた直後、轟音と共に門が壊れた。
さあ稼ぎ時だ！ 剣を掲げて叫ぶ

「突ツ込めえーーー！」

「「「オオオオオオオツ!!!」」」

そこからは乱戦だつた。

入れまいと打つて出てくる敵兵との白兵戦、入り乱れる敵味方を一瞬で見分けて斬り捨てる。

何人か斬つた時、たまたまガツツが敵を仕留めるのが見えた。

自然と笑みが零れたがその後ろに回った奴が見えた、敵だ。ガツツは気づいてない！
走り出した時には遅くガツツが打ち倒された。トドメを刺そようと振り上げられるメイス。

「「くたばれツ!!」」

ソイツと俺の声が重なる。

ガツツの頭を割られるより早く敵の首を刎ね飛ばした。倒れ込んだ敵の血を浴びた
ガツツと目が合う。

「ガ、ガンビーノ！」

「呆けんなガツツ敵は前だけから来る訳じやねえんだ。倒したからつて氣い抜くな」
ほら立てとガツツを引き起こす。

「ん、気をつける」

「ああそろしろ、てめえの死に顔なんぞ見たかねえ」

去り際に落ちてた兜を適当にガツツに被せる。勝ち戦で死にたい奴なんか居やしねえからな。

夕方には戦は終わった。言うまでもないだろうが俺達の勝利で今は酒宴の真っ最中。
ガツツは手柄首こそ取れなかつたが敵を4、5人斬つたらしい。初陣にしては上出来だ。

「ああん？ おい、ガツツはどうした？ せつかく褒めてやろうって思つてたのによオ：お
いてめえガツツ連れてこい！」

酒に肉に女に勝利。これ以上ない看だろうが！

このクソツタレな世の中の生きる楽しみを教えてやるぜ!!

「よさんかガンビーノ…あの子はまだ幼い。人を斬る事の怖さは我らの比では無かる
よ」

静かに語りかけるように止める老人、モスヴィイラント。

周りからはモス爺とか呼ばれてる。

「あん？ だから楽しませてやろうつて言つてんじやねえか！ んだよ小言なんざ聞きたか
ねえぞ」

「儂とて言いたくはない：言わせんでくれガンビーノ」

長く団に尽くしてガンビーノを支えてきた老兵。

酔つた勢いとはいえあまり無下には出来ないものがある。

「……チツ、シラケるぜ」

何となく居づらくなつて席を立つた。

自分の天幕で飲み直すか…。

頭を搔きながら戻る道中、後ろから声をかけられた。

「なあ：ちよつといいか？ガンビーノ」

「あ”あ？」

不機嫌ながら振り向いた先にいたその男には覚えがあつた。
ドノバン？

ガツツ（貞操）の危機

怖い：怖いよ。

毛布にくるまつてこれから寝るつて時になつて、急に人を殺した事実に震えが止まらなくなつた。

手に残る相手の体を貫いた剣の感触。

後ろから殴り倒された痛みと、首を無くした兵士の血の温もりに目に焼き付いた切斷面が忘れられない。

皆も：ガンビーノもこんな風に苦しんだのかな…？

体を丸めて震えを押し殺そうと頑張る。

ふと天幕に光が入つて來たのに気づいて振り返つた。ガンビーノが來てくれたのかなつて思つたけど違う様だつた。

よく見えない。

微かに見える肌の色、体格…。

「…ドノバン、なの？」

なんか変…。

そう思つた直後に見えたドノバンの歪んだ笑み。

直感が ”逃げなきや” と叫んだ。何処に？ ガンビーノの所に！

いやダメだ、ドノバンを押しのける程の力は僕には無い。咄嗟に剣に手を伸ばしたけど掴む前に押さえつけられてしまう。

「は、離してドノバン！ 誰か！ だれ 「うるせえ！ 黙つてろ」

必死で助けを呼ぶ口に布を押し込まれる。

そう言えば少し前に酒の席でガンビーノが言つてたつけ。

『いいかあガツツウ、軍隊じやあ幼氣の残るガキやら女は気をつけなきやいけねえ。何処の軍隊でも ”そういう事” ってのが結構あるからな!!』

その時はガンビーノの言う『そういう事』が何なのか分からなかつたけど今ならわかる。

助けて…ガンビーノ!!

ドノバンの手を振りほどこうと身を捩る。

「……ツ」

「暴れんじやねえ！」

「ツう！」

痛い…。殴られた頬がジンジンして熱を帯びるのを感じる。助けて…助けてよガンビーノ…。

「いいかよく聞けガツツ、俺はガンビーノに銀貨20枚も出したんだ。てめえに20枚も積んだんだ。だつてのに…せいぜい楽しませて貰うぜえ」

「……」

嘘だ、嘘だよ。ガンビーノがそんな事…。

抵抗する気も起きないくらいデカい衝撃だった。ガンビーノが僕を売った…？ お金で？

大人しくなつた事に満足したのか、ドノバンは腕を掴むのをやめて肌着を乱暴に引き裂きはじめた。

後ろからベルトを外す音が聞こえる。

そして腰をドノバンに掴まれた、その時だつた。

「おい…何してんだドノバン」

聞きなれた声。

怒りを抑え込むような殺意を孕んだ聲音。

「ガンビーノ…」

「あ……ン？……ッ!! あ……い、いや待て、待つてくれガンビーノ違うんだ」
ガンビーノと目が合った。本気で怒つてる。

それだけで僕は売られたんじゃないってのが分かった。

「何が違うのかはこの際どうでもいい。今日は見逃してやるから失せろ。……ああ待て、今度俺と顔合わせる時までに言い訳くらいは考えとけ」

青ざめながらスボンを履き直して逃げるように出ていくドノバン。
なんでドノバンを逃がしたのか分からなかつたけど、ガンビーノが助けてくれた。そ
れだけで嬉しかつた。

「遅れちまつたなガツツ……すまねえ」

そう言つて自分の来てたシャツを着せてくれた。

「怖かつたよな」つて、そつと優しく抱きしめてくれたガンビーノの腕の中で僕は泣いた。

初めて人を殺した後悔と殺されかけた怖さ。

ドノバンに押し倒された時に感じたおぞましさ……。

ガンビーノはただ黙つてそれを聞いてくれた。

ひとしきり泣いて落ち着いた頃、ガンビーノが隣に寝転んで「寝付くまでは居てや
る」つて。

後の事は俺の仕事だから、と頭を撫でてくれて寝るように促された。
だから今日の事は忘れようと思う。きっとガンビーノがうまく収めてくれる気がするから。

ゆ

る

さ

ん

!!

ドノバンによる「アーネツ♂」な展開を阻止して数日が経つた。あの日以来ドノバンは当然と言えば当然だが、明らかに俺を避けている。

俺が怒る事くらい予想出来なかつたのか?やつぱり発情した男はケダモノ。はつきりわからんだけね

まあガツツが可愛くてそのプリケツをウホツなドノバンが欲しくなつちやうのは仕方ない。

納得いくけど許早苗。

さてさて本日の仕事は残党狩り。

貴族や領主からしたら面倒な後始末でも俺達傭兵からすればこれ以上ないボーナスステージだ。

当然の如く部下を総動員して退却する敵さんの帰路で待ち伏せる。

待ち伏せ？ 凸らないのかよチキン！ だと？ 分かつてねえな素人め。 敵は腐つても正規軍、兵数は1傭兵团よりは多い。

ナメてかかつて押し返された暁には目も当てねえだろうが。

ここ最近は攻城戦が多かったのもあって新兵はおろか古参兵共もイラついて空気がピリピリしてた。 無能な騎士だの将軍だのに付き合わされてたんだから無理もない。

こんな時くらいは手綱を離してやるもんだ。

「いいかテメーら、相手の数は俺達より多いが負けて士気はガタガタだ。 手向かう奴だけ殺せ。 分かつてるだろ？ が取ったもん勝ちだからな、思いつきりやれ」

獲物を目にしたら最後、 飢えた狼みたいな勢いで襲いかかるのがコイツらだからな。 銅貨1枚すら残らない気がする。

「突撃イ——ツ!!」

剣を引き抜いて馬を驅る。

慌てて体勢を整えようとしてた敵騎士の首をすれ違いざまに斬りとばす。

指揮官を失くした部隊つてのは驚く程にもろい、 それは敗軍だろうとなかろうと変わらない。 案の定、潰走をはじめた。

ちなみにガツツはお留守番中。

まだ立ち直るには時間がいると思つて連れて来てない。 今頃はシスか誰かと一緒に

居るんじゃないかな？

戦闘も終盤、俺は素晴らしい物を見つけた。いや見てしまつたつて言うべきか。
ドノバンが逃げる敵兵を追つて森の中へ駆け込んで行く姿だ。

あの日、俺はその場でドノバンを始末したかつたが”仲間殺しは縛り首” つて規則のせいで手が出せなかつた。

とは言え”やり方” はあつて、今がその絶好のタイミングつて訳。
アタツクチャーンス☆

ドノバンの後を追うように単騎で森に入る。

逃げ惑う敵兵相手にヒヤツハーしてゐるドノバン、その背中を狙うクロスボウに気付く
氣配はない。

最後の1人の頭を碎いた瞬間、短い風切り音と共にドノバンの肺を貫いた矢。

「……えあ？」

状況が飲み込みきれてないドノバンは矢が放たれたであろう場所に視線を向ける。

肺に血が流れ込んだんだろうか、息苦しそうだ。

「カツ…ガ、ガンビーノ…？」

ドノバンと目が合う。

クロスボウを放り捨ててドノバンに近付く。近付きながら代わりに剣を抜く。

「ようドノバン、最近つれねえじやねーか」

「カハツ…ま」待つてくれガンビーノ、ガツツの件だよな…?あれは俺が悪かつた。ああの時のおえはどうかしちまつてたんだよ。な?ハツ…だか…グガツ」

言いながらバランスを崩して落馬したドノバン。仕方なく俺も馬をおりて目の前に立つ。

苦しそうに喘ぎながら尚も命乞いを続けてくる。

「だのむ…殺さないでぐれ……」

「なあドノバン、俺はお前の性的嗜好にとやかく言うつもりはねえ、何処のガキのケツ掘ろうが舐めようがどうだつていい。だがな…ガツツに手え出したのだけは許せねえ。分かるよなあ?」

ドノバンを立たせて木に寄りかからせる。こうでもしないと声がよく聞こえないからな。

ボソボソ言うんじやねえよドノバン。

「な」仲間殺しは、縛り k 「安心しろドノバン、テメーは戦死したんだからよ」「え…ツ!!」

浅い笑顔を浮かべながらその腹を斬った。

驚愕から苦痛と絶望の表情に変えながら崩れ落ちるドノバン。

「あ” :ア” ア” ア” ア” アアー——ツ!!」

「…チツ、うるせえよ」

誰かに聞こえちやうだらうが。

ちょうど跪く姿勢だつたドノバンの首に剣を振り下ろす。これでいい、これでいいんだ。やつと全てが片付いた。

つたく、手間かけさせやがつて…。

一息ついた後、もと来た道を引き返した。

運命が殺しにくるんだが…

今日も今日とて攻城戦。

なんつーか、そろそろ飽きてきたって言うか…うん。ぶっちゃけ飽きた。
長引いた戦争のせいか有能な指揮官つてのは大体死んじまつたらしい、敵も味方も突
撃し合つてはバタバタ倒れるばかりで一進一退。

それを聞いた指揮官がヒステリックに叫び散らかす毎日。「何とかしろ!!」つて、いや
いやアンタらが何とかする方法を考える立場だろうが…。

もう…イカレポンチなんだから。

「ガンビーノ！城門が軋んできてる、そろそろ壊れるよ！」

ガツツが塹壕に飛び込んでくる。初陣の時とは随分変わつて今じゃ怯まず前線に駆
け出す元気な猪武者に育つちまつた。

誰に似ちゃつたんだよお前…。

でもまあ偵察の役割を果たしたのはええ事やで。ガツツの頭を撫でながら指示を出
す。

「走れ伝令！各隊亀甲隊形ッ!! 目標は敵城門正面。止まるなよ、着く頃には門が破壊されてるハズだからな！」

「了解！」

中腰で塹壕を駆けていく伝令兵。

間もなくしてバーラン隊とカルテマ隊を筆頭に亀甲隊形をとつた部隊が前進し始めたのが見えた。

敵の砲兵も弓兵も気付いたらしく必死の抵抗をみせる。

「テメーら仕事だそのケツ上げろ！突撃イイーー!!」

号令と同時に亀甲陣の合間に散兵が駆け抜けていく。

問題ない、あるはずがない。いつも以上に順調なんだから。

ふと城壁の砲に目がいった。

偶然だったが見えたそれに血の気が引いた。いつの間に調整したのか角度を変えた大砲がこつちを向いていたのだ。

マズいと思つた瞬間、砲口が火を吹いた。

「伏せろ！ガツッ…ッ!!」

爆発。

衝撃波で吹き飛ばされ、泥濘にまみれた。

咄嗟に体をズラしてガツツを庇う形をとつたが間に合つたのか分からぬ。
ちきしょう：これ死ぬのか？

戦場の音も掠れるように聞こえなくなつて、眠気に似た感覚に意識を呑み込まれた。

～～◆ガツツ◆～～

不意に聞こえたガンビーノの声に振り返つた時、後ろに居たはずのガンビーノの姿は
なかつた。

そこには砲弾で出来たクレーターやバラバラになつた人間のパーツがあるだけ。

「ガンビーノオ!!」

至近弾だつて分かつてすぐ、剣を放つてクレーターの中に飛び込んだ。ガンビーノの
無事を確かめる為に。

ガンビーノはすぐに見つかった。突つ伏した状態でピクリともしない。

「ガンビーノ！大丈夫!?」

上半身の鎧はひしやげて破片が刺さつてて、下半身を覆う泥を除けるとベツタリと血

が手に付着した。

「酷い、その一言に尽きる。

「衛生ツ！衛生——！」

叫ぶように衛生兵を呼びながらガンビーノの足の傷口に塹壕から拾つてきた酒をかけて押さえつける。ウルバンに教わった事だ。止血帯が無い今、こうでもしないと…!!
「…うう」

「ガンビーノ!? 大丈夫だから、すぐに衛生兵が来るから！」

意識があるのか無いのかそれ以上反応しなくなつたガンビーノの足を押さえ続ける。その指の間から絶え間なく血が溢れてくる。

ダメだ…血が止まらない。

「ガンビーノ、大丈夫だから…大丈夫だから…」

「おいガツツ何してんだ！ 塹壕に入れ！」

顔を上げると塹壕から1組の衛生兵が僕を呼んでいた。やつと来てくれた！

「助けて！ ガンビーノが…!!」

「なに？ ガンビーノ…!!」

駆け寄つて来た衛生兵の表情が一瞬で曇つて、「うわッひでえ」って呟いたのが聞こえた。

「血が止まつてねえな…ガツツ、ちゃんと押さえてたんだよな?」

「勿論だよ! 酒をかけて消毒してから圧迫したんだから!」

「なあい、取り敢えず担架に乗せなきやな。ガツツは下がつてろ後は俺達の仕事だからな。おい手伝え」

「よし、俺は肩を持つから足の方持つてくれ」

塹壕に担ぎ込まれたガンビーノが担架に乗せられたのを見届けて剣を拾い握りしめる。

焦りも恐怖も殺意一色に塗り変わつていぐのを感じる。

殺してやる、お宝なんてどうでもいい。

アイツらは殺す、斬つて、刺して、落として殺してやる。ガンビーノへの見舞いには大砲を鹵獲したつて言えばきっと喜ぶに違いない。

まだ抵抗を続いている壁上の砲兵を睨みつける。

「逃げるなよ：僕が行くまで」

どの砲兵がガンビーノを撃ったかなんて知らない、だけど皆殺せばどれか当たるはず。

許さない、絶対に許さないからな。

ガンビーノを狙つた奴は僕が必ず：殺してやる。

Gが目覚めた

知らない天井だ…

——なんて事はなく、目が覚めたのは医療天幕のベッドの上だった。

傷病兵の呻き声やら悲鳴で阿鼻叫喚なのが当たり前の所だつてのに今は随分静かな空気が漂つている。考えるに戦闘からある程度日が経つたという事だろう。

「起きたんだね、ガンビーノ」

「…シス？」

ベッドの横の椅子に座つていたシスと目が合つた。

シスはペストを患つた際に顔が酷く爛れたのだがウルバンらの治療で随分回復している。

顔の半分を覆う包帯もそろそろ取れるんだとか。医術の腕やバ過ぎだろアイツ、なんで傭兵なんてしてんだ？いやマジで。

「ウルバン呼んでくるから、ジツとしててね」

そう言つて立ち上がったシスを呼び止める。

「なあシス、ガッツは無事か？」

「うん」

頷きながら短く答えてくれた。

そうか、それならいいんだ。

ガッツの無事を確かめる前に意識ぶつ飛んじまつたからな…原作じやついでに足とか理性まで飛ぶんだからそりややつてらんねーよな、原作ガンビーノも。

たとえ俺が原作に沿つて足無くしたとしてもガッツを殺そうなんて考えやしねーけどな。

「シス、ガッツに「無事で良かつた」って伝えといてくれ」

「自分で伝えたら? ガッツもその方がいいでしょ」

察してくれよお、なんか気はずかしいから頼んでんだつて。伝われ!

「…分かつた。言つとく」

「ああ、頼むぜ」

ニカツつと笑顔で頼んだのになんで呆れ顔を返されにやならんのだシスよ。おーい。シスが出ていくのを見送つてから半身を起こす。

さつきから殆ど感覚が無い自分の右足を確認すべく毛布を引つペがした。

「…そうか、もう心配ないって訳だな」

あつた。右足は包帯と固定具でかなりゴツイ見た目になつてゐるがちゃんと五体満足の状態だつた。

だからなんだつて話だが俺には大事な事なんだ。

これでガツツに殺される最後のフラグが折れたんだからな、原作ブレイクだらうが知つたことか。

今じや俺も一児の親なんだ、そろそろ死んではやれん。

安心してまた寝転がる。

誰も居ない天幕で一人、叫ぶように見えない”何か”に拳を突き上げた。

「はツ、ハハツ…ざまーみろクソツタレめ！俺は生きてる！足もある！因果律がなんだ、運命がどうした!!俺はガツツを殺さねーし殺されねえ、どんな面してゐるか知らねえが指くわえて見てろ！俺がテメーの筋書き歪めてやるからな！絶対だツ!!」

肩で息をしながら腕を下ろす。

何かスツキリした気分だつた。そのままつい二度寝カマした俺だつたが、間もなく來たウルバンに普通に起こされた。

チヨー許さん!!

～～～◇ウルバン◇～～～

「起きろガンビーノ。：おい起きろつづーの」

「…んお？」

「ふたく、人に心配かけといて自分は二度寝とはいひ身分だなガンビーノ？あつ、そ
ういや団長様だつたなアンタw。

取り敢えずムカついたから冷たいタオルを寝起きのガンビーノの顔にぶつけておいた。

「なあおいウルバン、も少しマシな起こし方は出来ねえのかよ、ああ？」

「知らんよ、人が必死こいて治療してやつと目が覚めたつて聞いて来てみれば二度寝力
マされてた俺の気持ちを察して欲しいね」

なんかブツクサ言つてるガンビーノは無視してぱつぱと現状を伝えていく。

怪我人に冷たいって？馬鹿言え俺は忙しいんだよ。

「まずアンタの足の怪我な、今んところは切らなくて済みそうちだから暫くはそのまま経過
観察するぞ。それとガツツに礼言つとけよ？聞いた話だけど吹つ飛ばされたアンタの

足に酒かけて圧迫してたんだとよ。良かつたなあ、もしガツツが手当してくれてなかつたら壊死して切断してたかも知れねーよ?」

「そ…そ…うか、ああ分かつた言つとくぜ」

なんかやけに素直だな。素直なガンビーノもそれはそれで気持ち悪い。
人間死にかけると性格変わるつてマジなのか?:。

「それからアンタが寝てる間、団の事はモス爺がやつてたからな。そつちにも礼言つとけよ? あの人元気だから良いけどあまり無理させんなよな」

「あ、バーナーはいいんだよ。アイツは仕事と戦が大好きだからな、ほつといたつて死なねーよ」

ガンビーノはモス爺をなんだと思つてんだ?

確かに付き合いが1番長いから言える事なんだろうけど、あまり知らない身としては複雑な気分になる。

言うべきことは言つたから後はガンビーノ次第、天幕を出る直前にちよつと一言。

「親バカも程々にしどけよ? 死んだら治せねえからな
「わあーてるよ」

手をヒラヒラと：いや、シツシに近いジエスチャーを尻目に自分の天幕に戻る。
あれはぜつて一分かつてない。

ガンビーノの事だから親バカ拗らせて死期を早めかねない。マジで洒落にならないくらい有り得るからな…。

ま、今に始まつたことじやないか。

「あ、ウルバン！」

「おうガツツか、ガンビーノの所に？」

「うん！」

おうおう、嬉しそーにしちやつてまあ。

「気を付けてけよ」

返事も忘れて駆けてくガツツは後ろ姿でも分かるくらいパアーツとしてた。
良いねえ。愛されてるじやねーのガンビーノさんよ。

親は子を崖から突き落とすモンだろ？

足を怪我して2年が経つた。

ほぼ杖無しで歩けるまでに回復したものの長く歩くとやっぱり傷が痛む。

今日も日課の散歩を終えてシスと一緒に天幕外の椅子に腰掛けてチエスをしていると、戦を終えたガツツが走つて帰ってきた。

なんだかいつもよりテンションが高めだ。

「ガンビーノ、聞いてくれよ！ 敵の大将を殺つたんだ！」

「おかえりガツツ、怪我してない？」

「大丈夫だよ母さん。ほらこれ！ 見てよガンビーノ！！」

「ほーーマジみたいだな。よくやつたじやねーかガツツ、お前も随分強くなつたんじやないか？」

ガツツが嬉しそうに渡してきた小袋には確かに数枚の金貨と何十枚かの銀貨、銅貨が入つていた。

大将と言えば護衛がいて重武装が当たり前。騎士を討つのとは訳が違う。これはか

なり頑張ったに違いない。

「うん…、…。ほらよ」

ポポイつとガツツに金貨と銀貨を一枚ずつ投げて渡す。流石に全部は多すぎる、まだ子供なのに大金持たせて変に散財する癖がついたらたまらないからな。

おい何だよそんな目で見んなよ。

何もピンハネしてるんじやねえよ、ガツツの為にも親の義務を果たしてんだからんな。勘違いすんなよな。

お前らもガツツの純粋さを見習えい！

「ま、死なねえ程度に頑張れよ」

「うん!!」

いつの間にかシスの膝の上に座つてたガツツの頭をワシワシと撫でくりまわしてやる。

こうするとびっくりするほど喜ぶ。今も満面の笑みでコインを握りしめてるくらいだからな。

ああ、可愛い盛りのガツツを見てると原作に律儀に沿わなくて本当に良かつたと思えてくる。

ギリ覚えてる範囲だとガンビーノを殺しちゃったガツツはガンビーノの部下に追い

回されて崖から落つこちる運命だつた。

落ちても死ななくて狼の群れを撃退するも力尽きてバタンキューした所を別の傭兵团に拾われる所までは覚えてる。

「んーー、ダメだそつから先が思い出せねえ。

「ガンビーノ？ ねえガンビーノつてば！」

「あ？ なんだ」

「んーん、なんか考え込んでるみたいだつたから…」

「あー気にすんなオメーには関係無いからよ」

ひとしきり撫で終わつてチエスを片付ける。

そろそろ晩飯時でシスも行かなきやならないしガツツじやチエスの相手にならない。

「大丈夫？」 つて聞いてくるガツツにいつも通り大丈夫だと返して席を立つ。

1年と少し前、自力で起きれるようになつたつてのに「まだ動くのは早い」とか言つてくるウルバンの反対を押し切つて始めたりハビリの日々。

その時は傷が深くてマトモに歩けなかつたから杖での移動だつたがそれが宜しくなかつた。

動きが制限されるせいでストレスが溜まりっぱなしで自然と酒が増えた。アル中になるほどじやないにしろ禁酒に失敗したのは痛い。

つかしーなー、前に禁酒した時は成功したんだけど…。

まあそんなこんなでガツツの成長を見続けてきた俺の考えは最近変わつてきている。
『そろそろちゃんと世の中を見せてやるべきなんじやないか?』って。

子供の成長つてのは思つてるより早い、だからもう少ししたらガツツを独り立ちさせ
るのも悪かないよな。

シスの後に着いていくガツツを眺めながらそんなふうに思う。

アイツはこの世の中を上手く生きてけるんだろうか…。

それだけが心配で仕方なかつた。

子離れするべきだな……！

「ここに居たのかガンビーノ」

「うん？」

宿营地近くを流れる小川で剣を研いでいた所にウルバンが声をかけてきた。
見れば特に装備も付けてないラフな格好でどこか清々しい様な雰囲気を漂わせている。水でもぶつかけりや『水も滴るいい男』になりそう。

なんだろう：生理的に受け付けねえ。

ウルバンには悪いが何処と無く嫌そうな顔をしちまつてるとと思う。

「んだよ見りやわかるだろうが暇してねえからな、暇つぶし相手探してんなら他当たれよ」

「おいおい一言目がそれかよ。いい知らせがあるから来たんだけどな」

いい知らせ。

はて？俺に言いに来る程の事でなんかあつたつけか。

「ガツツの事でな「アイツがどうした」

イケねえ早つちまつた。

おい何だよウルバン、アホけてないで続き言えや。

「あ、ああ。アンタから頼まれてたガツツへの医療教育だけどな、一通り教え終わつたからつて言いに来たんだ」

「そうか…それは確かにいい知らせだな。礼言うぜ」

研ぎもそっこに剣を収める。

特に予定も無いしガツツの訓練でも見に行つてみるか

そんな俺の考えを見透かしたのかウルバンが忠告という名の釘を刺してきた。

「ガツツんとこ行くのも良いけど時間ずらした方がいいんじやないか?アンタが見に行つたら…いや、見てるのをガツツが気付いたら訓練に集中出来なくなると思うんだけど」

「んぬう…」

ちくしょう否定できねえ。

仕方ない、晩飯の時にも座学の事を褒めて、ついでに夜戦訓練の方を覗きに行こう。
夜なら俺が見に行つても見つけられないだろうからな。

ウルバンと一緒に天幕に戻りながら覗きを決意する。

それにもしても本当に丁度いいタイミングだつた。

ガツツを独り立ちさせようと思つていたが、技術も知識も中途半端なうちは実現できない。あと心配なのは剣の方だけだがそれも夜には分かる事だ。
嗚呼、本当に楽しみだ。

～～～◇シス◇～～～

晩御飯を食べ終わつてすぐ、ガツツとガンビーノは席を立つてしまつた。

ガンビーノは仕事が、ガツツは訓練があるから仕方ないけどせつかく家族が揃つたんだからゆつくりして行けばいいのにとも思う。

「独り立ちかあ…」

数日前、急にガンビーノがそんな話をしてきた。

確かにガツツも12歳になつてある程度の事は自分で出来るようになつていて。嬉しい反面、少し寂しいものがある。

でもやつぱりまだ早い気がする。

使った食器を川で洗った帰り道、とある場所でガザツッと草が動く音が聞こえた。思わず体が硬直するも、音のした所をよく見ると草影から鞘と足が生えている。見覚えのある靴と剣の鞘。

「……ガンビーノ？」

何してんのこんなトコで。

「シスか？シツ 静かにしろ、今ガツツの訓練を見てる真っ最中なんだからな！」

音を立てないようにゆっくり振り向きながら、声を出すなど言いたげに口元に指を立ててる。

ホントに何してんの？

「ガンビーノ：なんて言うか、何その格好」

全身に草をまとつて顔には薄く泥を塗つている。

怒られないよう声のトーンを抑えて聞きながらガンビーノの近くに座る。

ガツツを独り立ちさせようとしてる父親の行動じや無いよね、絶対。

「いいかシス、これは必要な事なんだ。ガツツの今の実力を見極める為に見てるんだからな。アイツが一人でも生きていけそうか見極めんだよ」

「ふーん。ホントに独り立ちさせるんだ」

私は乗り気じゃないけどガンビーノがさせると言つてるからさせるんだろうね。不満が無いわけじゃないけど私は幸せな方だからあまり我儘は言えない。
実際この世界でガンビーノくらいじやないかな?子育てに積極的で女の私の意見も聞いてくれて、一途な人つて。

「…どんな感じなの?ガッツは大丈夫そう?」

「思つてた以上だな。バーランを押し返してやがる」

へえつと感心する。

頭の良さは別として剣の腕は団内でも上位に入るバーランを押せるなんて…。

「じゃあガッツは合格?」

「ああ、近々アイツにも独り立ちの話をしても良さそうだぜ。ウルバンも医学は教え終わつたつて言つてたからな」

「そう…そつか、分かった」

胸がキュッと締め付けられる感じがする。

ガッツの独り立ちまで時間が無い、成人するまで待つ気はガンビーノに無いらしくて15、6歳頃には…つて言つていた。

「シス、俺を恨むか?」

ガンビーノの問いに一瞬驚いた。

恨みなんかしない、ただ少し寂しくなるだけなんだから。

「そんな事しないよガンビーノ、私もガッツの独り立ちに賛成するから」

ガンビーノは静かに頷くだけだつた。

大丈夫、ガッツが居なくなつてもガンビーノが傍に居てくれる。私はひとりじゃない

…。

「…先に戻つてるね」

せめてその時までは甘やかしてあげたい、甘えて欲しい。まだ子供なんだから。

私達の、たつた1人の愛息子なんだから…。

これが俺の愛だ

「この団から出ていけってどういう事なんだよ!? ガンビーノ!」

剣の鍛練を終えたタイミングでモス爺がガンビーノの所に来るよう言いにきて、そのままの足で向かつたら古参兵や母さんも集まつてた。

そこで言われたのは『独り立ちしろ』って事だった。

「なんで急にそんな事言うんだよ、僕は嫌だ! ここは僕の家で皆は家族じゃないか! ガンビーノ、ガンビーノがそう教えてくれたじやないか!」

まくし立てるように言葉をぶちまける。

血の繋がりが無いのは知ってる、でも追い出すような扱いはされた事なんて今まで一度もなかつた。なのになんで急にこんな話を出したのか分からなかつた。

誰かがガンビーノに何か吹き込んだ? いやそんなハズない、ガンビーノが耳を貸すとは思えない。

「落ち着いてガツツ。ガンビーノも言葉が足りてないんだよもう一度ちゃんと初めから

言い直して、ほら
「…」

母さんの優しく諭すような言い方に少しだけ興奮が和らぐ。確かにガンビーノは時々言葉が足りなくて誤解されたり、齟齬が生じて苦労してたのは知ってる。

軽く深呼吸しながら椅子に座り直す。

少し間を置いてガンビーノが独り立ちの件を話し始めた。

「いいかガツツ、俺はな——」

そこから先はよく覚えてない。

頭が考えるのを拒否したんだ、ただガンビーノの言葉が耳に入つてくる。

聞きたくない：聞きたくないよそんな話。

何となく居心地悪くて気持ち悪かつた。

／＼／◇モスヴィラント◇／＼＼

古参兵達に連れ沿われて天幕を出していくガツツの後ろ姿眺めながらガンビーノの心境を探つてみる。

「よかつたのか？・ガンビーノよ」

「…ああ」

返事に霸気がない、まあ無理もなかろう。

傍から見ても仲のいい親子だと感じる程家族らしかつたと言うのに、自らガッツを突き放すような事をしたのだから。

確かに子供は独り立ちさせねばならぬ。だがもう少しやりようがあろうに。

「のうガンビーノよ、そこまで心辛い思いをするくらいならいつそここに、自分の元に居させてやれば良かつたのではないか？無理に独り立ちせんでも…」

「バーナー、俺がガッツに言つた言葉を聞いてなかつたのか？今じやなきや駄目なんだ。俺がまだ健在な今じやなきや…！」

気のせいいかガンビーノが何かに焦つているように見える。その焦りがどこから来てるのか、長い付き合いを持つてしても分からない。

儂にも子はあるし、なんなら孫もいる。だが子育ては妻に任せっきりだつた故に分からぬのだ。

「甘い親では無く優しい親でありたい、であつたか」

それがお前がガッツに独り立ちさせることを決意した理由か…。大した親バカよな。

「俺はガッツが可愛い、血の繋がりこそ無いが俺の大切な一人息子なんだ。アイトはこ

のクソッタrena世の中を生きなきやいけねえ。だからまだ子供のうちに、失敗しても許されるうちに世界がどんなかちゃんと見せてやりたいんだ」

「…親は子より早く死ぬ。だつたな」

平時は子が親を看取り、戦時は親が子を看取る。

だがガンビーノのように親子共に戦地にいればどつちが先に死ぬかなんて分からない。

それでもガンビーノは己よりガツツが生き残る事を当たり前の様に考えている。

「そうだ。丁寧に石をどけた道を歩かせるのは親のエゴでしかない、子の為を思うなら石をどけずに見守るべきなんだ。許されるうちに転ぶ痛みを知り、起き上がり方を学ばせる。親が死んだ時、どつちの子が生き残れるかなんざ議論の余地すら無いだろう?」正論である。

それにもしても一体誰が想像し得ただろうか、あのガンビーノがこんなにも強い父性に目覚めるなどと。

少なくとも僕には出来なかつた、できなかつたが知つた以上はこれまで同様支えてゆくまで。

「なるほどな、お前の考えは理解した。もはや僕も反対はしまいよ、だがせめて15の旅立ちまでは変わらず接してやつてくれよ?」

当然だと言うようにハツキリとガンビーノは頷いてシスと共に外に出ていった。妻と寄り添い子の成長を見守る、か。

まつたく：親バカここに極まれり じやな。

これは儂が老体に鞭打ってでもガンビーノが言つていた願い事を叶えてやらんといかんようだ。

地図を見ながらため息を着く。

ガンビーノが”ジジイ”と呼んでいた鍛治職人。これから彼を尋ねねばならぬ。せつかくの機会なのだ、旧交を温めるとしよう。

浪漫は時に常識を狩る

さて、ガツツが15になる前に用意してやる物がある。分かる奴は察しがついただろ
うがそう、大剣だ。

重武装の騎士のドタマかち割れて、ガツツが振り回せるサイズに抑えた逸品じや無
きやいけない。

幸い鍛冶に関しては適任者を覚えていたし、身近にツテがあつたのも幸運だった。

バーナーに馬と護衛と休暇を与えて送り出したから、多分暫くは帰つてこないだろ
う。

フツ、ふふふふふ…フハハハハノヽノヽノヽ！

來たぞ俺の時代がア！

今までやりたかった新兵器開発。金がかかり過ぎるとバーナーの反対で着手出来て
なかつたが知つた事か！頭の中では既に何を作るか決まつているんだ。

颯爽と工兵隊のテント群に向かう。ウツキウキが止まらねえぜ！

「居るか野郎共ッ！前々から言つてたアレ作るぞ!!」

勢いよく突入して来た乱入者に、揃つて驚いた顔を向けてくる。なんだよ歓迎しろやオラ。

ズカズカと踏み込んで設計台に図面を広げると工兵長が恐る恐るホントを作るのかと聞きに来た。

「あの団長、アレは作った所で運用が難しいとの事でモスヴィラント副団長が却下されたのでは……？」

「あ？ あーー、そういうやそんな事言つてたな。どうしても作りたくて聞き流してたからすっかり忘れてたぜ。」

思い出したからと言つて止めてはやらんがな！

工兵長の肩をガシッと掴みながら職権乱用のお手本をカマしてやる。

「いいかよく聞け工兵長、男には浪漫を追求しなきやいけねえ時がある。運用がどうこうじやない、馬鹿みたいに突つ走つて浪漫詰め込んだ最高傑作。それをこの世に生み出す事に意味があるんだ」

「は、はあ……」

「よし分かつてくれたな？ そんじやあ作つてくれ、頼んだぞ。：頼んだからな？」

困惑している工兵長に念を押してテント群を後にする。

俺が作りたい物、それは自走砲だ。装甲で覆われた上品な物じやなくていい、と言う

かそんなの作れないからな。

大型の荷馬車を4輪から6輪に増やして車輪と車軸を鉄で補強する。

そこに鹵獲してきた大砲を据え付けて完成！って感じの簡易的な代物だ。
もちろん射角調節機を付けるから近距離でも応戦可能
近々ある攻城戦に間に合えばきっと…。

自分の手で動かす戦争、チエスの如く戦局を意のままに動かせる悦び。それが体を支配する感覚。

自然と邪悪な笑みが溢れた。

俺は自分の中にある抑え込めない本能的な狂気をこの日初めて自覚した。

～～～◇名も無きチユーダー城主◇～～～

なんだ：何が起きておるのだ？

ミッドランド軍相手の籠城戦、1ヶ月も優勢を保つてきたはずが今日、突然急変した。血まみれの兵が、腕をなくした兵が、矢を受けた兵が飛び込んできては戦局の急激な悪化を知らせてくる。

「駄目です！これ以上は門が持ちません！」

「報告！城壁守備隊が壊滅、敵が押し寄せて来ております！」

「閣下、お逃げ下さい！このままではお命が危険に！」

頭が回らなくなってきた。

兵士達に急かされるままに館の外へ出ると想像を絶する光景が目に飛び込んできた。

「なんだ…なんだこれは！なんなんだコレは！！」

全く破壊され凸凹に変形した城壁。

その城壁を飛び越えて撃ち込まれてくる砲弾。投石機でなければ有り得ないような弓なりの弾道で町を吹き飛ばしている。

もはやこれまで。

せめて最後に何が起きているのか確かめる為に最後に残っていた城壁端の物見櫓に

駆け上がった。

臣下が止めるが振り払つて戦場を見渡す。

「…あれか」

600メートル程先の小高い丘の上に大型の砲台を操る部隊が見えた。

黒地に銀糸で編まれた瑠璃目の蜘蛛。初めて見る部隊紋章と異様な形の砲台だつた。だがそれが火を吹いた瞬間、私はさらに驚いた。

野砲では無い、さらに大型の固定砲を使つていたのだ。

有り得ない：固定砲は重く大きいゆえに持ち運びが出来ない物だ。城下で作つたものを壁上に上げるのがせいぜいの代物のはず。

瞬間理解した、これは王都に伝えねばいかん。と

自分のいる所が格好の的であるのも忘れて懐から用紙を取り出してペンを走らせる。

一刻も早く、あの砲とそれを扱う部隊の存在を知らせるのだ。

書き上げた書を伝令に捆ませた瞬間、轟音と衝撃を受け私の意識は途切れた。

繋がる運命

「なあ聞いたか？西の要塞が一日で落とされたって話」

「あららしいな一日で戦局を変えたって話だよな。固定砲を運用する部隊だとか」「聞いた聞いた！なんでも街1つ焼き払つて皆殺しにしたとか！」

「え、俺は男は奴隸で女は慰みものに、子供は金持ちに売られたって聞いたぞ」「ソイツら歴戦の傭兵团で負け無しなんだとか。特に攻城戦で暴れまくつてるらしいぜ」

青空の下、草原に寝転んでいるとそんな噂が耳に入つてくる。こここの所ちよくちよく聞くようになつた話だ。

黒地に銀糸で編まれた瑠璃目の蜘蛛。巷じや『銀蜘蛛部隊』とか呼ばれている。

「俺達どつちが強いかな？」

「バーカ、俺達に決まつてんだろ。いくら強いつたつてグリフィスにや勝てねえんだからよ」

リツケルトにコルカスが自信満々に言い放つ。

実際に戦つてみないうちは断言出来ないけど負ける気はしない。押されるようなら野戦に持ち込めばいい。

聞いた話だと最も得意なのが防城戦、野戦にはあまり出てこないんだとか。
まあ砲を守らないといけないだろうしな。

1人考えにふけつてゐる所に足音が近づいてくる。

「グリフィス起きてるか？」

「……どうしたキヤスカ」

「そろそろ出発だから。起きてるならいいんだ」

「もうそんなに経つてたのか、すぐに行くよ」

そう返事をして兜とサーベルを手繰り寄せる。

強い奴が敵になるならそれもいい、ソイツらを踏み越えて俺は夢を掴むんだ。
敵は強ければ強いほどいい。

そうでなきや俺の夢は叶わないんだからな。

サーベルを吊つて馬に跨る。

「行くぞ！ 目的地はすぐそこだ！」

「「「おうっ！」」」

号令に答える仲間達。

コイツらと共に俺は突き進む、だから彼等には踏み台になつてもらう。俺は決して負けない。

兜を装着しながらまだ見ぬ敵にそう誓つた。

～～～◇ガンビーノ◇～～～

巷で噂の『鷹の団』

彼等の戦場はここから遠いがその活躍は俺の耳にまで届いてくる。やつぱり大したもんだ。

正直言うとあまり会いたくない相手である。

鷹の団は機動戦が得意らしいが俺は違う、地点防御とか動かない戦つてのが得意だから相性が宜しくない。

だからと言つて負けてやらんがな。

実は負けたくない理由は他にある。

あのグリフィスって子、寝取り好きなアナルビツチ君じやん？そんなのに負けるとか
……なあ……どうよ？

ガツツに『お前が欲しい（キリツ）』とか言っちゃう子だぜ。「お義父さん！」なんて言
われた日にやその場でブチ56す自信がある。

いやまあ冗談だけどな、冗談……。

冗談ついでにグリフィスがやらかす原因のベヘリツト、あれがバタフライ・エフェクト
とかの影響受けて消えてくれないかとも考える。

因果律のしつこさは嫌つてほど分かつてるが僅かな希望は捨てきれない。

どんだけ考えても消えない悩みだ。

それなのに現実は俺の頭痛の種なんかお構い無しに目まぐるしく変動する。

「ガンビーノ！商隊が近くを通るらしいぜ！行つていいか？」

「あ」あ？行くなつて言つてテメーらが我慢した試しがあつたかよ。俺も行くから待つ
とけ

はやる部下を待たせながら兜を着けて剣を吊る。

鷹の団、いつか戦うかもしれない強敵、ガツツを筆頭にした彼等に勝てるかは分から
ない。

まだ会わないグリフィスを睨みつける。
【触】を引き起こすなんてふざけたマネ、俺は絶対に認めないからな！

因果律（神のシナリオ）は変えられない

「時は今ぞ！突入！」

突撃命令に少し遅れてこじ開けた城門を踏み越える。

入ると数秒前に我先に飛び込んで行つた傭兵達が立ち止まつてゐるのが見えた。

：何してんだアイツら。

突撃の勢いは止まつて半包围しているだけ、全員の視線の先には
全身フルブレードアーマー鎧の大男が何人かを相手に暴れていた。

どうやら手が付けられないらしい。

「ウオオラア!!」

戦斧のひと薙ぎで3、4人を切り飛ばした剛腕に、ドツシリと構えるその姿に最前列の奴らは軒並み怯んでやがつた。

「ひい！バ、バズーソだア！」

「バズーソつて灰色の騎士の？30人斬つたとか聞いたぞ!?」

「押すんじやねえ！やめろ下がれ！」

：つたく大の大人が雁首揃えて情けねえ。

「どうしたミッドランド軍！こんなものなのか!? 撃いも揃つて腰抜け揃いか！そこの将よ、俺は受けて立つぞ！」

「…ツ」

さつきまでの威勢は何処へやら、指揮官はバズーソの挑発にイラつきながらもビビつちまつてる。

ここまで来て負けたんじや笑えもしねえが俺なら殺れるつて確信みたいな感じがある。コレはチャンスだ。

誰が先に突撃するか言い合つてる傭兵共を押しのけてバズーソの前に出る。

「む？なんだ小僧、まさか俺に挑むつもりか」

「金貨10枚」

「なに？」

バズーソと指揮官の声が重なつた。

「この饅頭の値段だよ、俺は傭兵だぜ？名譽じや飯食えねえんだからコレ出せよコレ」

「なッ!?」

ちよつとした嫌がらせのつもりだつたが予想以上に効果があつたらしい、バズーソの目に殺氣が宿つた。

「高い！ 6枚だ」

「9」

「7枚！ これ以上は出せぬ！」

「…チツ、しゃーねえな」

金は取れる時に踏んだくるのが当たり前だからな。

面と向かって立つてみて確信した、バズーソと俺の体格差はこれ以上なく丁度いい。

両手で大剣を構え、少し腰を落として相手の攻撃を誘う。勝負は一瞬、カウンターで仕留める。

バズーソは怒りに満ちた目で睨みつけてくる。

「小僧：後悔するぞ！ たつた金貨7枚でその頭から割られるのだからなあ！！」

「ハツ、金貨7枚もする餅を斬り捨てるなんて贅沢で良いじやねえか。有難く貰ってくれ」

「…ツ！ 死ねえ!!」

頭を狙つた大振りの一撃。

それを屈むように避けて、思いつきり踏み込んでバズーソの死角から目に大剣をぶち込んだ。

切つ先が兜ごとバズーソの顔の半分を斬り裂いた。

「お……あ……」

「ま、こんなもんか」

膝から崩れ落ちるように倒れたバズーソ。

それと同時に味方からは歎声が、敵には動搖が広がり勝敗は決まつた。

「敵は怯んだぞ！押し崩せえ！」

「「オオオオオオッ!!」」

大剣をぶつ刺す。

「後ろから殺ろうなんて10年遅せえんだよ」

昔なら殺られてたが今はそんなへマはない、慢心はしてないが無傷で済んだのはやはり嬉しい。

倒れた奴にとどめを刺してそのまま残党狩りに加わった。

～～～◇グリフィス◇～～～

バズーソとの一騎打ちの一部始終を見届けた。無駄のない構えと相手の死角から急所への一撃。

その後は背後からの敵を苦もなく仕留めてみせた。

「ヒュ～♪敵さんにもすげえのがいるもんだな」

「あんたとどつちが強いかね？」

「ばーか、次元が違えよ。なあ？ グリフィス」

確かに戦えば俺が勝てる。

でもアイツを見た時、殺りたくないとも思つた。何故かは分からぬがコレが運命つてヤツなのかもしない。

「…この城も終わりだ、さつさとずらかるぞ」

「へいへい」

アイツの姿を見た時不思議と惹かれるものがあつた。初めて会つた気がしない、そんな感じに。

「欲しいな…」

次に機会があれば彼を引き入れるのも悪くない。

いや、きっと引き入れてみせる。俺は欲しいと思ったものは絶対に手に入れないと思

が済まないんだから…。

白黒の邂逅

ガンビーノ傭兵团を出て1年が経とうとしている。

先の攻城戦で約半年間の雇用契約が切れて今は新しい戦場を探す旅路についている。
普段はすれ違う旅人や行商人、立ち寄った村で情報を集めながら町を転々とするんだ
が、この地は人口が少ないらしくて一向に誰とも会わないまま遺跡街道まで来てしまつ
た。

やつちまつた。

まさか迷子になるなんて…。

勘を信じてここまで歩いてきた以上、今更戻るなんて馬鹿らしい。

思考放棄してほのぼの日和を満喫しながら歩いていた時、何かの気配を感じた。
誰かに見られている…そんな感覚。

大剣の柄に手をかけながら警戒する。

確かに視線を感じたんだが誰も居ない。

「氣のせい…か？」

柄から手を離した瞬間野盜らしき騎馬が5騎、なだらかな斜面を駆け下りてきた。いや、野党にしては装備が整つてゐる気がする。はぐれか何処ぞの傭兵崩れの可能性の方が高そうだ。

大剣を構え、勢いそのままに突っ込んできた1人目の男の剣を避けながらその腹を真つ二つに斬り捨てる。

間髪入れずに襲つてきた2人目の右腕を斬り飛ばすと、指揮官らしい男がビビッたのが分かつた。

しかも俺の目の前で何か言い合いを始めてる。

さつさと逃げりやいいのに：馬鹿な奴。

「くたばれッ！」

「ヒイツッ！」

「？」

大剣を振り下ろす直前、目の前を矢が掠めた。

まだいたのか：気付かなかつたぜ。

クロスボウを捨てて突撃してくる褐色肌の騎馬兵。

剣ごと斬り飛ばそうと下段の構えをして、違和感を覚えた。コイツ構えがおかしい。利き手に剣、反対の手で手綱を握るのが普通だ。

なのに手綱が緩んでいる。

唐突にガンビーノの言葉を思い出した。

『いいかガツツ、戦つても瞬間に相手の動きを察知して反応しなきやいけねえ。それこそ臨機応変つてヤツだ。顔には出すなよ? ギリギリまで相手に合わせて”此処だ!”つて時に裏をかくんだ。そうすりやもうこっちのペースよ』

「そうか、なら——

「ウオオツ!!」

「ハアツ！」

剣が交わる直前、相手が両手で構えた瞬間、大剣を寸止めさせた。

「なにツ!?

体勢を崩して落馬したソイツにひたすら打ち込む。

剣が折れるのが先か頭が弾けるのが先か、だがそれより先にソイツの兜が弾け飛んだ。

見えた顔からして、女。

「は? お前ツ」

思わず剣を止めちまつた。

女兵士なんてカルテマ以外に見たこと無かつたから。

いや、言い訳だ。ただ目の前の敵にトドメを刺す機会を俺はこの一瞬で無くした。
俺と女の間に打ち込まれた槍によつて。

「剣を引いてくれないか？」

声音からして若そうな男。

もしここに夢みる乙女がいたら「白馬の王子様！」とか言つただろうか。
俺から言わせりや白馬の盗賊団がせいぜいだけどな。

「また新手かよ。テメーらの相手してるとほど暇じやねえんだよ俺は」

大剣を正面に構えて応戦する。

「済まないな、だが俺も引けないんでね」

何のこつちや知らないがやる事は1つ。

「ぜりやあアツ！」

左上からの袈裟斬り。

馬上の敵にも余裕で届く大剣だから出来る力技で騎兵の死角、ほぼ背後の位置から斬
りかかつた。

「へえ…でもまだ甘いよ」

細身のサーベルに当たつた大剣がスウーッと滑り落ちて地面に突き刺さつた。
そして体に走る痛み。

「……は？」

弾かれた？いや、流された。

なんだ…これ。

振り下ろした大剣が受け流されたのは理解できた。

だけど自分に刺さつてゐるサーベルは理解出来なかつた。あまりにも早すぎるんだ。
敵を見誤る、すなわち死を意味する事。

「マジか…よ」

笑えねえぜ…。

最後に見えたのは兜を脱いだ男の顔。

なびく程に長い銀髪で凜々し気な、そんな感じの顔だつた。

ドルドレイ前哨戦

ガツツが鷹の団に接触した。

その噂を聞いて俺は物語が回帰しようとしてる事を確信した。『鷹の団』で『大剣振り回す若武者』つったらもうガツツしかいねーだろ。

運命とやらはどうあつてもグリフィスを闇堕ちさせたいらしい。
まくつたく冗談じやねえやい！

俺の気も知らねーで勝手ばつかしやがつて！何が運命だコノヤロー。

こちとら毎度おなじみチユーダー戦で飽きて疲れた頃合いだつてのによ。

ちなみに戦況は最悪、チユーダーの大規模反攻作戦を受けてズルズルと後退中。そんな時に新興の貴族が功を早つて戦線を突出させすぎたんだから堪らねえ。

あつという間に後方のドルドレイ要塞と分断されちまた。

そんなアホなんざほつときや良いのに『直ちに救援せよ』なんて命令が出されてウチの雇い主が無駄な手柄欲を起こして引き受けやがった。

巻き込み事故なんてレベルじゃねーぞマジで!!

しかも斥候の情報じやあ包围してんのは紫犀聖騎士団にボスコーン将軍率いるチユーダーの一軍。その数掴みで2万弱。

……夢だろ?

まあ命令だからな、しょーがねえ。仕方なく俺たちや『おバカ救出 大・作・戦☆』の主力として進軍、今は少し離れた台地に布陣してチユーダー主力と睨み合いながら機を伺つてているところだが…。

畑から兵士が取れるとかそーゆー感じなのか?チユーダーって…。

「いやあ、無理だろアレ」

「わざわざ言わなくて良いんだよバカ」

「言いたくもなるつての…あん中に突つ込むんだぜ?俺たち。紫ナンタラの騎士団はともかくボスコーン将軍とかどーすんのよ。俺当たりたくねーよ…カルテマ、アンタが相手するか?」

「……無理。一騎打ちであの将軍に勝てるとは思えない」

「ふむ、儂がもう少し若ければ…いや、難しいかな?」

「聞いたろカルテマ。モス爺だつて無理な相手なんだぜ?俺は御免こうむるぜ!」
かれこれ1時間以上も作戦会議をしてるがいい案は無し。

ウチで一二を争う戦争好きなバーナーやバーランですら衝突を避けたがっている。もちろん俺だってゴメンだが「あ、無理っす」と言つて引き揚げるわけにはいかない、やるしかないのだ。

ひとまず言い合いになりかけてる場を静める。

こういう時は独裁よろしく「こうだ！俺に従え！着いてこい！」と強く引っ張るのが1番効果的だ。

「聞けテーマーら。正面からぶつかるのは論外だ、夜襲も：十中八九失敗すると俺は思つてゐる。だが幸い敵の主力は騎兵ときたもんだ。俺達が最も得意にしてる兵科だろ？ガツツリ攻めるんじやねえ。守りながら攻撃すりや勝てる可能性はある」

ちょうど良い対騎兵戦に覚えがあるしな。

「守りながら…？森に引き込んで囲むとかか？」

「違えよバーラン。いいか、今から書く陣をお前らよく覚えろよ？コイツは”方陣”つつてな——」

◇チューダー軍本陣◇

「ミッドランド軍は動かぬか…」

「ハツ、未だ動きはありませんが敵の主力にあのガンビーノ傭兵団の旗を確認しております」

「ムウ…それは厄介ではあるが将軍、そなたならば問題あるまいな？」

「当然でござります」

「ふふつならば良い。期待しておるぞボスコーン将軍」

「ハハツ」

一礼して退席する。

その際チラツと総督の後ろの幕の影に美少年が待機してるのが見えた。

嗚呼、戦地に来てまでコレとはもうどうしようもあるまい…。

ゲノン総督。

あまり共感できない性癖で有名なお方だがそれでも我が上官。逆らうなど許されぬ。

「将軍！騎士団および歩兵部隊、いつでも出陣可能です」

「うむ、ならば騎士団長を招集せよ。作戦を伝える」

「ハツ！」

駆けてゆく部下を見送りながらため息をつく。
ミッドランドの大攻勢に對して国を傾けてまで行つてゐる大規模反攻作戦だが未だ
に勝機が見えてこない。

ここから離れた地では鷹の団とやらが力を強めているとか。

「まつたく…上手くいかぬ物だな」

次から次に悩みの種が増えてゆくばかり。

有能な将すら今のチュークーにどれだけ居るか…。上官がアレなのはこの際致し方
ないとしても、せめて部下に有能な者が欲しかつたと強く思う。

声には出さないがコボルイツツ家の馬鹿もいつそ何処かで戦死してくれれば氣が楽
なのだがな…。

「ここにおられましたか將軍、各騎士団長方がお集まりです！」

呼びに來た部下の声でハツとした。

どうやら考えながら会議室とは別の場所へ歩いていたらしい。

「すまぬな。直ぐにゆく」

まあ良い。私は騎士らしくある迄よ。

作戦と呼べるか分からんが総督の命令には従う。

騎兵で敵陣を切り裂いて、歩兵部隊がその亀裂を押し広げて分断、殲滅する。

なんと安易な策か、もう少し考えて頂きたかった……。

チユーダーの、故国の先はもはや長くはあるまいな。

この私もいすれば：

裏切りの決断

方陣。またの名をテルシオ。更に分かりやすく言えば『馬刺し量産陣』だな。馬刺しは好きか？好きなら集まれ俺が奢つてやるぜ。

明日はちよつと固めなお肉が沢山手に入るからな♪

皆でファイヤー囲んでズンドコパーティーといこうじゃないか！

安心しろ、相手は戦争ガチ勢の紫犀聖騎士団つて事で伝令は非効率だから手旗信号を取り入れてある。ああミリオタ諸君、言うでない。素人用の簡易的なシロモノなんだからな。

おかげで連携が早くなつて何とか数の差を埋められている。27000 VS 5000 の戦闘だ。

「ずつこい」なんて言つてくれるな。コツチが5000なんだから。

いやあ…笑いこらえんのも一苦労つてもんだなこりや。顔がニヤケちまうわ。

ふははははー、勝つたな風呂はいつてくる。

酔わない程度に酒を飲みつつ櫻から布陣を眺め悦に入つてると、本陣の方から渋い顔

したバーナーが近づいて来るのが見えた。

まいっちやうぜ、せつかくの酒が不味くなるつてもんだ。

「ガンビーノちょっと来てくれんか」

さすがに10年以上の付き合いともなると聲音だけで良い報せか悪い報せか分かるようになるらしい。

んでこの感じは悪い方だ。

「…いい眺めだぞ。死と生存をかけた布陣がよく見えるからオマーが上がつてこい。何があつたかは…一応聞いてやるよ」

「そうか、そつちに酒はあるか？」

珍しいな。普段ならこんな時には呑むなって説教力マしてくる奴が…。

まあ怒られたからつて止めれるもんじやねえけどな。

「強くはねえけどそれで良けりやくれてやるよ」

バーナーは黙つて上つてきた。

そこで何も言わずに酒を受け取つてグイッと煽る。多少の不満や疲弊じや顔にも見せないバーナーが、だ。

それ程の悪報…どうしよう、聞きたくねえ。

「…」

「……」

こういう時、なんて切り出すべきか俺は知らない。なにせ俺にはコミュ力なんてステキなスキルは備わってないからな。

だから待つ。バーナーが話す気になるのをひたすら待ち続ける。

でも体冷える前には話して欲しいかな（笑）

「……布陣を解けと言わされてな」

「今なんて？」

「反対したんじやが奴ら、騎士の誇りとやらが勝利より大事らしい。儂らは前衛の任を解かれる事になつた」

：成程な、コイツがしかめつ面になる訳だ。

冗談じやねーぞ。いや、冗談にしても悪質だ。

今回の救出作戦に投入された騎士団はたつたの1個。数は500程度でチューダー騎士団の4分の1以下。

ソイツらの誇りとやらの為に死ねと!?何言つてんのお前。

いや、バーナーが悪いわけじゃないか…。フフツ、どうにも俺は人の縁には恵まれてないらしい。

「そりや…嗚呼、最悪極まる命令だな」

「どう見るガンビーノ、この戦負けかのう？」

はつきり言つて数も軍事力も勝る相手に正面衝突戦なんて無謀でしかない。

誰が言つたか、『無能な上官は敵より怖い』だつけ？まつたく骨身にしみるぜ。

「まあ負けるだろうな。ここで負けたらドルドレイ要塞まで敵は行くだろうが向こうにやあの敵を食い止められるだけの戦力が揃つてねえ。だから城も取られて俺たちや大敗して終わりよ」

スッと手で首を落とすジエスチャーをしてみせる。

良くて敗走、最悪は包囲殲滅される。分かんだろ？

「もし退くなれば早めに言つてくれ。その時は儂が殿を務めるからな」

「いや、しなくていい。そうならねえ様に俺が何とかする」

「……出来るのか？」

できるさ、俺にとつて団員は家族同然なんだ。

情も感じない他人を切り捨てんのに迷いも罪悪感も恐れもない。俺は、俺自身とコイツらの為なら大抵の事は出来る。

例えそれが外道でも、悪党つて言われようとも俺は躊躇うことは無い。

「任せろ」

お前らのボスは我儘で強欲なんだ。

よ。 そんな俺だが家族は絶対に見放さねえ。ましてや無駄死になんて絶対させねーから

交渉会議

いや、乱世乱世。おつボスコーン将軍じやん、ご機嫌いかが？

なんて軽口叩ける状況じやないんだよなあこれが。

え、なんなん？なんで将軍直々に来ちゃってんの？見てみーよ俺の後ろを。

バーラン冷や汗かいてるしバーナーのしかめつ面よ。カルテマに至つては目すら合
わせようとしてないよ？アカンわ、こりやアカン。交渉失敗する気がしてきた

まあカルテマが目エ合わせないのつてボスコーン将軍が怖いつてよりは彼の後ろに
いる副官だか護衛だかのコボルトイツツだかコボルトイツツだかの騎士の意味深な視線
を避けてるからだと思うんだけどな。

うーん……カオス。

互いに無言で見つめ合い 続けてるもんだから重い空気が場を支配してゆく。

そんな中、先に口を開いたのはボスコーン将軍だつた。

「それで、なぜこのタイミングで我等チユーダーへ寝返りを申し出たのだ？貴様らの名
や活躍は聞き及んでおる。故に分からぬ、不利だからと裏切るような輩では無いはず

だ

そりやな。勝てる戦で勝てなくなつたからって理由でこんな事はしない。あくまでミツドランドに愛想が尽きただけの事。

これを上手く伝えなきやイカンのが今回の難点よ。

今こそ俺の乏しいコミュ力をかき集める時！

コミュ力総動員令発令！欲しがりません勝つまでは！

相手に緊張を氣取られぬよう少し胸を張つて、顔に余裕を浮かべて：：はい完成。

「ミツドランドに愛想が尽きたからだ」

「……？……それだけか？」

そうだよ、悪かつたな上手い理由考えつかなくて！

いいかおまいら。コミュ障つてのはな、コミュ力総動員したところで上手く口が回るわけじやないんだよ。

ましてや重い空気の中でなんて：：。くつ！

そんな真剣無垢な俺の考えを察してくれたのか

『（　　☒？☒　　）ポカーン』的な表情のボスコーン将軍は何度か唸つたのちにチユーダー軍への参加を許してくれた。

ホンマええ人やでえー。

「その代わりにお前達にはドルドレイ要塞攻略の先鋒を務めてもらうぞ」「ああ、任せてくれ。もとよりそのつもりだからよ」

初めに俺達の価値を見せとかないとな。

ある日後ろからブスリなんて笑えもしねえ。

ちなみにだがこの場合の”先鋒”は時代劇で見るような私が！いや某が！つてものじやない。直訳すると『矢面に立つて死を伴う忠誠を見せろ』ってなる。

別に「寝返った奴に払う金はない」とか言われなきや問題は無い。言われた通りに先鋒を務めるまでよ。

「攻略方法は俺に一任してくれんのか？」

「む、構わぬが…出来るのか？」

あたばーよ、こちとらドルドレイの周囲の地理はパーぺキに把握してんだ。簡単に落としてみせるつての！

「期待してくれていい、なんなら一夜でぶんどつてやるぜ。そんときや声かけるから軍の用意しといてくれや」

「ほう…」

うん、見た感じ納得してくれたボスコーン将軍の期待には答えるとだからなあ。
ふふふつアンタにや簡単に死なれちゃ困るんだ。

俺の計画。それにはアンタの死と、鷹の団との戦、それと…俺の死が含まれてんだからな、中途半端な事はしねえ。

俺アな、自分の全てをこの瞬間に賭けるんだ。

悪いが利用させて貰うぜ？ボスコーン将軍さんよ…。

「良かつたのか？あんなタンカを切つて」

「なんだよバーナー、俺が信じきれねえのか？」

会議解散後、未だに眉間に皺を寄せてるバーナー。

まあ負けりやチューダーに捨てられてミッドランドにも帰れなくなる賭けだからな。

心配になんのも分かる。

だけど俺は勝ち目のない賭けはしねえんだ。

「ドルドレイをどう攻めとるか考え付いてんのはマジだぜ？あとはちょっと編成しなきやイケねえだけだ。いいかバーナー。戦が、戦争が、この世の戦場がどう変わつてくれ

かをテーマに見せてやる！だからよ：俺を信じろ。信じてついてこい」「うむ……」

ホントに頼むぜバーナー。

いくら命賭けたつたつて何処ぞの本能寺はゴメン被んだ。チユーダーなんてタダの足掛けでしかない。

本命を掴む為に必要な過程、道程。

笑えよ神様。

テーマの使徒のシナリオを引き裂く人間の足掻きを。
運命を歪める人間の足掻きを。

ドルドレイ奪取

よし、命賭けたから本気出してくぜ。

取り敢えず要塞の対岸に布陣してみたけどやつぱりデカい。そこでこれまた無駄に高い！城壁が。

手段問わざなら幾らでもやりようあんだけど、奪いとつたらそのまま使いたいんだと。

門とか城壁は壊さないようにして落とせだなんて、雇い主の無茶ぶりに慣れたつもりだつたが上には上がいるもんだな。

ミッドランドの阿呆共に負けず劣らずのイカレポンチぶりだぜコンチクショー。

「ガンビーノ、ボスコーン将軍の使者が文を持ってきたぞ」

「催促状か？」

「なんぞ硬くて長つたらしい文面じや」

「…要約しろ」

「なんで階級が上の奴らは息苦しい儀礼やら礼儀を好むのかねえ：理解に苦しむぜ。

「要するに『貴様の戦いを見させてもらう、期待してゐるぞ』って事じやな」

あーハイハイ。つまりケツを叩きに来たつてわけね。

こいつアぶつ刺される前に動かねえとな。

「バーナー、ドルドレイを貰いに行くぞ」

「策があるのか」

もちろんある。

1つは要塞を大回りで迂回して背後の山に登つて、パラグライダーなりパラシユートモドキ作つて強襲するチ空挺作戦。

まあちよつと考えりや不可能だつて分かるわな。

流石に毛布に兵士くるめて山から突き落とすなんてマネは俺には出来ねえ。

んだからこつからが大事な本命作戦。

昼間は俺たちが、夜はボスコーン将軍の軍が交代で要塞にハラスマント攻撃を仕掛けじっくりと敵兵を疲弊させ、いい感じに敵がバタンキューしたら一気に殴り込むつて作戦だ。

なんなら攻城塔に油満載した放水樽積み込んで壁にぶつかまくつて火イつけて焼き払うつて手もあんだけどな、さすがに外道かなつて思つたから止めた。

ダメだな俺も、敵が目の前に籠つてるつてのに情に負けて非情になりきれねえ。

「…ボスコーンとこに行つてくる。部隊集めとけ」

「うむ、よかろう」

ボスコーン陣営に向かいながらふと考える。

ドルドレイを落としたらやつぱり鷹の団が来るんだろうか。来たとしてちゃんとボスコーンを殺してくれるだろうか？俺が死ぬとしたら多分その時になるはず。

ガツツに殺されるんじやない、運命に殺されるんだ。

俺が死んだらガツツは泣いてくれるだろうか： と

～～～◇ワインター辺境伯◇～～～

「報告致します！先程攻勢をかけてきていたガンビーノ傭兵团を撃退致しました。お味方の損害は軽微、現在は矢の補給と負傷者の後送中です！」

「あいわかつた」

伝令兵が退出するのを見届けると同時に思わずため息がでた。友軍の救出に失敗した挙句、送り出した傭兵团が寝返ったのだからため息の1つも出よう。

寝返つたのだから攻めてくるのは分かるがまるで手応えがない。ガンビーノ軍はかように弱兵であつただろうか？

しかもこれで7日も攻めては退いてを繰り返すばかり、城壁を登るもなく城門を打ち破るでもない。

ガンビーノ自慢の亀甲陣とやらで近づきながら矢を放つてくる程度。

昼夜問わず、裏切り者とチューダー軍が入れ代わり立ち代わり仕掛けて来るあたり焦つておるのだろうか？

確かに兵は多少疲れてきておる様子だが。

…どうも腑に落ちぬ。

「旦那様、お飲み物をお持ちしました」

「む、ああ入れ」

物思いにふけるのも程々にメイド長の持つてきたコーヒーを一口。

これだ、これが落ち着くのだ。

仮にもこの要塞の守備に着いていた連中だ、ここが難攻不落であることくらい理解しておるはず。

何を企んでるか知らぬが無駄な事よ。

私は奴の首が落ちるのを待てば良い。この要塞を落とせずチューダーに始末されるか、部下に討たれるか戦で死ぬかの3択よ。

やはり教養のない者はろくでもない最後を迎えるものだ。

「まつたく、愚かな男だ」

援軍が来たら挟み撃ちにしてやろう。

そして世に知らしめるのだ、ドルドレイ要塞は不落にして傭兵团なぞ国家の主力たりえぬ。とな！

……なんだ？……まだ夜も明けておらぬでは無いか。

何処からか聞こえる喧騒に目が覚めたがおかしい、部屋が外からの明かりで揺らめいている。

「…火、か？」

明るい。明るいのだ。

「!? 燃えている？ あれは：いや、まさか」

頭をよぎつたのは『夜襲』、それもおそらく本気の攻勢であろう。閉じた窓越しに敵か味方が分からぬ鬨の声がハツキリと聞こえるのだ。

これは…まずい。

「旦那様！ 大変でござります、敵が！ 敵の大軍が城壁を乗り越えて城内に！」

突如ノックも無しに飛び込んできたメイド達、皆して顔色が悪く青ざめている。

「敵は！ 奴らは何処まで入ってきたのだ！」

「分かりません、あつちこつちで火の手が上がつてまして…」

「あつという間でした：！ あつという間に敵が城壁を乗り越えて來たのです！」

やられた！ 今宵は新月、こちらの壁上の松明を目印に夜陰に紛れて近付いたのだ！

考えうるに攻城塔に兵を満載して來たと言つた所か。くそつ！

「お前達は敵がこれ以上侵入せぬように窓や扉を補強してこい！ それから残つた兵をかき集めて――

!!

「大変でござります！内壁が突破されました！お逃げ下さい！持ちこたえられません

指示を遮つて駆け込んできた負傷兵が告げたのは城の陥落と同義の言葉だつた。
：負けだ、もはや如何ともし難い。

手で払うようにメイド達を退出させて一人椅子に腰を下ろした。

勝てるはずだつた。

よもやこの要塞がこんなにも容易く落とされようとは…。

不思議と心は落ち着いている。

ドカドカと近付いて来る乱雑な足音が聞こえ、開け放たれた扉から入つてきたのは、
ガンビーノ傭兵团の将の一人。名は忘れたが知つたところで…だろう。

無念だ。

「テメーが辺境伯だな？俺はバーランつてんだ。あつと！名乗らなくていいぜ、名なん
ざ聞いたつて覚える気ねえからな。首だけよこせや」

私は剣を抜きはなつた男に最後に問うた。なぜかは分からぬ、聞きたかったのだ。

「最後に答えよ。なぜ寝返つた、貴様らとてミッドランド人であろうに…故国を裏切つ
てまで何が欲しかつたのだ」

「はあ？ンなもん知らねーよ、知らねーけど俺達はガンビーノに着いてくつて決めた人

間の集まりだからな。強いて言うなら、”新しい世界”を見してくれそうだから。
かな、ガンビーノはよ。それに俺はお前らみたいに国とか名誉なんて考えたこともねー
よ」

バーランと名乗った男の剣が私の首を狙つて振り下ろされる。

…やはり私には分からぬ事だ。

残念だ、このような最期を迎えるとは…

これ以上なく、残念だ。

光の鷹・暗闇の蜘蛛

「つかー！あれがドルドレイかよ。デケーなあおい」

「うるさいぞコルカス、私らは偵察で来てるのを忘れるな。ガツツでさえ騒いでないんだぞ」

「ケツ！」

「キヤスカ、なんで俺と比べんだ？」

「？ お前、敵がいたら迷わず突っ込んで行くじゃないか。1番偵察に不向きだと思つてるんだが何か間違つてたか？」

：間違つてねえな。

だけど今回に関しては突つ込むなんて馬鹿なマネはしねえ。なんせ相手は俺の育ての親にして鷹の団にならぶふつかりたくない相手として有名なガンビーノ傭兵团。

聞いた話じや『銀蜘蛛部隊』とか呼ばれて恐れられてるとか。

「それについても：凄まじいな。なんだあの死体の山は」

「…えつぐいぜ。軽く万は死んでんじゃねーか？」

今、俺達の眼下に広がるのはドルドレイ要塞に辿り着くことなく死に絶えたミツドランド兵の死体の群。

要塞正面に幾重にも構えられた空堀、土壘、馬防柵、棘木に阻まれながら矢を受け死んでいった兵士達。

アイツらは知らなかつたんだろう、ガンビーノの仕掛けた罠の効果を。酷いところは死体が二重三重に折り重なつていて。

突撃してどうにかできるものじや無いんだ、俺が1番よく分かつてゐる。

「…戻ろうぜ、グリフィスには俺から伝える」

「ああ!? なんでテメーが言うんだよ！ 信用ならねえ！」

「要塞正面に作られてんのはガンビーノが作つた対人罠だ。城壁に近付く敵を殺す事だけを考えて作られてる。アレが側面に作られてねえのも罠の内なんだよ」

「なんでお前がそれを知つてるんだ？ 戦つたことがあるのか？」

「…ガンビーノは俺の親父だからな」

「「はあ!?」」

キヤスカとコルカスが驚きの表情で俺を見てくる。

まあグリフィスにさえ言つてねえ事だから無理もねーか。

「だからグリフィスには俺から伝える。俺以上に親父を知つてる奴も居ねーからな」

「良いだろう。だが私も同席する」
まあそういうだろうな。

2人から不信感が拭えてなさそうな雰囲気をバリバリ感じる。
「なら俺も同席してやー

「お前はいい。ガツツと喧嘩になるのがオチだ」
「はあ〜!?」

「…先いくぜ」

つたく、偵察に不向きなのはどつちだか。
…なんか…気が乗らねえなあ。

～～～◇ガンビーノ◇～～～

「ふはははははつ！良い！良いぞガンビーノ！」

「はあ…そりやどーも」

これ以上ないくらいご機嫌なゲノン閣下。

その両隣には線の細い美少年達が侍る。いや、マジで美少年なんだよな、これが。

美少女侍らせるんならまだ分かるんだがこれはちょっと……わっかんねーな。
髭面醜男と美少年のデュフフハーレム展開とか貴腐人方につつてもエスケープ案件
だろこんなん。

これが最高司令官かよ…。

いつもあんな感じなのか聞いた時、ボスコーン将軍が目エ合わせてくれなかつたぐら
いだからなあ。

「あ～閣下? ご機嫌な所悪いんですけどね。鷹の団がミッドランド軍と合流した件はどう
されるんで?」

「ガンビーノ、貴様は心配性であるな。この要塞にはボスコーン将軍に紫犀聖騎士団、コ
ボルイツツ家のアドンもおる。案ずるでない」

…ウツソだろお前。

ボスコーン将軍? 説得のために援護射撃を…、なんで目をそらすんだよおい!

「お言葉ですが奴らは他の傭兵团と一線を画す”何か”がある。だからこれまで生き残ってきたんだ、侮るのは危険かと!」

呆れ混じりの怒りを声に乗せてゲノン総督にぶつけるが暖簾に腕押し、まるで聞き入れる様子は無く…。

「嗚呼そうだ、言い忘れておったわ。ボスコーン、ガンビーノ。鷹の団と剣を交えるにあたつてグリフィスを殺す事は断じてならぬ！生け捕りにするのだ」

「…幾ら出してくれんです？」

「ガンビーノ！ 控えよ！」

「ボスコーン将軍、俺はまだ傭兵なんだぜ。正式に組み込まれたわけじゃねえ。金を求めて何が悪い」

それにこの命令だけは受けときてえ。

ボスコーンが拒否できない流れつてのを作つちまえばこつちのもんよ。
悪いな、将軍。

「グリフィスを生け捕りにした暁には貴様の望む額を出してやるぞ」

「へへへ…そりやどーも。お忘れなく…」

「…ツ。御意」

やつたぜ。

後は鷹の団がどう出てくるか…だな

賽は投げられた

ミッドランド軍本陣では延々と軍議が開かれていた。

いくら兵を投じてもまともに城壁に取り付けない現状を打開せんと各軍団長が集められている。

が、なかなか良案が出てこないまま時間だけが過ぎていく。

「だから、両翼から軍団を進めれば突破出来ると！」

「貴殿は知らぬのか？ 青藍騎士団がそれをして半数を失つて敗走したではないか！」

「いっそ投石機で門を破つては如何か？」

「そなたは着任間もない故知らぬだろうが、あヤツらに砲弾を撃ち込まれて使える投石機は残つておらぬのだ」

「たとえ城壁まで辿り着けても激しい抵抗を受けて結局は引くしかなくなる。しかも紫犀聖騎士団が追撃してくるから被害が攻める度に増してゆく……」

揃いも揃つて唯々唸るばかり。

無理もない、ミツドランド軍の首脳陣は老練な者達ではあっても、老練故に新しい感覚や柔軟な考え方が難しいのだろう。

俺もガツツから要塞前の足止めの罠が使えなくなる条件を聞いてなかつたら危なかつたかもしかれないとくらいだ。

しかも聞けばその罠はガツツの父が考案したとか。
最高の好敵手だと喜びたい気分だ。

「いやしかし、これでは幾ら鷹殿といえ攻略は厳しいでしようなあ」

軍議の緊張に耐えかねたのか、場の空気を緩めようとしたのか、1人の貴族がそう切り出してきた。

軍議の場に呼ばれはしたが身分のせいで発言が難しい身には嬉しい舟だ。乗るしかない。

「お望みとあれば：」

「いやいや、致し方ない事ですぞ。何せ難攻不落の一今、何ど？」

「陛下がお望みとあれば、あの要塞を落としてご覧に入れます」

俺の言葉を受けて場がざわめき出す。

無理もない、国のトップたる自分達が落とせない城をポツと出の若輩に落とされたら面目丸潰れだろう。

だが俺は俺の夢の為にもここは見せ所、引く訳にはいかない！

「どれ程の兵がいるのじゃ」

「陛下ッ！」

異を唱えようとした男を手で制して王は言葉を続ける。

「グリフィス、我が軍は既に多大な犠牲を払つた。これ以上負ける訳にはいかぬ。どれ程の兵を与えればあの要塞を落とせるのじゃ」

「一兵も頂きません。私の鷹の団だけで当たります」

「不可能だ！」

「鷹殿、悪い事は言わぬ。見栄を張るのはよされよ」

よくもまあ言えたものだ。

どれだけ自分達が兵を無駄に溶かしてきたかなんて考えた事も無いのだろう。
新しい知恵に対しても古い知識を必死であてがおうとする、それが叶わぬと知つて尚彼らは変わろうとしている。

こんな奴らよりも俺の方が優れていると國に、王に、兵達に見せつけてやる。

「陛下、たとえ失敗しても失うのは1傭兵团のみ、痛手にはなりますまい」

「鷹殿ッ！」

「グリフィス殿、自身が何を言つておるのか！」

「静まれ……余は決めたぞ。鷹の団グリフィスにドルドレイ攻略を命ずる」
「はつ」

一部を除いた軍議に連ねる貴族の表情が僅かに歪んだのがわかる。

これでいい、それでいいんだ。

この場で俺に好意的な貴族を見極められるのはデカい。

「それでは私はこれで

ユリウス将軍、貴方は…危険だ

男2人の出会い

失敗した…。

よもやあの小僧があれ程に強いとは！
しかしマズイ、これ程の事を隠し通すなどできるわけが無い：逃げた兵から既に話が
伝わってるやもしれん。

痛つ、くそつ！傷のせいで表情を変える度に痛むわ。

「何たるザマか、アドン！」

「うッ！」

突如聞こえた恐ろしい声に肩が震える。

誰が聞き違えようチユーダー軍最強の男、ボスコーン将軍の怒気をはらんだ声だ。
軍規を破つてまで私怨を優先した以上よくて投獄、そのまま手打ちもありえる。
い…いかん！私の命が…

「いや、コレは違うのです！まさかあの小僧が…」

「黙れアドン！独断で兵を連れ出し受けた被害は甚大、そして弟のサムソンまで討たれ

たにも関わらず仇を打つどころか手柄もなし、よくもそのツラ下げて戻れたものよ！」
「ぐう……いや…………ですがツ！」

まずい、これはマズイ。

最悪斬られかねん!!

ああっ！戦斧に手を……！

「終わつた……」

死を悟つた直後、鼻先スレスレで戦斧の刃が止まり風圧が吹き出た冷や汗を飛ばした。

——ツ！？

生きてる？私は生きてるのか？

「……貴様の処遇は戦の後に決める。ガンビーノと共に城の守りにつけ、地下牢にぶち込まれぬだけでもありがたく思え！」

「は、ははア!!」

立ち去るボスコーン将軍の足音に安堵を覚える。

助かつた！ああ……腰が抜けたわ。

ん、ガンビーノだと？確かに元ミツドランドの傭兵じゃなかつたか？城を預けるということは正式に組み込まれたのか？

むむう…私は聞いてないんだがな。

「おやあ？ そこで腰碎けてんのはもしやアドン殿か？」

「な！ なんだお前は！」

不意に話しかけられたせいで少しどもつたがすぐに立ち上がった。腰碎けだと？ そんなわけあるか！

「あ～？ 何度か会つてんだけどなあ：んん、俺は影薄いのかあ？」

「き、貴様つガンビーノ！」

思い出したぞ、少し前に寝返った傭兵団の長ではないか！ むう。なんたる悪党ヅラ…確かに裏切りそうだ。

「まあ共に城に籠るんだ。仲良くしようじやねーか」

スッと手を差し出してくるあたりわきまえておらぬらしい。貴族が平民の手など握るものか！

「どちらが上か分からせてやるわ！」

「ふんっ！ ガンビーノとやら、おのが身分をわきまえるのだな！ 誰が貴様の手など――

「アドン殿？」

突然ドスをきかせた声で呼ばれ、思わず言葉を止めてしまった。いや、ビビってなどおらぬ！ 貴族たるもの下の者の言葉も聞いてやらねば――

「その傷、大剣の戦士にやられたのでは？」

「な、なぜ知つている」

ボスコーン将軍から聞いたのか？いや敗走兵からか？

「そりやまあ、で。強かつたでしよう？」

「はつ、何を言うか！これ以上無いほどにボコボコにして痛めつけてやつたわ！痛つ！？」
ガシツと手を捕まれかなり近距離でガンビーノの顔を見た。やはり間近で見る面ではない。殺氣を感じる顔だ。

いや、それ以上に握られた手が痛い。凄い力で締め付けてくるのだ。

「俺ア下手な冗談が嫌いなんだよ：強かつたろ？俺の息子は」

「離せっ！私は負けてなど——息子？」

「テメーの傭兵百人殺ったのも、弟殺ったのも俺の息子だ。名前は”ガツツ”って
んだ。いい名だろ？親不孝な出来息子なんだよ：」

「ひい！！」

人の目ではない！人間が出来る表情では無いわ！

巣窟だ…。この城は化け物の巣窟になつたのだ！！

「おいおい、俺はなんも怒っちゃいねえ。むしろ感謝してんだぜ？息子の手柄になつて
くれたアンタらによオ」

「……う」

いつたい何を言つて いるのだ、この男は。

今どきのミッドランドの平民はこんなにもイカれて いるのか!?

「ま、戦い 方は間違つちやいねえよ、相手が悪かつたつてだけだ。嫌いじやねーぜあんた
みてえな奴」

すれ違いざまにポンツと肩を叩かれた。

馬鹿な、この私 が震えているだと?

いや、駄目だ。この男はボスコーン将軍の次に敵にしてはいかん!

「…仲良くしよーや」

ガンビーノの言葉を背に受けながら思つた。
断つたら死ぬやもしれん…と。

カルテマとアドン

ボスコーン将軍出撃。

その報せを聞いた時のガンビーノの笑顔は見た事ないほど歪んでいた。
まあ元々強面だから余計にってのもあるんだろうけど…
計画を知っている私たち古参兵は笑顔の理由がまだ分かるものの、アレは他人には見せ
られない。

城壁の持ち場で腰掛けて遠目に見えるチューダー軍と、背水の陣の鷹の団を眺めながら
ガンビーノの賭けを思い出してる時、それを邪魔する足音が近付いてきた。

「おおつ、カルテマ殿ではないか…ここにおられたか。いや～奇遇ですな！」

「これは…アドン殿」

寝返りの交渉会議の場で顔合わせした時辺りからなにかと執拗に絡んでくるように
なった男。

何か目に付くことをした覚えなんか無いんだけど。

「なにか御用ですか？生憎ですが貴族相手と言えど儀礼には疎いもので、失礼」

「いやいや気にする事はない！ところで、その…カルテマ殿は今は独り身だとか…？」

ガンビーノも言つてたがこの男はバカだ。

バーランとは毛色の違うバカらしいが私には同じにしか見えない。こういうバカを
気に入るのはガンビーノの悪い所だ。

少なくとも私は空氣の読めない男が根本的に苦手だ。

「それは…誰から？」

「バーラン殿から！」

アイツ次の戦場で殺してやる。

風がでて城の周りに砂埃が舞い上がり始めた頃、どつちから仕掛けたのか分からな
いが鬨の声と地響きが開戦を知らせてくる。

「始まつた様ですよ？私の配置は此処ですけど貴方は内側でしょう。戻られては？」
「んむう……」

本気でガンビーノはこの男も連れて行く気なのか？

まあ連れてくと言つてた以上はそうなんだろう。この男が着いてくるとは思えない
んだけど…。

そもそもこの男は忠誠なんて物を持ち合わせてるのか？
「戻る前に1つ聞きたいんですがアドン殿、貴方は誰に忠誠を誓つているのですか？」

「む、急ですな……」

「どうなんですか？」

少し迷つてる辺り、チユーダー帝国に心酔してゐるつてワケではなさそう……かな？
「そうだな、騎士の忠誠とは神と王に捧げる物ゆえに——」

違う。私が聞きたいのはそういう答えじやない。

「貴方自身の事を聞いてるんですよ」

「……」

これは私の予想でしかないが、多分この男は生まれながらの貴族だつた。だから階段式で騎士になつたのかも知れない。

誰かの為にとか考えた事も無い人間が命を掛けた忠誠を誓うなんてありえないだろう。

ああ、そういう意味ではガンビーノの目は確かな物だ。

ボスコーンと違つて追い詰められたら騎士やら忠誠なんてほつぱりそうな感じがする。

でもそろそろ敵の別働隊が来る頃合いだ。

これ以上話していられない、また機会があつたらいろいろ聞いてみるのも悪くないかも知れない。

「失礼、ただ的好奇心で聞いたんです。困らせるつもりは無くて」

「ああ……構わないとも。言わされてみるまで深く考えた事も無かつた。いや、決して祖国を蔑ろにしてる訳では——」

「大丈夫ですよ、貴方を咎める人はここには居ませんから」

「カルテマ殿ツ！」

え、なに。なんで食い気味になつてんの？

怖い怖い

「伝令です！カルテマ隊は即座に城門を閉じて敵の侵入を阻止しろとの事！以上」

「すぐにやる。そう伝えてくれ」

「はっ！」

アドンと別れるいい口実ができた。

足早に門に向かいながら今後の流れを思い返す。

ガンビーノの勘はやけに当たる。

でもそれが例の計画を必要とする程なのか私には分からない、今は不安だけど敵の別働隊が来ればきっとこの不安も晴れてくれるはず。

私達は一蓮托生。

今更逃げ出すなんてありえないでしよう

ここが最後の大戦（おおいくさ）

ボスコーン将軍、ゲノン総督の戦死を皮切りに形勢は完全に逆転してしまった。

言うて初めからコレが狙いだつた俺からしたら願つたり叶つたりなんだがな。

ただ最近ヤル気満々なミツドランド正規軍から罵声を浴びせられたり、寝込み襲われたり、盾持つて近づいて来られたりと熱烈な猛アタックを受けている。

連中は過剰つて言葉を知らないらしい。

「良いねえ、壯観じやねーか」
〔そうかん〕

俺もそれなりに場数を踏んできてるがここまで凄まじい数の総攻撃を受けたのは初めてだ。

今までではせいぜい2～3軍団規模だったのに今回は参戦した貴族共が根こそぎ動員してきてるらしい、10軍団くらいは居る。

カラフルな津波つて感じだな。

何色もの旗がたなびいていて、その旗の群れにバラバラと矢を放つ味方。

残つたミツドランド軍の連中はメンツを掛けて來てるから簡単には引き下がらない。

おかげでジリジリと距離が縮まっている。

「なにを悠長に眺めておるのだガンビーノ！早く防がねば！ええい、なんなのだあのやる気のない反撃は！」

「いいんだよアレで。今じゃアイツらくらいだぜ？眞面目に戦争してんのなんてよ」

「突撃してきたミッドランド兵を慈悲もなく射殺しておつた者が何を今更…言つてゐ事とやつてる事がまるで違うではないか」

「そりやーおめえアレだよ、城壁狙つて来るヤツらが悪い。初めから罠を狙つて來てりや死なずに済んだんだからな」

「な、なに!?」

あの罠は時間稼ぎの為に置いてただけだからな。

撤去する事を考えてなかつたもんだから、代わりに必死こいて撤去してくれてるミッドランド軍に感謝してゐるのはマジな話だぜ。

「ま、まあ良い。だが抜かれたらいかにする気だ！アレを防ぎきる兵力などこの城には残つておらんのに!!」

「はあ？誰が守るつづつたよ。俺は初めから籠城する気なんて微塵も持ち合わせちゃいねえんだ」

「まさか城を捨てる氣か?!」

あ、そういうアドンに計画の事言つてなかつたわ。
てへべろつ（ノヽ?ヽ?）☆

「俺たちは最後に一戦してこの城を去るつもりだ、次の行先も決まつてゐるしな」
「……はア!?」

「当然だろう、こんな死ぬ価値も無い戦で死んでやるなんて正気の沙汰じやねえ。
それで得するのは首級をあげれるミッドランド側だけで、俺たちや死に損。」

三十六計逃げるに如かずつてな。

「ぐうッ、逃げるとしてつ！ 逃げるとして何処に行くと言うのか！ 此処で籠城して本國
からの援軍を待つのが定石ではないか！」

分かつてねえ、分かつてねえな素人め。

俺たちは包囲されてんだ、伝令なんか出せねーしこつちの主将と指揮官が討たれた話
はすぐにチューーダー本国に伝わるだろうよ、でだ。

本国のお偉いさんはどう考えるかだ。

俺なら救う為に兵を出すとかはしねえ、そのまま籠城を命じて反撃部隊の集結と補充
の時間稼ぎに充てる。

要は捨て駒にしちまうんだ。

「いいかアドン。もう俺達に生き残る道なんて残つちやいねえ。いや違うな、あるには

ある。だがそれはマトモな道じやねえ茨の道だ。この泥沼の戦争から1抜けする為の一縷の望みにかけたんだ、生き残りたきや着いてこい！死にたきや残つて苦しんで死ねだ！何のためにここまで来たというのか！」

「俺たちはクシャーンに亡命する」

「亡命…？　クシャーン？」

初めからクシャーンに渡ることが目的だつたんだ。

それが叶うところまで来れた、今更やめられるもんか！

「よく聞けアドン、この戦争は講和なんて出来ねえ。国益を賭けて始めた戦争で、ミッドランドもチューダーも、とつくに利益を上回る損害を抱え込んじまつてんだ。

いや、それ以上に積み重なつた死体と怨みが多すぎる。どつちかが滅ぶまでこの戦争は終わらねえんだよ！」

「だから…逃げるのか？茨の道を行くと言うのか!?」

「道は道だ。茨の道でも道だからな」

「——ぬう」

罵の殆どを取り外したのか敵のミッドランド軍の鬨の声が強くなつてきてゐる。

もう時間がない。

「来るのか、来ねえのか！今、ここで決めろ！アドン!!」

「ぐぐツ」

「どうすんだ!!」

もう行くしかない。

討つて出るタイミングは逃せないからな。

「行く！行くぞ！私も共にクシャーンへ行く！」

「ならすぐ隊を集めろ！一点突破で港まで突っ走んだ。港に船が来てるはずだからな、最後の戦だ。最高の一戦をして行こうじゃねーか」

「うむ！」

兜を取つて緒を締める。

ここで生き残れば俺は運命の呪縛から解放されるんだ、必然気が引き締まる。

「野郎共出るぞ！決戦だア!!」

誰にも邪魔をさせるものか。

俺はもう――

自由なんだからな

運命（さだめ）受け止めた先に

「あれがガンビーノか：おのれ傭兵上がりが!!」

ドルドレイ攻略の終盤というタイミング、ここに来て予想外の衝突が起きた。司令官と主力の将軍を失つて、一時は申し訳程度の抵抗しかしてなかつた奴等が何を血迷つたのか出撃。

敗軍残党の悪足掻きと舐めてかかつた最前列があつという間に食い破られて中列で激しい攻防戦になつた。

「止めろ！押し返せ！我らミッドランドの強さを見せてやれ！」

各部隊長の指揮も効果は見られない。

無理もない、彼らは上官の戦死の穴埋めとして繰り上げ昇進しただけの者が殆ど。歴戦の部隊相手に善戦しろと言う方が酷だろう。

だがそれでは困るのだ。

何としてでも敵の首を取り、手柄を立てねば調子づくグリフィスを牽制出来なくなってしまう。

私がかき集めた白龍騎士団の再編部隊に至つては敵の先鋒を潰そうとして、逆に青鯨超重装騎士団に呆気なく蹴散らされてしまつていて。

何たるザマか：頭が痛くなるわ。騎士団の面汚し共め！

このままでは私の立つ瀬が無いではないか。

もはや私の手持ちのカードは尽きたも同然。ゆえに出し惜しむ時では無い、切り札を出すしかあるまい。

「ラグドール、来い！」

「はっ：御用でしようか？」

ラグドール。この男は我が白龍騎士団に属する弓兵で、100m先に立てた矢すらも射折る弓の名手。

本当はグリフィスを殺させようと考へたんだが暗殺などという手段は武門の恥。

いずれ堂々と排してくれようぞ。

「あの馬上の男が見えるか？」

「ええ、灰銀色の鎧の男ですね」

「奴を射殺せ、一矢で確実にな」

「承知」

ラグドールはY字の棒を地面に突つ立ててクロスボウを構え、狙いを定め始めた。

聞いた話だとあの男は憎き鷹の団の切り込み隊長の父親だとか。鷹の関係者は少ないに越したことはない。

恨みはないが死んでもらおう。

悪く思うなよガンビーノ。貴様自身に興味はなくとも私はその首に用があるのだ。
死んでくれ、死んで私の役に立て。

「…いつでも」

「放て!!」

↓↓↓◇アドン◇↓↓↓

ドルドレイを棄てると決めた直後の敵中突破。

確かに私はガンビーノがマトモな、常識的な戦い方をする男ではないと分かつてい
た。

だが今こうなつてくるとどうも私自身も同類だったのやもしれんと思えてくる。

ボスコーン将軍であれば間違ひなく残つて戦つたであらうし、逃げると言えば首を撥ねられたやもしれんからな。

「む、避けたか！」

突つかかつて来ていた敵将を切り捨てるに同時に周りの敵兵が引き潮の如く、いや蜘蛛の子を散らすように壊走しだした。

10騎から先は数えてなかつたが中々に骨が折れたわ。にしても、私もやれば出来るものだな！

ガンビーノからもらつた補充の騎兵共も私の命に従つてよく戦つてくれてゐる。

ここまで脱落は数騎のみ、厄介と思つてゐた白龍騎士団すら撃滅した今の私に恐れる物など無い！

「命のいらぬ者から前に出よ！この三叉槍の餌食にしてくれるわ！」

「ほぞけ！チューーダーの犬風情ぎやツ」

「くつ：敗軍の将如きがツ！」

「フハハハハアッ!!どけどけえい！」

止めようと必死の形相で向かつてくる騎士共の首が、腕が血飛沫と共に宙に舞つていく。

口では大層な事を叫ぶくせに大した事ない奴らよ！

あの小ぞ：もといガツツとやらには見舞うことが出来なかつたが後で人伝いに聞いて震えあがるに違ひない！

ついでに後ろから続くガンビーノにも私の強さを見せつけておけば、後々良い待遇が期待できるというもの。

「ぜえりやあああ——！」

それは敵の後詰に突つ込んだ直後であつた。

風切り音というより唸りに近い音の矢が顔スレスレを掠めていった。

し、死ぬ！今のは死ぬぞ！当たつてたら即死で召されるぞ。おのれ私がこの隊の将と知つて狙い撃つたのか！

見ればかなり近くに狙撃手らしき男がクロスボウを構えていて、次の矢を装填しようとしている。

もう、弓兵の身で逃げずに抵抗する度胸は見事。

だが許さぬ！貴様だけは生かして帰さぬ！

何やら後ろに派手な装束の者がいるがおそらく何処かの貴族の影武者であろう。如何にミッドランド人がイカれてると言え、まさか本物の貴族がこんな所にいるはずが無い。

「逃がさぬぞ。食らえい！我がコボルイツツ家に伝わりし槍術、岩斬旋風——」

「う　つ！」

「う？”「うつ」てなんだ？

その聲音は言つちや：聞こえちやいかんヤツでは無いのか？

振り向いた先に見えたガンビーノの姿。

兜の額部に矢が突き立ち一筋の血が顔に沿つて流れ、ガクンと下がつた手から抜け落ちる剣。

そのままユラリと体が揺れ、仰け反るように落馬して兵の波に消えていった。
「ガ……ガンビーノオ！」

敵も味方も一瞬だけ止まつたような気がした。

し、しまつた！コレでは相手に我らの指揮官が殺られたよと教えたも同然では無いか

！

や…やらかしたか？

「「大将首だアー！」」

おつふう…

さつきまで逃げ腰だったクセに！

手柄が目の前と知つて勢い付いたか、現金な奴らめ！

大将首を取らんとする敵とそれを食い止める味方が入り交じつて混戦を極めていく。

もはや陣形もへつたくれも無くなつてゐる。

ああわわわ、やつてしまつた。

どうする!?ここは私が残つて殿を務めるべきか?いやだが死にたくないぞ!!

「ここは儂が殿に着く!ゆけえ!!」

……え?

状況をいち早く理解したバーナー殿が歩兵を纏めながら叫び、カルテマ殿の高い声がそれに続く。

「アドンはそのまま突つ切つて!ウルバンツ、ガンビーノを拾つて来て!バーランは私に続きな!」

「おう!」

いかん:いかんぞ!それはいかん。

いくらなんでも己の失態を他人に押し付けて死に追いやるなど出来るものか!

「待たれよ!ここはこのアドンが殿に!」

「黙つてゆけい!!ガンビーノには予め伝えておつたのだ。貴様のようなひよつ子は寧ろ邪魔じや!」

「さつさと走れアドン!後ろが食いつかれんぞ!!」

「アンタが突つ切んなきや私達は囮まれんだよ!仲良く心中なんてまつびら御免!さつ

さと走れ！」

ぐう…お許しを！

「青鯨超重装騎士団私に続け、突破するぞ！」

このアドン、せめて敵陣を切り裂いて見せようぞ。

この失態はいずれ必ず…!!

その手が掴む未来は

おーー真っ青な空。

眩しくておめめシパシパすんぜコンチクショ一。

「ん、起きたかガンビーノ」

おー、ウルバンじやねーか。どうしたよ？そのクマ
目を開けたら俺は荷馬車の上にいた。

周囲に広がる景色に見覚えなんかない。

「ウルバン：今どの辺だ」

「ちよつと待てよ、地図がこのへんに……」

かなり体がしんどいが今は気にしてる場合じやねえ。なるべく急がねーと追つ手な

り待ち伏せに会う可能性が高くなつちまうからな。

いくら隊長クラスが平氣でも兵隊は違う。

ここまで来て無駄死になんて俺が許さねえ。

「手えかせウルバン。寝てる場合じやねえ」

頭をあげた瞬間、視界がぐるっと回つて吐き気を覚えた。そういうや頭に矢が当たつたんだつけか。

よく生きてたな俺

ダメだ頭グツラグラで立てねえや。

「あ～寝てろ寝てろ。えつとな、今はもう少しで折り返し地点に到着するつて所だ」

「随分早えな。俺はかなり寝てたのか？」

「いや2日くらい寝てた。ここまで強行軍で来たんだよ。ほら、前にアンタが言つた……”しゃりよーか” だつける？あれでな」

しゃりよーか……何言つてんのお前。

俺そんな意味わかんな事言つた覚え無いんだけど。

「なんだよ覚えてないのか？まさか記憶が飛んだのか？歩兵を荷馬車なり幌馬車に乗せて移動させるつてアンタが提案したんじやないか」

ああ！思い出した。『機械化歩兵』の話か！

そうだそうだ伝わりやすいように”車輜化歩兵” つて言つたんだつた。

「そういやそうだつたな。て事は今はバーナーが仕切つてるとか？」

「いや……モス爺は戦死したよ」

死んだ…? バーナーが?

「じゃあ今は誰がこの軍率いてんだ?」

「前衛はバーランが、ここ中列はカルテマ、最後尾はアドンが率いてるよ。敵襲の際は各部隊が相互支援する形を取つてから心配はない」

そりや頼もしいこつて。

「モス爺の最後…聞くか?」

「いや、必要ねえ」

あの爺のことだ、自ら好んで殿を引き受けたに違いない。

「老いて床で朽ちるなど耐えられぬ」つて事ある度に言つてた奴だ。戦場で散れたなら本望だろうさ。

「ウルバン、伝令出してひとまず折り返し地点で休ませろ。こんだけ進んだなら追い付かれる事もねえはずだ。馬が潰れちや目もあてらんねえしな」

「あいよ」

そういうやり返し地点つてどんな所なんだ?

野営は仕方ないとしても都市部だつたら避けなきやいけなくなるから困んだよな。

「地図かせ」

「ん」

えーとこの赤いラインが進んできた道か？つて事は今この辺だから——
おおん？此処つてたしか……

↓↓↓◇霧の谷◇↓↓↓

結局、妖精なんか居なかつたんだ。

分かつてた。でももしかしたら、見つけられたら何か変わるかも知れないって縋りた
かつたんだ。

結局何も変わらない。

この山に囲まれた小さな村で、蔑まれながら私は死んでいくんだ。
「いらぬい……こんな世界、消えちやえればいいのに」

雨も止んで薄霧の出てきた草原に体を投げ出して空を見上げた。
もし羽があつたら、私は自由になれたのかな
もし私がお父さんの娘だつたら、愛して貰えたのかな

もし妖精が居たら、私は救われたのかな
答えなんて出てくるわけが無い。

もう夜も更けたけど私が居なくとも両親はきっと心配なんかしてないだろうな。

むしろお父さんは私の悪態つきながら泥酔してるはず。
泣くのもとっくに飽きて涙も出てこない。

ぼうっと空を眺めてた時だつた。

「……誰？」

なんか聞こえた。

ぬかるみを近付いてくる足音が確かに聞こえた。

霧と暗がりで姿は見えないけど何かが、誰かがいるのは気配でわかる。
間違つても妖精なんかじやない

「こいつア驚いた。まさか今日がそのタイミングだつたなんてなハハハツ、家出娘つて
ところか？」

何：コイツ。

盗賊？人攫い？こんな山奥の滅多に人が来ない所に？

まあ、何でもいいか。

「なにアンタ、人間？それとも化け物の類い？盗賊でも人攫いでも人殺しでもなんでも

いいけど私なんも持つてないから。なんならどっかに売り飛ばしてみる?」

「…あいにく俺ア妖精には縁遠い人間でな。お前に夢を見せてはやれねえ」

「妖精…夢…? どうして知つてるの?」

「一言も言つてないのに。」

「その縁遠い人間が私になんの用? てかアンタ何者?」

「俺か! 俺アガンビーノつてんだ。人攫いだけはまだした事ねえけどな、盜賊とか人殺しに関しちゃ否定はしねえ」

「ああ、追われ者が逃げ込んできたつて訳ね。」

確かに人の出入りのないここは隠れるのに都合のいい場所だろうし。

「ふーん、で? その犯罪者を見ちやつた私は口封じされる感じ? ……殺るなら苦しまないようにしてくれる?」

「別に好きで死にたいんじゃないけど痛いのはいや。」

「どうせ私じや大人の足から逃げきれないしね。」

「ガキを殺す気はねえよ。むしろ俺はお前を連れていこうと思つて来てんだ」

「は?」

「絵本に出てくるような夢のある人生は諦めろ。ただ俺はお前にこの世を、広い世界を見せてやれる。こんな閉鎖的で寂れた村から出て大海を見ようじゃねえか」

何を…言つてんのこの男。

私を連れて行く?この村から出られる…?あの同じ事の繰り返しみたいな毎日から解放される?

「アンタは…犯罪者なんじやないの?」

「いや、俺は傭兵だ」

傭兵…。

確かに人殺しだし盗賊と変わりない連中だつて聞いた事があるけど…。

どうだつてい、こんな所から出られるなら!

「行く。連れてつて!ここに未練なんて無いもの」

「任せろ、人攫いは初めてだが上手く連れ出してやる。それとお前はこれから俺の娘になるんだ」

「…はあ?なんでそうなんの」

「俺んこは圧倒的に男が多い、いくら子供でも女が一人ふらついていい場所じやねーんだ。だから俺の娘になれ。手え出そうとするバカはいなくなる」

あー、そういうことね。

あれ?て事はこのガンビーノつて結構上の人間なの?

「ねえ…最後に一度だけ村に行つていい?」

「構わねえけど何しに戻るんだ?」

「友達に一言だけお別れ言つときたいの」

「そうか、なら言つてこい。俺達は谷の出口で待つてるからな。：いや途中に迎えを出しておく、お前と同じ女だから安心しろ」

「ありがと」

「んじや、さつさと行つてこい」

差し出された手を掴んで私は立ち上がった。

ゴツゴツした大きな手の感触が夢じやないつて頭の中で興奮気味に暴れてる感じがする。

ガンビーノと名乗つた男が霧の中に消えていくのを見送つて村へ走つた。

見つけた。見つけた!

妖精じやなくて傭兵だつたけど、私は見つけたんだ。
自分の歩く新しい道を!

ジル! 私行つてくる!

宝物も全部あげる! またいつか会いに来るよ。絶対!
どこに行つても友達だからね、ジル

△△△△△△△△△△

「ほう…さすがは因果律に嫌われし男よ。まさかあの子まで因果より解き放つとはな」

彼の者が持つ物とは別のベヘリット。

本来であればここで使われたであろうもはや無用の卵。

「面白い…奴らの憤る顔が見れぬのが惜しいが…」

……カロン

「いずれ相見えようぞ、ガンビーノ」

さらばミツドランド

ドルドレイ脱出から7日間にわたる強行軍の末ミツドランドの田舎のとある小さな港町『ルデール』にたどり着いた。

山育ちで海を知らないロシーヌは砂浜に寝転がつてこれから乗る船を眺めながら足を波に浸して遊びだした。

さすがは子供、体力が違う。

「わあ…大つきい」

「だろう? この辺りでこれ程のモノを持つてるのは俺だけだつて言つても過言じやねえくらいだ」

「でも見聞きしてた形には似てないつて言うか…なんか歪な感じがするね」

「初めて現物を見りやそう思うのかもな」

「早く乗つてみたい! どんな感じなのかすつごい気になるんだけど!」

「昼前には乗れるさ。それまではシス達と寝てこい」

「はーいはーい。ちゃんと起こしてね!」

「起こすのはカルテマにでも頼めよ」

海を見るのも初めてらしいロシーヌには、デカい船は新世界を見たのと同然だろうな。

山奥じやあ海の話が届くことすら稀だろうし。

いやあ、それにしても子供らしい、可愛い反応してくれるじやんかロシーヌ。

パパん嬉しいぞ！

「ガンビーノ、見てきたぞ」

「んお？…ああアドンか。」

やつぱりプライベート以外での子と関わるのはやめた方が良いかもな…。

そのうちボロが出そうで仕方ねえ

「船はもう少しで出港できそうだつたぞ、あとは食料の積み込みだけで終わりだな」「そりやなによりだ」

「で、…聞きたいんだが何で船から側面砲を外したんだ？あれでは戦えんではないか」「近代化改装と言え、改良だ。改良」

「んむ…そう…なのかな？」

心配性なヤツめ。

側面砲の代わりに厚さ1・5ミリの外張り装甲付けて、船首と船尾には自走砲に使つてた固定砲を計8門据え付けてんだ。

これを改良と言わずになんて言おうつてんだ！

しかも！しかもだ。

マストのてつぺんにある見張り台には伝声管まで整備して素敵、伝達を確実に底上げしてある。

強いて言うなら動力だけは無理だつたくらいか。
さすがに砲塔の据え付けは大変だつたぜ。

載せすぎると装甲やら積載やらで船が沈みかねなかつたからな、最終的には船首に 2×2 の4。船尾に 2×2 の4で落ち着いた。

ああ：金が足りねえ…。

「改良と言うならそなのかもしけんが何で一隻だけなんだ？ 他はむしろ悪化してゐるでは無いいか」

「悪化とか言うなボケ、運ぶだけの船に武装なんざ要らねえだろうが。軽くなつたぶん速度が出るんだから文句言うんじやねえよ。泳がすぞ」「わ、私は何も言つとらん！」

つたく、資金だつて無限じやねえんだ。

改良出来たのは旗艦になるこの一隻だけ、残りは非武装の改造商船（輸送船）になるのは必然だろうに。

一時期ウチの代名詞だった自走砲なんて費用削減の為に艦砲に転身させたんだからな！

持つていけない台座を焼却処理して海没させてまで…

くうう…（泣）

ダメだダメだ、思い出したら鬱になるわ。

「アドン、船酔いする奴は輸送船に乗せろ。酔わない奴らは俺と旗艦に乗るように伝えとけ」

「あいわかった」

よし、俺も一眠りしておこう。

ミッドランド最後の睡眠つてな

w

「大丈夫？ ロシーヌ」

「大丈夫だよ母さん！ 船つて凄いね！ 風も気持ちいいし水の上にいるつてまだ信じられないもん！」

「落ちないでね。ところでアドン、バーランは？」
「今頃あつちの船で死にかけてるのではないか？」

「あ、船酔いの薬渡すの忘れた…」

「おーおー、生き地獄へようこそってか？ はははつ」

夢にまで見たクシャーンへの亡命。

それが叶つたんだ、悔いは無い。

この地とも暫くの別れ…か。

元気にしどけよガツツ、俺より先にくたばつたら殺しに行くからな。
じやーな、クソッタレのミッドランド！」

第2期 【茨の道へ】

急がば回れ

『海の船旅を知りたい』

今後誰かにそう聞かれたら俺は絶対にこう答えてやる
「それはもう、気が滅入る程に大変でうんざりする事だ」って。

数時間前のことだ。

先発させたアドン達から伝書鳩が届いた。それはいい、鳩が来るのは無事の報せだから一向に構わなかつたんだがそれが『迷子になりました』『あと、子供乗せました』なんて書いてあつたら頭の1つも抱えたくなるつてもんだろ、あんのバカタレ。

命の保証なんぞ無い所に子連れで赴くとかアホの所業だぞ？

まあ手紙読んだ感じ、成り行きで仕方なく…らしいがどうだか。
つかちよつと待て。

手紙にある変わった親子つてなんぞ、嫌な予感しかしないんだが？

何処の海域で迷子になつたか知らんし、どんな親子だかもどうでもいいがクシャーンに着いたらさつさと送り返してやる。

なんだか無性にそうしなきやイカン気がする。

そもそもなんだ、この人魚伝説がどーの、デツカい鯨がこーのとツラツラ書きやがつてからに。

……知らんがな。知りたくもない。

まあ船旅も暇だから海路案内の漁師に話上手を選んだつてんならなんも言わねえけどよお：。

多分あれだろ、これ。

なんかこんな条件のキヤラ見た氣がするぞ俺。

アドンの奴は内陸育ちだから鯨だと思つてるんだろうが『海神』の事言つてんだろうな、この親子。

冗談じやねえよ。

一寸法師作戦は一寸法師とガツツだから上手くいつたつてだけで俺たちがどうにか出来る相手じやない。

神の末席たる海神に挑むなんざ無謀だ。

チキンとか言うんじゃねえ！命中率10%の艦砲と陸軍が大半の中世船だぞこちと
ら！

つて事で仕方ないからな、アドンにはそのまま”所詮漁民の伝説”と勘違いさせ
ておいて先に行くように言つておこう。

触らぬ神に祟りなし。だ

せつかくスルー出来そうな原作イベを見つけたんだ、命かけてまでクリアする必要は
ねえ。

俺は慎重派なもんでな。

「カルテマ、ロシーヌにこの内容で手紙書かせて飛ばせ」
「ロシーヌに？ 良いけど…」

「あの子の読み書きの練習にいいだろ。面白くもねえ紙切れに書き続けるよりは誰かに
送る、誰かが読む手紙を書く方が楽しいかもしけねえぞ」

「——はつ、了う解。大した親バカだねえ」
ほつとけ。

シツシとジエスチャードカルテマを追い出して一人考えを巡らせる。

陸戦しか能の無い俺が如何にクシャーレン王家に食い込むか。

短期だつたがチューダーの正規軍に組み込まれたおかげでマトモな肩書きはある。

いきなり頂点と繋がるのは俺個人としても避けたい。
旨みが無いからな。

問題は今が原作とどれくらいズレてるか、だ。

間違うな、俺は俺の為に生きてる訳じゃねえ。

俺はガツツを育てると決めた時からアイツの為の生を選んだんだ。ガツツの為に、ついでにグリフィスを助ける。

——その為の亡命。

年々薄れる前世の記憶のおかげでクシャーン皇帝の名も忘れちまつたが、今世の目的だけは忘れねえ。

ガツツ。

待つていろ、俺がお前を。

天使と自惚れる馬鹿げた使徒の手を切り落としてやるからな。

クシャーン上陸

ミツドランドを発つて2ヶ月は経つたか？やつとだ、やつと着いたぞ！夢にまで見た
クシャーン帝国!!

私が来た！とでも叫びながら練り歩きたい気分だぜ。

まあ俺の後ろじや久方ぶりの地面に対して、涙目で喜んでたり五体投地の真似をして
る奴まで居るからちよつとな。

このまま叫んだら俺まで変人達の仲間入りしちまう。

ただ、船旅の苦労を思えば少しくらい好きにさせとくのも――

「ママー、あの人達」

「シツ、見ちゃいけません！」

「あの軍装つてミツドランドの……」

「チユーダーのも混じつてないか？」

…あー、駄目だ。叩き起こそう。

☆

さすが戦争と無縁だった国家と言うべきか、港の、町の活気が違う。ちょっとした地方都市つてくらい賑やかで人と物が流れている。

「どこか懐かしくて町特有の喧騒が落ち着く俺はおかしいだろうか。

「ガンビーノ！ ああ良かつた。無事に着いたんだな」

「よおウルバン、アドンも一緒か。まあこの通り無事だ。それと新顔も居るぞ」

既に港町を満喫してただろうアドンとウルバン。

何を買い込んだのか知らないが幾つか紙袋を抱き抱えていた。

新顔と聞いて顔を見合わせる2人だが十中八九、面識は無いはずだ。

「ほら船長、話してた奴等だ」

「お初にお目にかかる。海賊を生業としていた海賊船元船長、髭骸骨です」

「おお……！」

見た目いかにもな海賊に俺と同じ反応をする2人に思わず苦笑いがこぼれる。

そうだろう、そうだろうよ。これ以上海賊らしい奴は中々居ないもんな！

もつともこの後すぐに武装船を与えて送り出す予定だから、鮫と鯨の共闘とかは無い

訳だが。

「なあアドン…」

「ん？」

カルテマに髭骸骨を武装船に連れていかせて、部下はウルバンに押し付け、アドンを連れて町へ向かう道すがら親子の話を聞いた。

クシャーンに関わる事はもう足搔くしかないが、仮にも”神”の名を挙げる海神なんかには間違つても関わりたく無い。

アレはガツツの仕事だ。

話の結果から言うと、アドンは既に報酬の支払いを終えて親子に小型船を与えて島に帰っていた。

なんか娘の方が大型船やら港町に興味津々らしかつたが土産を満載させたら大人しく帰つたとか…。

あれ？もしかしてコイツ^{アドン}有能？

何にせよビックリにそそり立つ死亡フラグに引きずり込まれなくて済んだのは
僥倖^{きょうこう}だ。

ここで死んだら??闇フイス爆誕//待つたナシだからな。
偉いぞアドン。

「それで、お前の言つてた様に親子は帰しといたがこれからどうする気なんだ？分かつてるだろ？が数百人の部下を食わせなきやいけないのに雇い主が居ないのは不味いぞ」「それなんだがな？町の連中の話を拾つたんだが近く祭りがあるらしいんだよ。王城近い港町の祭りだぞ、きっと王家の誰かがお忍びで来るはずだ」

「初耳なんだが…盗み聞きでもしてたのか？」

「テメエ…人聞き悪い言い方すんな。聞き耳立ててたと言えバカタレ」

「ああ…そうだな。すまぬ」

別に怒つちやいねえんだが。

アドンに諜報能力があるなんて微塵も思つてないしな。ドルドレイにいた頃みたい
なへマさえしないでくれりやそれでいいんだ。

あとは――

「アドン、お前に預けた工兵隊は生きてんのか？」

「無論だ。船から降りたら1日と経たずに平然としてたぞ」

「なら自走砲を作り直せ。前の砲は髭の奴にくれたからな、ひとまず代用で手に入る長

射程の奴を積めばそれでいい」

「待て待てなんだと!?あれ1台で幾らかかると!」

「作れ」

「…あい分かつた」

例え火の車だろうが身を切る出費だろうが、出すべき時に金は惜しんじやいけねえ。ミツドランドで使つてた自走砲の噂くらいは従軍商人伝いでコツチにも届いてんだ。ならアピールしなきや駄目だろ。

『俺達はここに居る!』つてな。

王政が健在なら、いやなればこそ王家は欲しがるはずだ。

臣下に渡ると厄介な部隊、なれど有すれば強力な部隊を。たとえ直近に戦が無くともきつとそうする。

扱いなんてどうだつていい、金さえ貰えりやどうとでもしてみせる。

今までがそうだつたようにな。

知らぬが仏

探せ！

草の根分けてでも探し出せ!!

白髭ヨボヨボのおじいちゃん、齢70くらいのお爺ちゃん、鱗を剥がし尽くしたヤンクックみたいな鳥を飼っている、奴がそうだ！

見つけ次第カツアゲよろしく『卵出せやコラ』とでもシメ上げろ。
ちよつつつと変わった卵だが持つてこい！持つてきた奴には金貨10枚くれてやる

！

——なんてガンビーノが叫んでたが何なんだあれ。

遠路はるばるクシャーンにまで来て一番最初にする事が養鶏家（？）と思しき老人探しとは：いやはや。

そもそも隙の連中を総動員してまでやる事か？

「なあー、ここにあるヤンクックってなんだよ」

「知るかよ。卵とか飼つてるとか書いてあつから鳥かなんかだろ」

「(鳥なのに鱗を云々つて……)」

「なあ隊長ー、隊長はこのヤンクツクつて鳥知つてんすか?」「はあ? ンなもん俺も知らねーよ」

報酬の金貨に食い付いちまつたのが失敗だつたぜチクシヨウ。
何処にいるのかも分かんねえジジイ探しなんてそもそも俺には向いてねえんだよなあ。

そうだよ、なにも歩き回る必要は無いじやねーか。

「よつしや、オメーら酒場行くぞ!」

「え」

「ちよつ! それは——」

「バーラン隊長、いくら何でもそれは……」

「バツカ、誤解すんな。人の集まるところに情報有りだ! って事で楽して情報集めんぞ

!!」

「((大丈夫かよ……))」

「おつほ、良いつすね! 行きましょ!」

うーん、やっぱ俺天才じやね?

*

「70くらいで鳥を飼つてゐるお爺さん?」

「そそ、知らないか?」

「ウチの常連さんには居ないかな?それとお客様達が話してゐる内容にもそんな名前の鳥は居なかつたと思うけど」

「あーー、そうか。あんがとついでにもう一杯!」

…こも駄目か。

もう何軒もハシゴして何十杯と酒を飲んでゐるのに全然ジジイの手がかりが見つかんねえ。

ついかホントに生きてんのかこのジジイ、齡70過ぎてんだろ?既にポツクリ逝つても不思議じやねえよ。

金貨10枚もする値打ちもんの卵拌めねえのは惜しいけどこの際だ、仕方ねえ、次行くか。

「おいテメエら起きろ。次の店行くぞ、おい」

「……」

「う”う…もう勘弁してください」

「——ZZZ」

チツ、下戸共が。なつきけねえ。

どうすつかな…さすがにコイツら坦いでハシゴはちょっとなア。
まあいつか、ここまで探して見つからねえんだ。

他の奴が見つけりや上々、それでも見つからなきやポツクリ逝つてたつてこつた。
無駄に頑張る必要はねーわな。

「おーい姉ちゃん！肉揚げともつ杯くれや！」

「隊長…そろそろ……」

「おう、これ食つたら戻るから寝てていーぞ。支払い済ましたら起こしちやる」
「o h……」

「ハーア、おまちどう！」

うん、美味い。

「おかわり!!」

「((帰りてえ……))」

「ZZZ…」

*

「——で？ 今の今まで呑んだくれてた訳か」

「いやガンビーノ待つてくれ。探してたんだ、だけどよ：見つかんなくてよ」

「卵は別の隊の奴が見つけてきたから良いとして、昼間つから飲み歩きたア良い身分だな？ バーラン」

やつべえ…やつべえよ。

これ激おこだよ。

船の営倉送りとかワンチャンあるやつだコレ。

「あ、あ～…なあ。卵つてどんな感じのやつだったんだ？ 金貨10枚も出すほどなら一目！ せめて一目拝んどきたいんだよ。そしたら大人しく罰受けるからよ！ な？ 賴むよ」
なんの為の苦労か知つておきたい。

そう思うのは我儘じやねえ、そうだよな！？

「……コレだ」

コトーンと出されたそれは。

ヤンクツクの卵らしいソレはなんて言うか——

「えつ氣色悪ツ」

あ。

「今月いっぱい禁酒しろ。それが罰だ」

1ヶ月!?

今月始まつたばかりじやねーか!!

嫌だ! 1ヶ月も酒が飲めねえなんて…死刑じやねーか!

「連れて行け」

「ハツ!」

「悪かつた! ガンビーノ!! 口が滑つただけなんだ。おいヤメロ! 離せツ」

たかが卵1個のせいでの禁酒なんて……

あんまりだアーーーツ!!

悪役の矜恃

ベヘリツトだ。

言わなくともどんな代物シロモノかわかると思うが。

金貨というニンジンで釣り上げた霸王の卵が今、丁寧に梱包された形で俺の目の前にある。

馬鹿な話だよな。

”1番大切な” を対価に願いを叶えるなんて、悪魔の契約そのまんまじやねえか。

ゴッドハンド（神の手）なんて大層な二つ名を付けた奴には余程センスが無かつたらしい。

なんて感想はこの際どうでもいいな。

要はコイツを何処の誰に送り付けるか、だ。
それとその手段だな。

「、思えばろくでもない生き方をしてきたもんだ。

部下を死なせて敵を殺して、なお飽き足らずに奪う側で居続けている。

そうでもしなきや大事なモンを守れない世界だからだ、正しいかなんざ迷つた事もない。

ただ、そうだな。

俺が振りまこうとしてる厄災はそいつの過去を否定して未来を摘み取る。必然的にその影響を受ける子供達には少なからずの罪悪感は感じる。

「あの子達に誇れねえ大人にだけは、なりたく無かつたんだがな……」

ガツツを育てると決めたあの瞬間が俺の生死を分ける分岐点だつたのなら、コイツを送り出すこの選択は俺が人の道を踏み外す瞬間になるんだろうな。

「誰か居るか」

「はい」

「鳩を2羽用意しろ。小箱の方をウチで1番飛翔力のある伝書鳩に、手紙はどれに付けてもいい。髏骸骨宛に飛ばせ」

「ハツ！」

悪く思うなよ、伯爵。

同じ子を持つ親として、家族を想う男としてすまないとは思う。

だが所詮は他人の人生だ。

どれほど悲惨な結末になろうと、いかに悲劇的な人間を作り出そうと、俺はそれを理解して、承知したうえで事を進める。

正道で守れないなら外道で守る。それが俺のエゴだ。

まあ：そうだな。

己の不幸と思つて諦めてくれや。

*

「進路変更！ミッドランド領海へ向かうぞ！」

「「おう！」」

「お頭：良いんですかい？」

「船長と呼べ！馬鹿野郎！」

「すんませんッ！船長！」

つたく。

私だつて好き好んで用の無いミッドランドに行きたくないわい。

だがガンビーノから『絶対に飛ばせ』と鳩が来ては致し方あるまい。

小箱の中身がなんであるかも知るべきでは無い。

これは長年の勘だが多分当たりだろう。

ミッドランドの貴族なんぞに興味は無いが噂は聞いた覚えがある。

ミッドランドで流行つてゐる邪教。その紋章。

それが小箱に刻まれてゐるなど気付きたくも無かつた。

「——はア……」

「おか：船長。鳩はどうします？」

「位置に着くまでは休ませとけ。俺宛の手紙を抜いて残りはまた鳩につけて飛ばせ。送り先は」

「——領の伯爵夫人宛だ」

「分かりやした」

「……こんな面倒な匂いがブンブンする物を古巣に送るなんて何考えてやがる？ ガンビーノ。

くそつ、ヤバい男についちまつたのかもしけねえな、俺達は。

神様：アンタを呪うぜエ。

*

~~~~~  
??~

「失礼致します奥様」

「入りなさい、何かあつたの？」

「所属不明の伝書鳩がお手紙と小箱を運んで参りまして……」

「それで？」

「奥様宛の手紙でしたので処分はせずお持ちしたのですが…お心当たりござりますか

？」

「見せてちょうだい」

「(この紋章は…たしか)」

「ええ、知つてるわ。かつてこの城の守りについていた傭兵団の紋章よ。あの人は昔から多忙だったでしょ？ 彼もそれを知つてたから私に送ってきたのね。邪魔しないようになんて、粹な心遣いじやない」

「そうでしたか、失礼しました。では小箱はここに置いてゆきます」

「そうして頂戴」

「では、失礼致します！」

「ええ、ご苦労さま」

……正直、手紙にある蜘蛛の紋章は初めて見たわ。  
そもそも手紙に書いてあつたから縁のある傭兵团だつて気付けただけの話だし。  
でもコツチは知つている。

私達が崇拜する御方山羊の神様の紋章。

『我らが同志への贈り物です』だなんて、ふふふ。

ガンビーノ：どんな人だつたかあんまり思い出せないけど覚えておくわ。手紙は燃  
やしちゃうけど悪く思わないでね。

あの人には知らないもの。

「(でもコレ：何に使う呪具のかしら)」  
ま、いいわ。

地下室に置いておきましょう。

## 若きガニシユカ・心の平穏

機は満ちたのだ。

ミツドランドから噂に聞く歴戦の傭兵団が亡命してきた、と王領の港町の代官から報せが入った時、私は不思議な感覚を覚えた。

敗北手前で僅かな手札を全賭けするが如く全てを投じたくなつたのだ。

いや、投じねばならない気がした。と言うべきだな。

クシャーンは長らく外国との戦と無縁だつたが、無縁ゆえに戦を知らぬ弱兵が増えつたあつた。

そこに戦術・戦略共に長けた軍団が亡命してきたのだ。

手に入れない理由などあるまい。

問題は誰が彼等を配下に引き入れるか、である。

もし他の貴族に取られれば厄介な火種に成りかねず、時期王座を狙う弟に取られれば間違ひなく私の命が脅かされる。

幸い父は興味が無いらしいが、ならばこそ私の配下に迎えねばなるまい。

影薄く、静かに生きられぬならば足搔くしかない。  
その為にも、必ず。

「殿下、例の部隊の居場所を突き止めましてござります」  
「ならば早急に使者を送れ。人選はダイバ、お前に任せる。良きにはからえ」  
「御意に」

\*

クシャーン王家に生まれてこの方、私は自由を感じた事が無かつた。  
父は私を玉座を脅かす敵とでも思つてゐるのか、おぞましい物を見るような視線しか  
向けてくれぬ。

自身がそうして王位を継いだからか、それを息子に重ねて見たのか。  
私にそんな気など無いというのに。

一方で母は弟に王座を継がせたいらしい。

見た目の善し悪しなのか、性格の可愛げが理由なのか知らないが私を疎ましく思つて  
いるのは分かる。

家臣共は父に付くか弟に付くか、水面下で飽くことなく派閥争いを続けてゐる。  
そんななか私はいつも暗殺に怯えて生きてきた。

父と母、どちらの刺客に殺されるのか、と。  
だがそれももう終わりだ。

この間の城下近くの祭りに忍んで赴いた際に出会った老人『ダイバ』。  
それが魔術師だと言うのはある種の運命に思う。  
彼を配下に引き入れると同時にミツドランドから亡命してきた傭兵团の噂も聞いた。  
前々から多少の噂話は聞いていたが、聞けば聞くほど惹き付けられる物があった。  
何より防城、攻城戦に長けている所が良い。

経歴は奇妙だがこの際目を瞑つてしまおう。

きっと、力さえ手に入れればきっと安らぎの時間が得られるに違いない。  
その為ならば私は幾らでも殺そう。

幾らでも血を流して骸を積み上げてゆこう。  
私の愛する平穏が手に入るまで。

およそ誰も理解出来まい。

大国の王子が望む本当に欲しい物を。

「殿下」

「決まつたか」

「はい、ジャリフを向かわせました」

「そうか」

「殿下、何か考え方ですかな？」

「いや、少し……な」

そういえばダイバが言つていた私に送るはずだつた『献上品』を横取りしたのも例の部隊だつたか。

さすがに王家に渡すものだつたとは知らなかつたのだろうが、なんの為に欲しがつたのかちよつと気になる所だな。

ダイバ曰く「眞の所有者以外には無価値な物」、それを知つて持つていくなど余程の物好きなのだろうが。

「殿下……お顔が。悪い感じになつてますぞ」

「……、相変わらずの無礼者め」

何が悪い顔か。

生まれつきこんな顔だわ。

# 道化の顔は笑っているか

今一度ハツキリ言つておくが、俺は無神論者だ。

誰が何と言おうと、なんなら神本人が俺の目の前に降りてきて『私はここに居る』と行つたとしても、俺が信心に目覚める事は無い。

だが実はそれっぽい存在は居るんじやないか？と。

無神論者ですら神の存在を疑いたくなる程、運命とかいう精密機器（ブラックボックス）がよく出来てる事に感心しつつ、俺はとつくに曖昧になつた前世の記憶を辿ることにも飽きてしまつていた。

だから…そう、気の迷いだつたんだ。

霸氣も権力もないガニシユカ王子を前にした時、配下としてじゃなく、父親として、出来の悪い子ほどかわいいと思う感覺に襲われちまつたのは…。

☆

「我儘に生きろだと？」

「そうです殿下。もつと我儘に生きてください」

ガニシュカ王子の執務室。

ここで俺はやらかした。ガッツを1人前に育てあげると決めたかつての熱が再燃して口が滑つちまつたんだ。

あくまで下っ端として、今後増えていくだろう配下の1人として生きれば楽だつてのは分かつてるんだけどな。

打算じやねえ、感情に負けたんだ。

「どうせなら奔放な感じでお願いしたい。食器は基本銀で統一したうえで装飾にこだわるんです、殿下は王族ですからね。権力が無からうと我儘が通らないなんて事はないでしよう。ついでに城下にも遊びに行つていただきたい。買い物するなり建設現場を見物するなりご自由に。嗚呼、伝言ゲームはご存知で？文官共が仕事と勘違いしてるアレは、あんなのはアテになりませんのでね。信じないでください。あんなので自分らの生活が左右されるなんて民からすりやたまつたもんじゃありませんよ」

「お前が私の生き方を決める氣か？ 力こそ無いが貴様の傀儡になる気など毛頭無いぞ」

声音こそ怒りを感じるもの、目はどこか冷めたものを感じさせてくる。

ろくな生き方が出来なかつた者の目だ。

捨てる物は全て捨てた、そんな生き方をしてきた人間特有の空氣。

「ご冗談を。あくまで手つ取り早く殿下の足場を固める方法の一つを提示しただけ、俺は玉座に興味なんざ無いんでね：いやホントに。傀儡なんて金積まれてもいりません」にやけ顔で降参のジエスチャーをして見せて無反応なあたり、冗談が通じないタチらしい。

実際、今俺が作りたいのは顔の見える指導者だ。

情報が集まる酒場でさえ、王家の人の顔を知る者が一人もいないなんて考え方のだ。当然悪い意味で。

民の為、国の為、平和を勝ち取る為に。

どんな大義名分を掲げた戦だろうと真っ先に駆り出されて死にゆくのは俺たち国民だ。

戦争に勝つたところで末端の一兵卒はちょっとばかしの金を渡されて『はいお終い』。負けた日には目も当てられねえ。

誰の為に死ぬのか。

何の為に死ぬのか。

それも分からず死んでいくなんて哀れがすぎる。

そんな死に方したくないと戦を拒めば拷問と死が待ち受けている。

そんな国が一枚岩になれるものか。

こんな国の民が、王に國に忠誠なんて誓えるものか。

基盤だ、まず土台を確かなものにしなきやいかん。

ガニシユカ殿下が街へ行くようになれば民は王子の、後の王の顔を知れる。

王子の言動が見えれば人となりが分かる。

そうなれば多少の情も湧いてくる。そうすりや國の頂点と基盤が繋がつて万々歳よ。後はガニシユカ殿下の心次第。

虐げられた痛みを周りへ振り撒くか、仕舞い込んで時間をかけて癒してゆくか。

どちらにせよ傍で見守つていく必要がある。

ガニシユカ王子が歩む道はきっと血が流れる、霸道だろうと王道だろうと血濡れた道なのは変わりない。

そんないつ足を取られるか分からない道を一人でゆく必要は無い。

滑つて転んだ時に手を貸す人間の1人くらい居てもいいじゃないか。

「さて、ぼちぼち動きますか殿下」

「ガンビーノ。疑わしき時は殺すぞ」

「そんな日は来ませんがねえ」

「…外に行くんだつたか？」

「ええ、釣りなんかどうですか？いや、今なら旅芸人が見れるかな」

「貴様が楽しみたいだけじゃなかろうな」

「ふつはははははツ」

「貴ツ様！（図星か！）」

「良いじやねえか楽しんだ方が、気楽でいい」

「無礼討ちにしてやる！そこで待て！！」

キツツい冗談言つてらつしやる（笑）

……冗談だよな？

## 温室育ちの蛹（サナギ）の保護者

「はあ、兵の動員？」

「うむ。お前の隊と私の領内から動員すれば反抗的な近隣の領の1つや2つ、制圧は難しくないだろう？」

「……？」

お前は何を言つてるんだ？

戦争つてもんはそんな『おめえシバくぞ』みたいな軽い感じで起こしていいものじやないんだ。

アホ言つてると殴るぞ？おん？

「止めておくべきでしょ、負けが見える」

「そんなことは無い！歴戦のお前達と私の兵を使えば民兵の訓練が終わるまでは戦える。訓練さえ終われば軍として投入して問題あるまい？所領が増えれば周りへの圧力も容易になろう」

「いや、そういう事じやなくてなア…」

いくら何でも急ぎすぎなんだよ。

勢いで開戦して運良く勝つても得られるのは多少の領土と権益、それと領民からの恨みくらいだぞ？

誰が新しい土地を治めんだよ、殿下自らか？冗談だろ。

納税済る領民をどうやってなだめる？武器持つて蜂起したら？今のガニシュカ殿下の元にソイツら抑え込める人材がいるはずねえ。

しかも仮に負けてみろ、殿下も俺も仲良く晒し首だろうぜ。

そんな行き当たりばつたりな戦争なんて何処ぞの戦争大好き少佐ですらやりたがらねえよ、多分。

だけどまあ、あれもダメこれもダメと言つてちや何も出来ねえ、ここは『待て』と『良し』で譲歩すべき…なんだろうなあ。クソつ！

「…殿下、戦争したいのであれば俺の開戦工作を待つて頂きたい。戦争を泥沼化させない為と速やかな帰順の為に。期間は…そうだな2年は待つて頂きたい」「2年！？2年も待つのか！」

「ええ、その間に”全て” 済ませてしまおうかと」

「……何が欲しい」

「2年間の内政権限とそれに必要な金を」

「内政権限だと？お前は仮にも武官だろうが、はいそうですかと私が渡すと思うか？それには内政はダイバの人選で行おこなつておる」

「それは知つてますがね、それじゃ力不足なもんでもウチの人間を使いたいんですねわ」「…力不足か」

実際、渡すしかない。

力不足ってか知識不足な以上、人を変えるしか手がないんだから。

戦争慣れしてる俺がここまで従軍を渋つてる以上、開戦は強行できない。

それでも戦争の準備はするつて言つたんだ。

他にマトモに戦える武官がいない今、俺の意見を呑むしかない。

ま、『仕方ない』つて事だ。

「渡して貰えりや完璧な戦争をお見せ出来るんですがねえ」

「……チツ！…2年だ。2年後、お前が僅かでも権限返上を渋つた時は覚悟しておけ。  
惜しまず殺すぞ」

「ええ、もちろん。殿下はそれでいいんですよ」

いらない心配してる必死具合はかわいいと言うか、可愛げがあるつて言うべきか。  
見てて楽し…おもしろ…悪くない。

あく、やっぱり俺は甘いんだろうなア。

☆

「殿下…」

「ダイバ、苦言はもう聞きたくないぞ」

「お聞きを殿下、ガンビーノを信じすぎてはなりませぬぞ。確かに戦争において奴ほど頼れる者は居ませんでしようが、奴は何か危うい感じがするのです」

「…、何の話だ」

「何が、とハツキリ言えませぬがこの老骨。まだ目は衰えておりませぬ」

「…」

「殿下」

「わかつた。わかつたわ、もうよい。暫く見張りを付けておけばよいのだろう」

「まつたく、なんでこの2人は仲良く出来ぬのか…。」

# 掌（てのひら）の中の絡縄（からくり）

ぬおおおおおおお!!

終つわんねえ！

え、なにこれ。なんなの？なんで穀倉地帯の干ばつ放つといてんの？

運河の氾濫に土砂崩れ、インフラもめちゃくちや。

そりやあ雨で物流が滞るわ。

なんなら地震が来た日には国が滅びるわ。

いくらなんでも平和ボケしすぎだろ。

見た感じ軍需と民需はちゃんと管理されてるわりに、インフラを調べたらビックリするくらい放つたらかしよ。

どんくらいかって？

「人が通れる幅があつたらもう道じやん」「馬車が通れる幅があるなら大丈夫、そのうち踏み固められて車道になるでしょ」つてレベルで涙が出るね。

下手すりやミツドランドの方がちゃんとしてたまである。

考えられるか？100年戦争やつてる国の方がインフラしつかりしてんだぞ。金も人も資源も戦争に注ぎ込んでるはずなのに。

「アドン！」

「…なんだ。もういいでは無いか、内政権など返上してしまえ」

「なにだらけてんだ起きろ、新しい任務だ。都市部と穀倉地帯を結ぶ主要街道の整備の責任者にお前をあてる。隊を連れて現地にいけ」

「寝かせてくれ」

「あ？毎日寝かせてやつてるだろうが」

「ああ：3時間な」

「街道が完成したら好きなだけ寝ろ。さつさと行け」

「ぬう…」

「これで街道整備は良し、あとは――

「ロシース」

「私もなんかするの？」

「そうだ、お前ももう15歳、それに同年代の子達より才能に恵まれてる。土砂崩れの対策をするんだ、そうだな：補佐にカルテマを連れて行くといい。自然災害の抑え方は教

えたろう？」

「うん。お金とか人は？連れて行つていいの？」

「いや現地で雇うんだ、金は幾らでも送つてやる。嫌がるようなら金と技術を与えて動員すればいい。詳細はお前に任せるぞ」

「分かった、任せて」

「気を付けて行くんだぞ。何かあつたらすぐに報せを寄越すんだ、いいな？」

「ん」

よし、残るこの水害と干ばつは俺がやるしかないか。

いくら貿易黒字とはいえ、こんなに湯水が如く金を溶かしてたらそのうち俺、闇討ちとかされそうだな：w。

見張りか護衛か知らねえけど最近、バーキラカの連中がコソコソ動いてるつぽいし。  
ダイバのジジイめ、人が余つてんなら寄越せつてんだ。

「ジャリフ！」

「はっ！」

「先に運河の調査に行くから道具と荷馬車の用意をしとけ。俺は隊をまとめてくる」

「分かりました」

ジャリフと別れて兵舎に向かう道ながら考える、この国を、世界を再び戦火につつむ

薪とする計画。

はたから見たら国と民に尽くす政策だが本質は全く違う。

国民という大多数の兵力となる者たちの心を、感情を操作しやすくするための布石。來たるべきその時に備えて。

背を向けあつた冷戦。

国内ガタガタのミツドランド、国内バラバラのクシャーン互いが向き合えるようになつた時、全ての布石が機能する。

「——ふつ、ははつ」

「ガンビーノ將軍！」

「……なんだ」

「ジャリフ殿より言伝です、『いつでも』と」

「すぐ行くと伝えろ」

「はつ！」

悪く思わねえでくれよ、ガツツ

# 神の天敵

「んーー、退屈だなア……」

まいつたな……やる事が無いぞ。

いや、無いことはないんだが1、2時間机に向かってりや終わる程度の書類仕事じや  
やる気にもなれねえ。

一応ペンこそ持つちやいるがなんだか走りが悪くて紙にソントと黒点が増えるばか  
り。  
殆どの人員が任地に行つたせいで兵舎もガランとして寂しい空気が幅をきかせてい  
る。

ウルバンとバーランは残つてるが医学はあいにくサッパリ分かんねーし、朝から酒飲  
んで呑まれてる奴にかける言葉も無いと来たもんだから本格的にやることが無い。

頭脳派には分からねえだろうが肉体派なら分かつてくれるだろう、座つてただけでケ  
ツがウズウズしてムカついてくるこの感覚を。

眠気とか以前にその空間が嫌になんだよな。

シスんとこ行つても良いんだが今は物騒なストーカーが俺にくつついてるから、あまり近付けたくねえ。

アイツら人間兵器だからな。

——よし、視察さんぱでも行くか。

「誰かいるか?」

「はい、失礼します」

入つてきたメイドはクシャーン人じやなかつた。

ガニシユカが気を利かせたのか、単に人種分けした結果なのか知らねえが俺の周りにはミッドランド人とチューーダー出身者が集められている。

「んん? いつもの奴じやないのか、オマー新顔だな」

「はい、配属されてまだ5日目です」

「そうか、わざわざクシャーンまで来るなんざ醉狂な女だなア。見た感じミッドランド人だろ? 向こうはまだ殺り合つてんのか?」

「いえ、チューーダーとの戦争は勝利で終わつて殆どの国土を併合したらしいです。戦争が終わつたので私はミッドランドで父と旅商人をしてましたが盗賊に襲われて、そのまま奴隸として売られました」

「奴隸商ねえ……」

まあよくある話だ。

殺されなかつただけマシと考えりや釣りがくるぜ。

ところでこの子、どつかで見たような。

「それで私はかなり高額で取り引きされたんですが、乗せられた船が難破してしまつて

……元海賊だつたという奴隸商に拾われました」

「（ふくろん……うん？）

元海賊の奴隸商ねえ……

なんだか知り合いにそんな奴が居たような――

「もしかしてだがその海賊、もとい奴隸商の船長は松葉杖ついてたか？」

「あ、はい！ついてました。お知り合いだつたんですか？」

知り合いも何も部下なんだが？

あの髪、やりやがった。

「それよりだ、その船でクシャーンに来たのか」

「はい、それでクシャーンの港で降ろされて奴隸商のツテに売られてここに来たんです

「そ、そうか。んでオマーの名前は――」

「はい、コレットです」

Oアウトオおお～～～～～～～

やつちまつてんじやねえか、ダメじやんか！

思い出したぞ、コレットつていやガツツと絡みがあるキーワードキャラだろ？そんな  
んクシャーンに来ていいワケねえだろうが！！

「（――いや待て）」

コレットがガツツと会うのつて”触”の後のはずだ。

そのタイミングでミッドランドに送り返せば……いやダメか、そもそもこの子の親父が死  
んでるんじや話にならねえ。

これ……俺がまたなんかやつちまつてたパターンか？

「あの、何かお持ち致しますか？」

「いや、俺はちょっと出掛けてくるからこの部屋に鍵かけといてくれ。夕方には戻るか  
ら軽食も用意しておけ」

「分かりました」

深く頭を下げて見送るコレットを横目に部屋を出た。

実際どうしようも無いからな。

手遅れだ。

手遅れだが身寄りの無い子供を見ると胸が痛む今日この頃。

「散々人殺した奴の何が痛むんだ」とか思つたヤツ、てめえ殺すからな。本音言うとあの子をウチに編入して会計部にでも放り込むのもアリつちやありだと思うんだよな。

金勘定が出来るのはステータスとしてはデカい。

俺としては歳が近いからロシーヌの友達にでもなつてくれりや万々歳なんだが。

「ロシーヌが何て言うか、だな」

あの子が喜ぶようならコレットを養女に迎えるのも悪くない、金はかかるだろうが別に難しくねえ。

そうなるようならシスにも話さないとだな。  
うん。

ま、なるようになれだ。

# 嫁騒動

「失礼します」

「ん、おー。コレットか、なんだ」

「将軍宛にダイバ様よりお手紙が届いてます」

「はア？ チツ よこせ」

……

……

⋮

⋮なるほど

突然だが、ガニシユカが嫁を娶るらしい。

なに、唐突すぎるだと？ バツキヤロウ俺にとつても寝耳に水だつたんだぞ。  
今回迎えるのは正室、俺たち臣下からしたらNO. 2。

ガニシユカの不在時やもしもの時には強い命令執行権を持つことになる。

ただ、まだ選定の段階らしく誰を正室とするかは決まっていないって話だ。

絞り込みはダイバ達古参の臣下が済ませてるようだが、どうやら最終選抜の候補2人のどつちを推すかで議論が紛糾。

收拾がつかないとみたダイバが俺に『手伝え』と脅迫文。<sup>ラブコール</sup>

ビビったワケじやないが、忙しくも優しい俺はダイバ側に立つことを決定。

ダイバに着く選択が間違つてないか確かめる為に早馬はやまでアドンも呼び戻した。

「んむう…事と次第は分かつたがこんな面倒事に応じるつもりか？面倒事は一番嫌いだつたろうに」

「まあな、ただ今回だけはダイバを助けてやんのも良いと思つてんだ。オメーはどう思う」

「なんとも言えぬ。クシャーン貴族は国王寄りの者が多いからな、ダイバ殿を助ければ奴らが明確に敵対してくるに違いない。だが奴らの意見が通れば我らの力は間違いなく削られてしまう」

「だが貴族連中は来年にはどうせ敵になる。ならダイバに味方した方が得る物は多いはずだ」

「良いのか？他の者にはまだこの話をして無いのだろう？」

「はッ！良いも悪いもあるかよ、こんな高度かつ厄介な案件をアイツらが理解出来るはずねえだろうが。カルテマなら少しは分かるだろうがアイツは下級貴族の出身だ、貴族社会の厄介事の対応に關してはお前には劣る」

「（それと言うなら何故<sup>なにゆえ</sup>ガンビーノは理解出来るのだ？そつちの方が遙かに不思議なのが：）」

「なんだ。言いたい事でもあるのか」

「いや無い」

「なら帰つていいぞ。また呼ぶかもしねえがな」

「——近くまた顔を合わせそうだな」

「おーい、やめろやめろ。

そんな不穏なフラグを立て逃げするんじゃねえよ。

フラグ1本折るのどんだけ大変か分かつてんのか？まつたく。  
アドンを見送つてダイバの手紙を篝火<sup>かがりび</sup>で焼き捨てる。

これがただの権力争いの一端なら無視を決め込む所だが、今回は状況が違う。  
応じればダイバに貸しができて立場的余裕もうまれる。

ダイバはガニシユカ派の上級貴族で文・芸に秀でた内向的な令嬢を推していく、現・国王派の貴族連中はクシャーンと同盟関係にある他国の王女を推してきている。

国王派の貴族は財とコネ、権力でガニシュカ派を圧倒してゐる状態。

唯一、ガニシュカ派が勝つてゐるのは軍事のみ。

保有する財は同等を誇る為、あとひと押しの発破剤に俺を使いたいんだろう。ダイバは軍事力という後ろ盾を得て、俺はダイバに政治的貸しが出来る。

これ以上ないwin-winな関係だし、俺としてもダイバの候補を推しておきたい。

内向的な性格ならばガニシュカに取つて変わろうとも、国権を乱用する事も無いだろうしな。

下手に他国から迎え入れてみろ、性格次第でクシャーンという国が傾きかねねえ。  
そんなのミッドランドだけで充分だ

これは余談だがガニシュカは正室が来ることは知つてゐるもの、誰が来るかまでは知らない。

ま、政略結婚なんて所詮そんなもんだ。

「残りの人生を好きでもねえ相手と共に生きる…か」

考えただけでゾッとする。

このまま黙つて見届けるのも忍びないと思うのは、親心のせいだろうか。

「誰か居るか」

「はい、如何しましたか」

「ジャリフに鷹狩の手はずを整えるように伝えろ。余計な招待状は送らなくていい、殿下と”件の令嬢”的の参加を優先しろ。と」

「承知しました」

「これでいい。

令嬢が鷹狩に興味あるかは知らんがお互い初見同士で結婚するんだ、その前に少しでも互いを知り合う機会を用意してやるのも悪くねえだろう。

むしろこれは父親の義務だろうしな。

願わくば想い合うように、なんてのは俺の我儘だろうか

# ヴァルナ・ベルファ令嬢

「走れ走れオラ走れ！未来の王妃様の護衛だぞ！」

丘など軽く駆け上がり、そのまま加速して駆け下りろ！馬が潰れたら走つてでも着いてこい！

「ガツ、ガンビーノ!!二騎脱落したぞ」

「構うなつ！今はとにかく食らい付け！」

「あつ！アドン将軍がコケました!!」

「だからなんだ離れるんじやねえぞ！」

「大丈夫なのかよアドンの奴、ゼーハーしてるぞ」

「フル装備で参加するからだ。あんな重装で走ろうなんて馬鹿なんだろ、ほつとけ」

お見合い代わりにセッティングした鷹狩は思つた以上に過酷なものになつた。

事前に聞いてたように、なるほど、褐色美人にして長い黒髪を真後ろで纏めた細目なれど左右対称で美しい眉目秀麗な令嬢。

だが騎馬民族出身者だとは聞い無いんだが？

貴族令嬢とか嘘だろつてくらいハキハキした性格。

しかも鷹を追つて駆け出すほどに活発な方ときた。

傭兵あがりの俺たちより馬の扱いが巧みなおかげでヒヨイヒヨイ駆けて、護衛の俺らは着いていくのでやつと。

狩りも中盤という今、既に兵の2割とアドンが脱落しちまつてる。

「ガンビーノ將軍、やはり楽しいな！」

「そりやッ、何より」

「如何した！息があがつているように見受けるが！」

「なに、まだまだ！」

「（クソッ、なんで俺が張り付かにやいかんのだ！ガニシユカが横に居るべきだろうが  
!!）

「おっ！見よ將軍、獲物が落ちたぞ」

「…落ちましたな」

獲物が落ちて初めて馬の足が遅くなつた。

正直脱落5秒前つて感じで威勢を張る余力すら残つてねえ。

「（やつと…休め、る）」

取つた獲物の血抜きとか下処理があるからな、俺たち護衛の貴重な休息時間だ。ガニシユカはと/orうと、丘5つ向こうの陣にふんぞり返つて1歩も動いてないんだから驚きだろう？

何しに來てると思つてんだろうなアイツ。

「よし、馬を休ませろ。狩りはここまでだ、これ以上は馬が潰れちまう」

「将軍、少しよいか？」

「なにか」

「この鷹狩は将軍の発案だつたと聞いたのだ、理由もな。私も貴族の娘、物心が着いた頃より政略結婚は覚悟していたのだがまさかこのような場を貰えるとは思つていなかつたよ」

「左様で」

俺も政略結婚だから狩りも微妙な空氣になるだろうと予想こそしてたんだがな、まさかガニシユカは動かないわ令嬢は突つ走るわ、こんな事になると思ってなかつたぜ。

「それでも将軍もなかなかの馬術であつた、振り切るつもりで走つた私に着いてこられたのですから」

「はつはは…」

「(はツ：文句すら浮かんでこねえや)」

未来の王妃の護衛だからと、これから帰ろうとしてたアドンまで参加させて、手隙の兵隊根こそぎ動員したというのに。

突つ走る気なら初めから言つてくれよ、そしたら軽装で来たものを。

「如何した」

「いやア…さすがにこたえるな、と」

「将軍は御歳60であつたか？少々無理をさせたようだな」

「はは…自分で思つてるより衰えたようで」

「それはすまなかつたな。楽しくてつい、許せ」

「楽しまれたのなら結構、それと見合いの場はまた用意しましよう。今度は殿下を知れるような場を」

「いや良い。見合いの場を作り、私の為に足を運んでくださるお方だ。悪い方ではあるまい」

「…左様で」

貴族の色恋の感覚つてのは俺には分からん。

だが多分、こういう女が良き妻に、王妃になられるんだろうな。

「ではな、先に戻つておるぞ！」

「はア!? 護衛隊を置いてつちまつたら…！」

「よい！はあつ！」

「（良か無いだろ……）」

みるみる小さくなる背を眺めながら、白髪ばかりになつた頭を搔きながら腰を下ろした。

いつの間にかこんなに老いちまつてたらしい。

子供が出来るとてめえの歳を忘れるつて言うがなるほど、人に聞かれてはじめて数え直すとはな。

そういうや昔、ガツツも手柄を立てたと嬉しそうに俺の所に来てたつけか。

ガニシユカの陣に駆け戻つてく令嬢の背が小さかつた頃のガツツに重なつて見えた。随分懐かしい光景に思いを馳せる。

「――うん。よしつ、馬の息が整つた者から引きあげろ！忙しくなるぞ！」

そのうち迎えに行くからな、ガツツ。

## 汚名を対価に

よオ、オメーら聞いたか？

とうとう戦争が始まつたらしいぜ、なに？バカ言えウチじやねえよミツドランドの方だ。

ミツドランドで内戦だとよ。

いやあ、俺も髏骸骨から受け取つた手紙で知つた時は思わず立ち上がつたよね。驚いちやいねえぜ、喜びでだ。

なんでも王妃派と国王派で前々から対立してたんだと。

まア王妃とユリウスつて関係ズブズブだし、国王：の名前忘れたけど王様はグリフィスがお気に入りで取り立ててりやオメー、貴族の血統とプライドで固めたような男のユリウスは面白くなかつただろうな。

てかよく考えたら王妃と不倫しといて自分が蔑ろにされてるからつて逆恨みする奴が王位継承権持つてるとか、控えめに言つて恐怖だろ。だからぶつちやけこうなる予感はしてた。

マジだぜ？まだミツドランドにいた頃、グリフィスに匿名で『ユリウスは生かしとくが吉』って密書送つて根回ししといたんだから。

あれ、これ違うわ。予感のレベル超えてる。

はたから見たら俺が仕組んだ戦争に見えちゃうじゃねえか！

：みつしょ？ナニソレ知らない子ですねえ。

あ～ちよつと身に覚えが無いって言うか記憶にございません  
つて、そんなこたあどうでもいいんだよ。

ミツドランドがおっぱじめた以上、こつちもなる早で開戦せにやいかんくなつたわけ

だ。

あ、このタイミングでダイバに内政権返してヒイヒイ言わせてやんのもアリだな…。

戦費のやりくりとかもう俺したくねーし。

「コレット、居るか？」

「はい」

こここの所、何かあればコレットを呼ぶようにしている。

周りにコレットは俺のお気に入りである、と認識させる為で機を見てロシーヌ着きにさせれば不自然なく取り込めるからだ。

「この手紙をジャリフに渡してこい。それとコツチは殿下宛だ、これに関しては使番に

手渡せばいいからな」

「分かりました」

「（さあて、あとで監獄の方にも顔出しどくか…）」

堪らねえな、この感覚。

絶ツ対的優位な戦力でただローラーしていくば勝てる戦争、流れる血は勝てば幾らでも拭いようがあるから気にすることはない。

奇襲、夜襲、包囲殲滅、退却誘引に伏撃強襲。

いい実戦経験値になつてくれるに違いねえ

くはは：

ハハハハノヽノヽノヽ

ハハハハノヽノヽノヽ＼!!

戦争だ！

いや、戦争にすらならねえ勢力地図の塗り絵だ。

そうだ、これでいい。

ミツドランドと戦う為にも無駄な損耗は避けなきやならねえ

始めようじやねえか、戦争を終わらせる為の戦争を！

俺の親父たちが始めた戦争を、俺が息子達の代で終わらせてやる。

孫の代には戦争のない世界を、むこう数世紀の安寧のために俺はもう一度剣を取らう。

全ては愛おしい我が子の為に。

# クシヤーン統一戦

よく聞けテメーら、ガニシユカの命令だ。

宣戦布告と同時に越境しろとさ。

つて事で進軍だ。お前ら落ちるんじやねえぞ、拾つてやんねーからな。

：なんて軽く注意しといたがこれはひでえ。

落ちる落ちない以前に乗り物酔いした連中で見るに堪えない惨状だ。

俺が率いるクシヤーン第1・第2車両化歩兵師団は約6000人の大所帯、この日の為に領内から根こそぎかき集めてた荷馬車、幌馬車に全員を乗せて進軍していくところに吐き気を訴える奴が続出。

まさか一々列を止める訳にもいかねえから身を乗り出して外に吐かせたんだが、そのせいで誘爆する奴もチラホラ…。

軍列が通つた跡は：言いたくもねえ状態になつちまつてる。

鼻にツンつとくる特有のあの臭い、そこに吐瀉物を車輪が轢き耕して土砂と混ざつたブツに視覚を攻撃される。

後列の連中にはさぞ地獄だろうな。

つたく、世話の焼ける奴らめ。

今後の為にも工チケツト袋作つといてやらんとな。

ガニシユカが国王派に宣戦布告すべく送つた布告官が勤めを果たして戻り、その報せが狼煙台に届くまで少なく見積もつて6日。

狼煙台から合図が上がる前に国境に着陣、合図と同時に渡河出来るようにしつかなくやいけねえってのに。

間に合わなかつたらなんて誤魔化すかな…。

「ガンビーノ殿」

「なんだア、脱走兵でも出たか」

「いやいやそこまで酷くはない。私は先遣隊が戻つたのを知らせに来ただけだ、彼ら曰

く国境の橋には少数の警備兵が居るだけで破損は一切無いそうだ」

「そうか。ならこのまま行くぞ、相手が少ねえなら酔つてガクブルな兵隊でも降ろしあ威嚇程度にはなるだろ」

騎兵も含めれば兵隊だけで1万人はいるはずなんだが、それが威嚇程度にしか使えんとは…いやはや。

「なんと言ふか…散々だな」

「まつたくだ」

報告に来た騎兵の名はキュリアス。キュリアス・カマデウス  
ミツドランドにいた時に入団してきた元騎士だつた男で、今は100騎長（小隊長）を  
任されている何処と無くカマキリを思わせる雰囲気の男だ。

「キュリアス」

「む」

「隊を率いて先行しろ。橋を確保して後続を待て」

「承知した」

キュリアスが隊を率いて列から離脱するのを見送つて数時間後、完全に日が暮れたタ  
イミングで全軍に野営を命じた。

俺は当然の流れで護衛が組み上げた天幕に入つてベットに体を横たえる。  
歳のせいか椅子はちょっと腰にくるようになつてな。

「う、う、う、う、う、ん」

どうすりやいいんだ、酔つてない奴だけで再編成するか？いやダメだなそんな時間は  
ねえ。

早ければ明後日にはキュリアスが橋を確保する。

ただ相手が素早く反撃に出る可能性も十分に有り得る以上、このままフラフラの歩兵

は送れない。

——仕方ない。

「おい、誰かエルドリオを呼んでこい」  
「はっ！」

天幕付きの兵が走つていく音を聞きながら布団の上に地図を広げた。  
これから侵攻する男爵領の領都に続く地形、国境の大河の先は広い荒野になつていて  
騎兵突撃は有利なんだが援護の歩兵があのザマだ。

降ろして即時展開が出来ないんじや話にならねえ。

俺としては騎兵だけで山岳地帯まで戦線を押し上げてから歩兵を投入したい。  
その為にもう一隊、騎兵を送り込む。

エルドリオ・ゲルガー、アドン顔負けの超重装騎兵でその鎧はボウガンの矢なら10  
0歩内で撃たれても弾く程に硬い。

機動力はお察し程度だが普通科騎兵のキュリアスの援護なら十分なはずだ。

「お呼びか？ ガンビーノ将軍」

「入れ」

「失礼する」

ヌツと入ってきた完全武装のゲルガーはいつも通り甲虫を思わせるほどにゴツい姿

だつた。

動けるデブじやねえ、ゴリマツチヨなんだな。

「明日の朝イチでお前、隊を率いて先行しろ。橋を確保するキュリアスと合流して敵の反撃に備えとけ」

「あいわかつた。ところで補給はどのくらいで追いつくんだ?」

「ううん…ざつと2日、まあ遅くとも3日と経たずに追い付かせよう」

「そうか、ならば良い

「橋の維持が厳しければ撤退して後続を待て、敵が橋を落とそうとしたら適度に仕掛けで嫌がらせに徹しろ」

「承知した」

ひとまずこれでよし。

聞いた話国境の大河は広く深いらしいからな、橋を落とされちゃたまらん。

「ガンビーノ将軍、この饅頭まんじゅう幾つか貰つてつてよいか?」

「ああ、好きに持つてけ。なんなら全部くれてやる」

「♪♪」

うつへえ：皿さらごと全部持つてくるのかよ30個はあるぞ？一人で食う気だとしたら相当だな。

やつぱり動けるデブなのか？

「ではな！」

「ん、ああ…」

大丈夫…なのか？

△△△◇2日後・国境の橋△△△

「つ、くああ～～～つ」

「おいおい暇なのは分かるけど見張り番の時に欠伸はやめとけ、隊長に見つかったらどうやされんぞ」

「しゃーねーだろう？そもそも人通りだつてほとんど無い橋の警護なんて昼寝してもできらあ」

「まあーなー」

確かに暇だ。

暇なんだが運悪く俺らの隊長は変に気合いの入った人で仕事中の気の緩みにうるさい。

うつかり昼寝した日にや唯一の楽しみの飯を取り上げられちまうだろうよ。

「んお？」

「？、どしたー」

「馬が来る…」

「馬あ？」

あ〜、確かに来てるな。

1、2、3、4、5、6……え？

いや、いやいや嘘だろおい！ありや騎兵じやねえか！

なんでこっちに来てんだよ！

「敵だア！！！」

「敵？」

「よく見ろ！武装してやがんだろ！伝令ツ!!」

「えつ敵つて…えつ逃げるか？」

「馬鹿野郎ツ橋を明け渡す気か！迎え撃つんだお前らボウガン持つてこい！槍を取れ

！」

バリケードは…間に合わないな。

「おい！伝令はどうしたツ」

「もう行つたよ！」

「ならしい、奴らの足を止めんぞ！構えろお！」

「ちくしょう！なんだつてんだ」

——来る！

「おお、逃げぬとは見事なり！いざア!!」

「いくぞオラア!!」

「『うわああアアアア！』」

クソがツとんだ厄日だぜ！

# レツドカーペット作戦

クシャーン王国はデカい

そりやあもうめちゃくちゃデかい、いやもうバチボコ大つきすぎて地図見るのも嫌になる程だ

ちなみに俺はとつぐに地図を見るのを諦めている

諦めた時俺は思いついた

これバカ正直に国王派潰して回らなくていいんじやないか？ってな！

「知らねーぞガンビーノ、アンタが短気なのはまあ知つてたけど後で絶対困るからな」

あつても大雑把にしか分からん地図だぞ？予備もあるし困りやしねーよ

「おいガンビーノ、さつき使者が書簡を持つてきてな。男爵領は降伏するそうだぞ」

「そうか：思つたより早かつたな」

「なあガンビーノよ」

「なんだア？」

「地図はどうした？ここにさつきまであつたよな」

「ん？」

「ほれ、と顎で指し示す先には篝火が地図を食っている最中  
唚然とするアドンにアチャーケンのロシーヌ達  
バカでけえ国土に敵味方が入り交じつてんだぞ？ 色付けたらモザイク模様間違いな  
しだ

「ここは何処で敵はコレで——なんて頭の悪い事に付き合うほど俺は気が長くねえ

「地図がなくつたつて困りやしねえよ。国王がふんぞり返つてる玉座まで真っ直ぐに突  
き進むだけだからなあ」

「そんな事してみろ、後方を絶たれて包囲させるでは無いか。そうでなくとも補給線を  
守る事が難しくなつてしまふ」

「アホお！ そうなる前に王様んトコに踏み込むんだろうが！ それに遅れてガニシユカの  
部隊も来るんだぞ。後方はそつちに任せて俺達は進むのが仕事だろうが」

「う…ぬう」

つたくアドンのアホめ、相手は俺達とは違う国王つて生きモンなんだぞ

テメエの懷に武器持つた敵が踏み入つてきたらまず逃げる、そんで守りを固めるまで  
がワンセツトの人間だ

だから敵を一々プチプチと駆逐する必要なんざねえ

此処から王都まで線を引いて、敵地は攻め滅ぼして味方は道路に、残りは現国王ぶつ殺してガニシユ力を即位させた後に掃討するだけつつう簡単な作業で片がつく

国王派だつて旗印の王様が死ねば降伏したがる奴も出てくる

電撃戦だ

短期決戦

幸いベルファ家の手厚い支援で補給に心配はない

「アドン、お前はキュリアスとエルドリオそれと車両歩兵を3000連れて次の子爵領を攻め落とせ。できるな？」

「ああ…出来るが」

「よし、俺は残りの連中を連れて子爵領を迂回する。んで味方陣営の伯爵領を通つて国王派の公爵領を攻める。素早く行けよ？相手に対応する時間を与えんな」

「うむ。ひとまず作戦は理解したが…ダイバ将軍との連携はどうするのだ？」

「俺達が公爵領を落としたタイミングで海寄りの山で狼煙を上げる。そしたら鳥艦ちょうかん（空母）からダイバが怪鳥連れてくる手筈になつてる、合流してからが本番よ」

この日のために用意した大型鳥艦

タンカー型に飛行甲板を取り付けたガレー船、怪鳥とはいえ鳥は狭い所に押し込める

わけにいかないらしいから仕方ない

伝書鳩と何が違つうってんだろうな

「嗚呼…自走砲5門分の金が溶けたあの船か」

「ああ…」

嫌な…出来事だつたな

「ロシース今夜は早く寝るんだ、明日は早朝に発つからな  
「はーい」

「お前達も下がつて明日に備えろ」

「うむ。ではな」

「はつ！」

さて俺も今日はシスの所で寝るとするかな。

「ロシースおいで、今日は皆で寝よう」

「ホント？やつた！久しぶりの”川の字” だね」

「ああそりだな」

まだ子供らしいロシースの手を握つてシスの天幕へと向かう。

川の字と喜んでるロシースだが、シスがロシースを猫可愛がりしてるから俺に入る余地なんてない。

なんせシスがロシーヌを抱きしめたまま朝を迎えるなんて事は日常茶飯事らしいからな。

羨ま・微笑まい。

「明日の朝もお前はきっとシスに捕まつてゐるんだろうなア」

「ふふふ、かなあ？どつちが先に抱きしめるか競走だね♪」

「そうなるとシスごと抱きしめちまえば俺の勝ちだな」

「あー！それはズルだよ」

「ハハハハハツそうかアズるいかあW」

大人は大概ずるいものさ

# 人でなしの正義

「さつすが公爵家、ガツツリ兵隊集めてんな」

「どんくらいだ？一万はあるかな」

伯爵領で1日だけ休んで公爵領の領境の砦に侵攻したらだーれも居ないんだから驚いたもんだ。

近くの村で事情を聞けば城塞都市に立て籠もつてゐるって話だからコレはもう来てくれって言つても同義だろつて事で出向いてやつて現在は包囲攻城中。

城壁にはためいてる旗の種類と数からして相当数がいるのが分かるから迂闊に突撃命令も出せない。

そこでだ。

まさか兵糧攻めをする訳にもいかねえから壁の上から敵を追い払つちまおうつて考えた。

城の周りに溝を掘つて盛り上げた土で土壘を築いて柵を立て弓隊に守らせる。

これで城の兵隊の突撃で布陣が崩される事は無い。

こうでもしなきやおつかなくて攻城兵器も呼べやしねえ

ここで毎度おなじみ攻城兵器と言えば？ そう投石器君だよな

彼がいれば取り敢えず何とかなつちやう辺りは最高のパートナーだけど扱いには一

癖も二癖もある困つたちやん。

『遅い・重い・逃げられない』なんて致命的だろ？

そこで俺は考えた。

バラして運んで組み上げちまおう。 つてな

実際そうしてゴロゴロ運んで今は前線後方で組み上げ中。

ちなみに砲弾も一工夫しておいた。

四方八方が尖った砲弾に取つ手を彫り込んで、そこに油を染み込ませた布を縛り付ける。

ガツツがそんな感じのミニタイプを使つてただろ？ 3秒待つてバーンのアレだ。

結ぶ布は横幅30歩、長さ100歩で直前に着火してぶん投げる。

すると城壁にくい込んで布は黒煙を巻き上げて視界を遮りつつ敵の呼吸も害してくれる。

その隙に歩兵が突撃するつて戦法よ。

実際そんな物が何十発、何百発と飛んでくるのを想像してみろ。城壁を飛び越えて町へ降りそそぐそのさまを。

これが上手く刺さつたら攻城戦で死ぬ兵隊がぐんと減ってくれる。

何千何万つて数字で使い捨てられる歩兵の1人1人に歩んできた過去があつてこれから未来があるんだ、死ななくて済むなんならそうしてやるべきだろう。

ガニシュカは戦象を使いたがつてたがあんなデカブツを押し付けられちゃたまつたもんじやない。

騎兵相手ならいざ知らず、他に効果的な兵科が無い。

行軍は遅いし大飯食らい、おまけに臆病な動物で混乱したら抑えが効かないなんてもはや恐怖でしかない。

戦争において兵器に感情は要らねえんだ。

「おうい将軍閣下あ！ でけたぞお！」

「よしぶつぱなせ」

「なあ本当に良いのかよ」

「何がだ」

「クシャーンの騎士・貴族連中の反発だよ。こんなの戦争じゃないとか云々言つてやがるんだ、いくら国王派を潰せても腹の中に敵が出来るんじや元も子もないだろ」

滅多に異を唱えてこないウルバンが珍しい。

普通の攻城戦なら負傷兵の治療で手が離せなくなるからいい機会ではあるのかもしれないが――

「だからなんだ。連中に氣い使つて戦争が終わるか？人死にが減るのか？答えは否だ、変わらねえ。何も変わらねえ、なら変えるしかねえだろ。それが出来る立場に居る俺がやらねえと」

「なんの為に？アンタが戦争をさつさと終わらせたつて誰かがまた戦争を呼び起こすだろうさ。そしたらもつと惨い戦争が始まる事になるんだぞ」

「良いじやねえか、それでいいんだろうが。戦争は惨ければ惨いほど良いモンなんだ。戦争をしたがるバカが減る」

「それでいくとアンタもバカつて事になるぞ」

「不治の病だ」「ハハハッ！馬鹿は死ななきや治らねえからな。お前も苦労するだろうな」

「違ひねえ」

呆れ顔のウルバンだがなんだかんだで付き合つてくれる。

「確信犯め」

「共犯者だな」

「……チツ」

さてウルバンが納得（？）したところでおっぱじめようかな。  
どんどん投げてどんどん焼いて、そこでパツパと進んじまおう。歩兵の方の布陣も終  
わつた。

俺たちは生まれた時代が悪かつたんだ…そう思つて諦めてもらおう。

「全機砲撃始め」

# 地獄の再来を

猛火の城だ。

ミッドランドに伝わる大昔からの言い伝えにあんな感じの都市が燃える話があつた。天使に焼き払われたという伝説だ。

あいにく目前の惨劇は我々のボスが引き起こした物なわけだが。所詮戦争の一面だと片付けるにはあまりにも惨い。

野戦に敗れて傘下に降つた己さえも幸運だつたと思える程に。

人が天使と同じ道を辿ろうとしてる事実。

「他人事ながら恐ろしいな」

「あらあ。一軍の将ともあろう方が尻込みなさるの？」

!?

いきなりの独特的なオネエボイスに思わず体がビクツと反応してしまった。この口調、妙に艶やかな聲音、ああ。君か

横目で捉えた姿はよく知るクシャーンの将軍、転属で來たクシャーン人の中で唯一將軍として指揮権を与えられた女だ。オカマ

彼女は2連の指揮官だから本来はここに來るはずないんだが：

「ナバーラ、アンタの持ち場はここじゃ無いだろうが。暇だからとこんな所まで足を運んで……攻撃命令が來たら出遅れるぞ」

「あらあ？ 心配してくれるのはしら。嬉しいけど無用な心配よ、そこまで馬で來たんだから」

まあ暇だからな。

普通攻城戦となれば俺たち歩兵は盾をかざして命をかけて波状攻撃を仕掛けるもんだ。

だがガンビーノが指揮を執るようになつてからは制圧戦が殆どになつてきている。そのおかげで攻撃開始から5日が経つた今日まで誰一人として死んでいない。（迎撃で数人負傷したとは聞いたが）

「んで？ 俺が昼寝よろしくサボつてた事でも報告するかね」

「んふふ。やあねえアタシそんなに性格悪くないわよ、ちょっとからかいに來ただけなんだから」

十分いい性格してるだろうに。つて言葉はポイ捨てしといて取り敢えず『横来いよ』

と手招きしておく。

悪い女…うん。悪い女じゃないんだが癖が強い奴だからな

ガンビーノ以外じや俺が1番話しやすいって思つてんだろうなコイツは。性別のち  
ぐはぐに戸惑う男連中や「ええつと…（…の…；）」って話づらそうにする女連中と  
は確かに噛み合わないだろうし。

「なんで俺の所に…バー・ランとかカルテマとか、2連連中に絡んでりや良いだろうに」

「んふふふふ。分かってるでしょうに嫌ねえ」

「言つてみただけだ、お前こそ分かつて言つてるだろ」

「ええ勿論、言つたでしょ？からかいに来たつて」

「はつ（w）

本当に遊びに来ただけかよ。

目の前じやデケエ城塞都市が黒煙を巻き上げて燃え盛つてるつてのに、コイツと居る  
とまるで平時の一コマのような錯覚に陥つてしまふ。  
なんだかなあ。

「ガンビーノ閣下が怖い？」

「…なに？」

「そんな顔してたわよ。彼らへの同情つてよりは我が身じやなくて良かつたとか、そん

な感じのね』

俺がガンビーノを?

まさか。ガンビーノの怖さは戦った時に体験してる。敵にはどこまでも苛烈で部下にはやけに世話を焼く。

そういう人間だつて事くらい重々承知してるんだから恐れるはずがない。  
だが――

「そうだな、俺は怖かないが危うい奴は何人かいるな」

「そう。でもそういう子たちをなだめ、抑えて解きほぐすのも私達の仕事のウチよ」

分かつてゐるさ。

俺でさえガンビーノが何を目指して戦い続けるかまだ見えてこないんだ。付き合いの短い、今を生きるので精一杯な連中がガンビーノを畏怖する気持ちも分かる。

実際、ガンビーノと同じ先を見えてる奴は最古参の人間くらいだろう。

「うん? てことは俺を心配して声掛けてきたのか?」

「んふふ。どうかしらね」

「おいおい、ホントにからかいに来ただけかよ」

……いや待て。おかしい

なんでわざわざ自分の隊から離れてまで俺のところにナバラは來たんだ? 暫だつ

たから？そんなはずない。

軍規で待機命令が出てるうちは指揮下の隊から離れちゃいけない事になつてゐる。いくら転属間もないとしても軍規を知らないハズはない。

「お前：なんか大事な話があつたりするのか？」

「んく。不安要素に留まるくらいだけどね。ちよつと気になる適度の事よ」

「なんで俺なんだ。ガンビーノに直接伝えりやいいだろうに、どうして遠回りな事を」「アナタが1番現実的な相手だから。バーランもカルテマもガンビーノに寄りすぎてるわ。たとえ伝えても『ガンビーノなら何とか出来る』って油断しかねないもの」

なんだそれは。

その言い方、まるで――

「確実じゃないけど、情報が外に流れてる感じがするのよ」

「裏切り者か」

「アナタが内側を、アタシが外側を。協力してくれない？」

独断で協力しろつて事か。

こりやバレたらバーラン辺りにシバかれかねないな。

だが、そうだな。

ガンビーノがこのまま何事かで死ねば俺たちは不慣れなクシャーンの大陸でバラバ

ラに四散しかねない。

結末は野垂れ死にか野盜落ちかぐらいだろう。  
仕方あるまい。

「いざつて時には、良いだろう。その代わりその嫌な予感が確実なもんになつた時はすぐ教えてくれよ」

「ありがとうね。アナタなら引き受けてくれると思つてたわ‥またねヴアランシャ♡」  
（ゾゾワツ!!）

さすがにノンケの俺に投げキツスはキツい。

大丈夫だよな？俺そういう方面で狙われてたりしないよな？  
はあ‥。こいつあまた1波乱ありそудなあ

# 今更ガバがあつたとかマジ？

『マジです』つて素直に言えたらどんなに楽だつたか。

5日間ひたすらに炎弾を撃ち込んで、城壁の6割を削り崩して弓兵に2日間ずっと昼夜問わざ入れ代わり立ち代わり矢を撃ち込ませた。

抵抗が無くなつた7日目に歩兵隊を突つ込ませたらそのままアツサリ陥落よ。

こつちの死者は20人にも届かない程度。

と、ここまでが俺のいつも通りの仕事内容だつたんだが、入城するタイミングでフツと考えたのが公爵の処分だ。

ミッドランドじやオレたち傭兵の雇い主正規軍将校 貴族の上が云々してた事だからぶつちやけやり方が分からねえ。

降伏した男爵は後続のガニシュ力に身柄を引き渡したし、子爵は戦死したと聞いたから特に何もしなくて済んだが公爵とまで来ればそうもいかないハズだ。

連中はやたらとプライドが高い。

いくら相手がガニシュ力派の軍務総書で、その直下の軍に敗れたとしても肩書きを外

せば俺は異邦人になる。

素直に従うとはとても思えない。

なんて悶々としながら掃討戦の指揮をしてた所に届いたのが公爵が自決していたつて報告だつた。

聞けば踏み込んだ時には既に公爵が嫁さんと息子、娘を道ずれに服毒自殺した後だつたとか。ウルバンが確認したつて事だから確かだろう。

子供まで黄泉道よみちに連れていくなんざ親のするこつちやねえ…が、まあ攻めた俺が言えたことじゃないけどよ。

「それで、公爵家の連中使用人はどうした」

「それが妙な話で誰一人として残つてなかつたらしいんですわ。地下室もくまなく調べてみても痕跡ひづる〇でさあ」

「そうか…そつちもなのか」

「へ？」

なんでもない。と話を切り上げた。

だが妙な違和感は覚えている。

攻城戦は飽きるほど経験してきたがこんなに死体が少ないなんて事は初めての事だ。それだけ民間人が逃げられたと思えば喜ぶべきなんだろうが、そこがおかしい。どう

して逃げられた？

確かに王都へ進軍する俺達の目撃情報を点と線で結べば大体のルートは分かるだろうが、王都の前には公爵領だけじゃなく伯爵領だつてあつた。

電撃的速度で犠牲を少なくしようとした俺の動きを考えればむしろ王都にもつとも近く、もつとも落としやすい都市の民が、もつとも大きく堅牢なこの公爵領に逃げ込んで然るべきだろう。

それがいざフタを開けてみればこの様だ。

余りにも不自然では無いか。

「考えすぎ…か？」

それならそれでいいが用心に越したことはないよな。

「そこのお前、ジャリフを呼んでこい」

「はっ！」

今は隊長クラスの奴らに気を付けさせるしかない。この戦争が終わつたらその辺の対策もしなきやつて事だな。

取り敢えず今はジャリフに各隊に通達させて、ふるいにかけてみるのが一番安牌か。嗚呼、ただでさえ王様をどうすりやいいのか頭抱えてるつて時に、ホンツトに勘弁して欲しいぜ。

王族殺しなんてろくでもねえ結果にしかならんしな。

もう、やめだやめだ！

そん時になつたらふんじばつてガニシユカにポイしてやる！  
ま、適当に理由付けて何とかしてくれんだろ。

だつて言えねえだろ。

『現国王の生殺与奪の事まで考えなかつたわ（笑）』  
なんて

# 祖国か・未来か

「悪いようにはしない！だから投降しろっ！！」

「ざけんな！そっちが負けの状況だろうが!!」

「この付近は我が軍の集結地なんだぞ！貴様等に勝機などないのだ、なぜ分からん!?」

「だくからなんだ！御託はいいからさつさと武器捨てて馬降りろや！それか首よこせ！」

「もう諦めろって言つてんだ!!」

濃霧の中、軍の先頭を行つてたバーランの隊が急に騒ぎ出したから何事かと来てみ  
りやこの有様よ。

姿シルエットは見えないが声の響きから察するに割と近距離で怒鳴りあつてゐる。  
どことなく拙いミツドランド語で投降を促す敵の声を、そんな気なんて更々ないバ  
ランの怒鳴り声が押し返す。

何やつてんだコイツら。

「何やつてんだバーラン。向こうの規模は」

「それが分からなくてよ：そう多くはないと思うんだが、なにせ見えねえから」

「俺たちより多いと思うか？」

「まさかあ！……どうだろ」

「どうつてお前：ハツキリしろよ。見合つたからこうなつてんだろうが」

「いやそれがよお——」

聞けば濃すぎる霧にノロノロ進むのが嫌になつたバーランが道を確認する為に斥候を出したらしい。

だが少しして戻ってきた斥候が話したのはクシャーン語。

霧でシルエットだけしか見えなかつたせいで自分トコの奴だと思つてたバーランは当然、ミッドランド語で返した。

「何言つてんだオメー」と。

ここまで来て両者共に「あれ？」つて空気になつた時、送つた本物の斥候が駆け戻つてきて叫んだのが「敵です!!」。

この斥候は斥候で、霧で方向感覚が狂つて見えた武装集団のシルエットをバーラン隊

と誤認してしまい、報告したもののが返ってきたクシャーン語にびっくりして来た道を駆け戻つて来たんだと…。

そして今に至る、と。

ホントに何やつてんだコイツら。

「(てかアレ、援軍なのか新手なのかによるよなア)」

数日前に落とした城の援軍ならせいぜい戦力は互角と見ていい。

が、新手の軍だつた場合は話が変わつてくる。

王都に近くなるほど貴族の階級も上がって、動員してくる軍の規模もデカくなつていく。

歩兵電撃戦でここまで来た俺たちの軍の戦える兵隊は9000弱、うち第2連隊は10数ヶ口後方にいて、ここには約半数の第1連隊しか居ない。

つまりだ、ここで殺りあつてもし相手が新手の軍だつたら最悪第1連隊が再編しづきやいけないダメージを受けかねねえ。

ミッドランド人の兵隊メインで編成してゐる第1と違つて第2はクシャーン人の兵隊がメインだ。

まず間違ひなく同士討ちが起きちまう。

それに――

「アイツさつき『ここは我らの集結地』とか言つたてたよな」

「ンなもんガセだ！」

「だとしても、だ。霧が晴れたら包囲されてました、じや笑えもしねえ」

「引くのか」

「仕方ねえだろ？この霧じやあ罵り合う以外にできる事アねえよ」

不承不承といつた感じに後退の合図を出したバーラン。

この未だ晴れない濃霧の中で突撃する程バーランもバカじやなかつたつて事だ。

視界にいた兵達が溶け込むようにスウツ：つと霧の中へ下がつっていく。

剣を真つ直ぐに突き出して、その切つ先が震む世界で白兵戦なんて悲劇しかうまねえ。

地図の上では平野でも、何処に窪地があるかも、何処にどの規模の敵集団が構えてるかも分からぬ。

だからこそ今は撤退だ。

「（上手くいかねえもんだな…）この辺は大軍が集まれるほどデカい平地じやなかつたはずだが」

ここは周囲を山々に囲まれていて、数本の道がこの平野に繋がつてゐるだけ。数千・数万の軍が集結するだけならともかく、それが退却となればあまりにも難しい

場所だ。

ただでさえ近くの城が落ちたばかりなのに、そんな所で集結なんて無謀な事をするだろうか？

それに地形のせいでここは霧が濃くなりやすい。

そんな視認に苦慮する地で集結なんて事：あるのか？

疑問は残るが第1大隊は下がり始めている。

ボヤボヤしてたら俺自身まではぐれかねない。

「(何がどうなつてやがんだ)」

手綱を引いてかろうじて見える道を引き返す。

霧が晴れた頃にまた戻つてくれればいいさ。

そう自分に言い聞かせて。



正直無茶な命令だと思つていた。

たつた100騎で1万近い敵の足を止めるなんて「死んでこい」と、捨て駒にされたのだと思つた。

願わくば敵が進軍を先延ばしにしてくれないものかと願いながら放つた斥候と入れ替わりで敵の斥候に鉢合させた時は本当に生きた心地がしなかつた。

終わつた。と

濃霧が姿を隠してくれていると言つても規模を掴まれたかもしれない。

そこからはもう必死だつた。

自分が何を叫んだかも覚えてないが、ただ口だけが動いていた。

頭はその機能を放棄した。

いや、させたのだ。

放棄しなければ怖くて舌戦なんて出来なかつたから。

いつ濃霧を切り裂いて敵が現れるか、そんな恐怖を押し殺しながらとにかくデタラメを叫び続けた。

それがつい先程、静かになつた。

「どうだ…引いたのか？」

「はつ、おそらくは」

副官の相槌に大きく息を吐くと強烈な脱力感に涙が溢れた。

「（生きてる…まだ生きている!!）」

怖かつた。

下級貴族とはいえ騎士として、戦で死ぬのを恐れた事など無かつたが捨て駒となつて無為に死にたくは無かつたから。

「戻りましょう。敵が引いたとはいえ再び偵察や斥候を放つてくる可能性は多大にありますから」

「ああ、もう充分だろう」

そうだ。充分なはずだ。

国王陛下が軍を集め、体制を立て直される時間は充分に得られたはずだ。

全ては国のため、国王陛下の為に。

「撤退だ！」

馬の手綱を握る手に力が入る。

おそらく歴史に残るであろう確実な戦果を成し遂げたのだ、と実感出来たから。

# 約束されたチェックメイト

「(ガンビーノも老いたもんだな)」

事のあらましが記された書状を机に放り投げた。

歳のせいと言つてしまえばそこまでだが、此度の采配はあまりにもガンビーノらしくない。

もとより計画遂行に支障なしと分かつてゐるから兎や角言いたくないのに、鬱陶しい程に貴族達が騒ぎ立ててゐる。

ガンビーノの更迭や罷免、はては処刑まで求める声が方々から聞こえてくるのだ。

父王との戦いは派閥決戦の側面もあると理解こそして、いたが馬鹿共の戯言には頭が痛くなるばかりだ。

執務室に椅子の軋む音だけが反響する。

「増援を送るべき…か?」

失策に対する詫び状こそ届けど援軍要請は来ていない。

万全を期すならば送るべきだろうが、送れば貴族達にガンビーノを叩く口実を追加で与えてしまう。

『自分の失態すら自分で拭えぬのか!』と、さも己らが正しいとばかりに責め立てる姿が目に浮かぶ。

噂に聞く多党制の国にある与党のスキヤンダルをここぞとばかりに叩きまくる野党の如くガンビーノを叩くだろう。

ガンビーノの排斥を目論んでいる貴族共なら尚更だ。

「（くそつ…クシャーン王国は末期だと言つたガンビーノの意味がやつと分かつたわ）」仮にも現国王軍を相手に1万の兵だけを率いて、半年足らずで首都に迫つてゐる。

我が配下の他の貴族の誰が真似できる? ようそ誰にもできないだろう。

遅遲と進まず攻勢限界か補給切れで負けるに違いない。

なのに開戦した今も、ガンビーノを敵視する者は減らない。

父王派・皇后派・第2皇子派とてんでばらばら、同じ派閥内ですらいがみ合つてゐるときだ。

「シラット」

「はつ」

部屋の隅、ロウソクの灯りが届かない所から返事が来る。

「ダイバの準備は出来ているのか」

「はい、既に偽装も終わつて何時でも発艦できる状態です」

「うむ」

決めたぞ。

増援は送らない。

「ダイバに伝えよ。合図を受けしだい即応しろと」

「はっ」

ガンビーノがダイバの部隊を無理くり再編成して作らせた空軍とやら。

私の知識に無い型の軍艦、不格好と言うか：あの真つ平らな船が本当に決戦に役立つのか知らないが金にうるさい傭兵あがりのガンビーノが作つた物だ。

無駄なシロモノじやないんだろう。

何より日頃から意見の相違で仲の悪いダイバに頭を下げてまで前線に引っ張つて行つたほどだ。

期待するどしよう。

後は：ああ。

口さがない奴の口も封じねばな

「それとシラット、貴様の部下を数人寄越せ。近く事故にあう者たちを処理してもらい

たい

〔御意〕

この戦争で要らないものは全部捨ててしまおう。  
人も物も、何もかもを。

△とある漁師△

「釣れんのぉ」

いつもは良く釣れるくばなんだ釣りスポット。

どういう訳か今日は朝から糸を垂らしているのにマトモに当たらない。

「じいちゃん…」

「待て待て、も少し粘つてみよう」

魚を逃がすまいとウキを睨み続けるが、孫はとつぶくに釣りに飽きてしまっている。

「なんじゃ」

「見て」

「んん？」

孫の声に誘われて、島影を指差す孫の視線を追う。  
「なんじや……ありやア」

そこには小島サイズはあろう船が漂っていた。

いや、最初は島だと思ったほどだ。

帆枝を引っ掛けた網がその大きな船体の所々に絡み付いて、若い頃に見た沈没船の姿を思い起こさせる。

帆も砲も無い、二階建ての小屋の様なものだけが建つている平たい船だつた。

「幽霊船じや……」

目が離せない。

櫂を握る手に汗が滲んでいくのは分かつた。

「じいちゃん、先っぽに鳥が——」

「……。頭引っ込めるんじや!!」

それを見た瞬間、逃げろと本能が叫んだ気がした。

同時に動けるようになつた老体に鞭打つて必死に櫂を漕いだ。

「（ありやあ鳥じやない！あげな形の鳥がおつてたまるか！）」

幽霊船との距離は数十理はあった。仮に鳥が見えても豆粒サイズがいいところだろうにアレは十分にデカかつた。

この距離で頭ひとつ分はあると映る巨躯に、コウモリに近い羽の影を持つ鳥など聞いた事が無い。

「（はよう村の衆に！あん船は不吉の前兆に違ひねえ）」

「じいちやん…あり何ど？」

「黙つとき！すぐ陸に着くけな！」

何が起きたかなどは大事では無い。

逃げるんじや、一秒でも早くこの海から――